嬉野泉追悼号

ＳＦ同人誌 ボレアス 巻外号

嬉野泉追悼号

目　次

追悼文集……2
レバーのバラード……18
地球一公転……33
吸血観音……34
黄庭狂詩曲……52
カーテンフォール……84
作品リスト……106
編集後記……110

追悼文

菅原 希

嬉野泉こと菅原豊次の娘です。

この度は「ボレアス」編集者秋山様が、父の追悼号を出して下さるとの事で、父に代わりまして、皆様に御礼・ご挨拶をさせて頂きたく「追悼文」を寄せさせて頂きます。

父は「本当は天文学者になりたかった。」とよく口にしていました。

それまで読むだけだったＳＦを書き始めてからは、それが生きがいだった様です。

色々な雑誌に投稿したり、ＳＦの会に入会したり、そして「ボレアス」を主宰させて頂いて、ＳＦのお仲間とふれ合う事はとても楽しかった様です。

気難しい父でしたが、趣味の世界ではとても充実した日々と時間を過ごしていた様で、娘としてもとても嬉しく思っています。

晩年は月に何度か老健で診察をしつつ、主な時間は本を読み、ＳＦ小説を書き、好きなＴＶ（主にクイズ番組や、笑点、何でも鑑定団　ｅｔｃ）を見て過ごしていました。

未曾有の大災害とは言え、この様な形で元気だった父を失ってしまった事は、本当に残念で悔しく思っています。

余談ですが、父は医師として一度も誤診はしませんでした。

人の命を預かる仕事でしたので、父に代わって一つ自慢をしてみましょうか……。

正直私には父の小説は難しい内容でしたが、皆様は面白かったですか？　楽しんで頂けましたでしょうか。

本当に長い間「ボレアス」と父の小説を読んで頂き有難うございました。

父に代わりまして御礼申し上げます。

長きに渡り「ボレアス」を刊行頂いた秋山様にも心から御礼申し上げます。

菅原先生のこと

青山　智樹

菅原先生と始めてあった時のことは覚えていない。ただ、それが三十年ぐらい近い昔であるのは間違いない。菅原先生はぼくがＳＦのファン活動に最初に首を突っ込んだ小松左京研究会の初期メンバーだったからだ。

「奇想天外」誌で矢野徹さんがお題を出してそれに読者が応えて作品にする、という企画が立てられその一位に菅原先生が選ばれるのを見て「うわあ。あの人、凄い人だったんだ」と思ったのを覚えているから、その前なのは間違いない。

大学生になったぼくは「宇宙塵」に参加した。

このあたりで秋山英時さんとも親交を深くしていった。

同時に、ここが菅原先生との強い接点になった。

ちょうどその頃、娘さんが東京の学校に通っている、と言うので娘さんの顔を見がてら毎月のように石巻から自由が丘へおいでになった。大変ですねぇ、というと「いまは新幹線があるから、すぐだ」と答えられた。

やはりネット応募だかなんだかの作品募集に菅原先生が選ばれたことがあった。当時のこととて、ネットというよりコンピューター通信である。菅原先生の所にワープロはあったが、接続環境がない。郵政省メールで手紙をいただき、プリントアウトしてお送りした。お返しに誇張なしに段ボール一箱ほどのサンマをいただいた。サンマは足が速い。とても嫁さんと二人で食べきれる量ではない。実家や友人にお裾分けして、塩焼きにして食べた。お裾分けしたのを後悔した。新鮮で、脂ののった極上のサンマだった。

あんな美味しいサンマを食べたことがない。

医師としての信念からか、菅原先生はプロ作家になろうとはせずにアマチュアに徹した。ぼくはボレアス誌の熱心な読者ではなかったが、「嬉野泉」名義で宇宙塵に発表された作品群は傑作揃いだった。

「天震」「安楽死裁判」「三月来たる」「三月尽」「氷河鉄

道」……。

ぼくなど及びも付かない素晴らしい発想の作品群である。

娘さんが学校を卒業してしまうと、さすがに東京にやってくる回数は減った。

だが、当時まだそれほど普及していなかったワープロを駆使して「ボレアス」誌を創刊した。ボレアス誌の新しい号ができると「ほら、買っていけ」と持ってくる。

お元気だった柴野先生も「菅原先生はほとんど押し売りだよ」と言いながらも笑顔でボレアス誌を受け取っていた。

あれは第何回目の日本ＳＦ大会だったろう？　確か白馬で開かれたやつだ。ぼくと嫁さんは一歳になったかならないかの娘を連れて参加した。宿の都合でどうしても相部屋にならざるを得ない。夫婦別々で見知らぬ人と一緒になっても良いのだが、娘が気にかかる。ほんの赤ん坊なのだ。

菅原先生に同室をお願いした。

夜の企画で娘を嫁さんに託し、自分の企画に出て部屋に帰ると、嫁さんの姿はなく菅原先生が娘を寝かしつけているではないか。

「大変だったんだぞう。鼻つまらせて、チアノーゼ起こしたんで鼻管吸入して、心臓マッサージまでしたんだ」

菅原先生の与太話など気にせず、娘はスースーと寝息を立てている。

ぼくは礼を告げ、娘をおんぶしてカラオケ部屋に向かうと、嫁さんはアニカラを絶唱していた。

医師としての菅原先生はどうだったのだろう？

個人的にはガン告知を受けたことがある（笑）。

どうも右の脇腹が痛い。菅原先生にそのことを話すと

「ちょっと、そこに横になってみい」

とおっしゃる。（たまたま）和室だったのだ。

菅原先生は患部（？）に片手をあて、その上からもう一方の手で軽く叩いた。

「うお」

と、うめくほどの激痛が走った。

「肝臓ガンだな。まあ、持って三ヶ月って所だ。いまのうちに身の回り整理しとけ」

あまり真面目に取らなかったが、後に日赤に行ってバリウムで検査してもらったらこちらの答えはすげないものだった。

「胃でも悪いんでしょう」

菅原先生に

「誤診ですよ」

と告げても笑っているだけだった。

いま思えば残念なのが「菅原衛生博覧会」を見逃したことである。

三十年以上前「ダテコン」と称して菅原先生を中心として地方コンベンションがあったと聴く（ご存じの方がいらしたら是非詳しくお願いします）。ダテコンや、あるいはその他小コンベンションに菅原先生は医学系のスライドを持ち込んで上映したという。その時々のテーマも決まっていて「今回は、遺伝子異常」とか言って、時には食事時に説明付きで上映したという。

「うわぁー」とか「ギャアー」という恐怖の叫びが上がったとも、あるいはみな興味津々で見入っていたとも伝えられるが、真偽のほどは現場にいた方にしか判らないだろう。

思い出深いのが十年ほど前。

石巻に石ノ森萬画館ができてしばらくした時、見物に行こうとの話が持ち上がった。

「おう、こい。案内するぞ」

との、菅原先生の言葉に甘えて十人ほどで石巻に押しかけた。宿まで菅原先生に取ってもらってしまった。

石ノ森記念館は当然、石巻を一望する公園や、伊達政宗が建造した船のレプリカがある博物館、女川漁港とその資料館のような所に連れていってもらった。寿司まで奢ってもらった。

驚いたのが行く先々で「先生、お元気ですか」と道行く人たちが挨拶していく所だった。かなりの名士だったのだ。

中には口さがない人もいて、
「あの人も若い頃は名医だったんだけれどねぇ」
と言ってくる人もいたが、そう言ってくれるからには名医だったのだろうし、多くの人々が菅原先生のお世話になっていたに違いない。
もちろん、嫌がる菅原先生を拝み倒し、お宅にも押しかけた。北上川に沿った、医院と自宅が隣接した黄色い建物である。後になってグーグルアースで北上川左岸を見ていくと「あ、ここだ」と目立つ建物だった。
応接室の書棚にはずらりと古今のＳＦが並び「あ、××がある。初版だ」などと騒ぐと、さすがに苦い顔をして「だから連れてきたくなかったんだ」とおっしゃる。
たぶん、最後に姿をお見かけしたのは去年、柴野先生の通夜だったと思う。
通夜が終わる頃、中折れ帽を被り、マフラーを巻いた方がそそくさと帰ろうとする。菅原先生のいつものスタイルである。
「あれ、菅原先生？」
後ろ姿にそう思ったが、追いかける所まではしなかった。無論、菅原先生なら柴野先生のこととなれば石巻からやってくるだろう。お身体を壊されて入院されたとか、医院を廃業なさったと聞いて心配していたが、まだ神奈川まで出てくる元気があるんだ、と安心した。
地震、津波と聞いて北上川沿いの菅原医院の事を真っ先に思い浮かべた。
被災者の部分にお名前があったが、菅原先生なら、きっと患者ではなく、医師団の方に加わって飛び回っていたに違いない。
いまでもまだ菅原先生は医師として不眠不休で被災者たちを助け、働きすぎて
「あー、疲れた。おれはもう寝る」
とか言って、診療室の仮眠用ソファで眠るようになくなったと信じている。

石巻の夜

岡本 賢一

宇宙塵の旅行で石巻におじゃました時は、いろいろとお世話になりました。

またひとつ、老舗の同人誌が主催者の鬼籍入りと共に消えてしまうことを残念に思います。

ボレアスに掲載しようと思った僕の作品は、ほぼ完成しているのですが、間に合いませんでした。それも心残りです。

今回の災害をふまえて先生はどんな小説を書かれるのでしょうか？

いずれ読ませていただきたく存じます。それまで、僕はこちらで、もう少しがんばります。

ご冥福をお祈りいたします。

追悼 嬉野泉先生

中沢 学

私と嬉野先生との接点は少ない。

ＳＦ大会でペガサスの表紙に引かれて「ボレアス15」を先生手ずから求め、『黄庭狂詩曲』の秀逸な下品さに脱帽し、「ボレアス20」を求めたディラーズルームで、当時は珍しかった秋山氏によるＣＧの表紙を見て、「ＣＧですね」「ＣＧです」と言葉を交わしただけである。

その後、「ボレアス」の編集が秋山氏に委譲されるに際し、投稿をさせてもらうこととなった。

痛快無比の『睡眠魔術』は一気に読まされ、爆笑、喝采ものだった。年齢を考えると、嬉野先生の創作能力は凄まじい。

そして、「ボレアス」は、ＳＦ風味の拙作の発表の場となってくれた。

ありがとうございました、嬉野先生。

あちらでは柴野先生や矢野先生とＳＦ談義に花を咲かせてください。

追悼文

兜木 励悟

私も一応、ＳＦ系の博覧強記（錯乱狂気？）系の物書きに分類されているらしい。アニメの研究本の参考文献に「インド現代政治」「中世の秋」「大予言の嘘」「生き残った帝国ビザンチン」「セーラームーンの秘密」とか列記するのは、確かに我ながら支離滅裂で、錯乱狂気と云われるのも解るのだが。

ＳＦ系で博覧強記系となると、日本だと、小説だったり解説書だったりエッセイだったり様々だが、小松左京、大宮信光、故志水一夫、永瀬唯、故今日泊亜蘭、かんべむさしといった人達が有名所だろうか。そして、菅原豊次さんもその一人であった。

故柴野拓美さんは「ＳＦファンはＳＦだけでなく何にでも興味を持ち、一見無駄な知識がとても豊富なのが望ましい。その点に於いて菅原さんは群を抜いている」と評されていた。例えば、柴野さんは神武天皇陛下から百二十五代の天皇陛下を暗記しておられたが（旧制中学の卒業生は基本的に皆、ここまでは出来たそうだが）、菅原さんの場合は日本神話で最初に現れながら特に何もせずに消えてしまう三体の神から全て記憶している有様だった。たぶん、これは、小松左京さんをも超えている。本業の医学が絡むと更に凄く、黄帝、華佗、ヒポクラテス、ガレノス、パレから「背を伸ばす外科手術」「ハンバーガー・バゼドー」「ラスプーチンの呪術医学」まで、もう、何でもござれだった。また、そういう膨大な知識が創作に生かされる事も多かった。瀬名秀明氏の「パラサイト・イヴ」がベストセラーになった時は、菅原さんの旧作「ミトコンドリア・カタストロフィー」を参考にしたのではないかという噂が流れ、私は「ミトコンドリア・カタストロフィー」収録の物を含めて、「ボレアス」「吸血観音」「宇宙塵」を何冊か編集者に貸し出した物であった。

「氷河鉄道」で、「おしくらまんじゅう」で暖を取るという描写が有ったのを思い出し、東日本大震災の被災者達が寒さに苦しんでいるという報道に、子供達だけでも「おしくらまんじゅう」で暖を取れない物かと思ったりしていたのだが……。「地震」から発想した「天震」という作品も発表していた菅原さんが震災（津波）の犠牲になるとは、皮肉な事だったと云わざるを得まい。

菅原さんのお誘いで「宇宙塵」の人間を主に、石巻にお邪魔した事も忘れられない。日本でも有数の漁港とは云え、石巻は正直、小さな地方都市だった。そういう土地に於いて、実績の有る開業医と云うのは社会的地位が非常に高いのだろう。すれ違う人達の殆どが挨拶し、それに気軽に応える姿はいかに親しまれ尊敬されているのかが良く分かる物だった。この時は柴野さんは同行できなかったのだが、柴野さんは、そういう社会的地位の高さが小説家になろうとするハングリーさを菅原さんから失わせてしまっていて、そのためにあと一歩の所でセミプロに甘んじさせているのではないかとも分析されていた。が、その柴野さんが理想とする文筆家とは兼業であった事も忘れてはなるまい。松島や鯨の博物館にも案内して戴けたし（岡本賢一さんはクジラのペニスの剥製に抱き付いての写真を撮っていた）、食事は海鮮を主に贅沢三昧。魚市場ではマンボウの肝をタダで食べられた（菅原さんは、鮮度に若干疑問を感じたらしく、少しにしろとのお話であったが。噂に聞くほどの美味ではなかったが、こういった経験は物書きにはとにかく大事なので有り難かった）。最年少参加者のＳ姉妹（幼稚園ぐらいだったかな？）も菅原さんに懐いていたし、良い想い出である。

現代中国語こそできない物の漢籍にも詳しい菅原さんには、私の中国や台湾のＳＦ老朋友が来日した際に、時間と金銭に余裕が有れば松島も観光する事にして、その際のアドバイスをお願いしたいとも思っていた。「日本三景全制覇」を目指す華人は、意外にも少なくないので。

皆で石巻を訪問した時の最大傑作はあるタクシー運転手

の発言だろうか。移動のためにタクシー数台に分乗した時、私の乗ったタクシーの運転手が子供の頃に良く菅原医院のお世話になっていたとかで、「ああ、菅原先生のお客さん？私も子供の頃は良く診てもらって、昔は名医だったんですよ」。別に、今は藪と云う意味ではなく、今は医者いらずの身体なので分からないけれど、というぐらいの意味だったのだが、この「昔は名医」は他のタクシーに乗った人達にも瞬時に広まり、大爆笑となったのであった。菅原さんは苦虫を噛み潰したみたいな顔をしていたけれど。ギャグでＳＦ仲間を次々に難病と診察するという冗談を良くやっていたのとは一寸次元が違いますが（私は甲状腺異常を疑われ、いつもの冗談の時とは目の色が違ったので、今も時々甲状腺検査を受けていますが）、いかなる患者も軽く見なかったのでしょう。

「菅原医院の地下に有る、人体実験室、を見たい」「菅原医院の入口に、この門をくぐる者全ての希望を捨てよ、と看板出さない？」「診察室に、医は算術、と額を飾ったら」なんてのも有った。そういう冗談が云えるほど皆が菅原さんと親しかったという事だ。

晩年は体力の限界を感じて自ら医師免許を返上したと聞いている。柴野さんの葬儀や追悼会にも、体力的な問題で出席できなかったとかで、柴野さんの追悼文集にも残念さを滲ませる原稿を寄せられていた。

「宇宙塵」パロディー版用に、（零落れた）私が主人公の時間ＳＦを書かれていらっしゃったのだが、この原稿やデータは行方不明である。前回の「宇宙塵」パロディー版に収録予定が、見付からなかった事もあって変な出版ゴロの作文が強引に押し込まれるという、編集のシンキロウさんも不本意な事態に陥り、その後、流石ゴロだけあって「宇宙塵」の名を悪用されているらしいが、次の「宇宙塵」パロディー版が出るならば、ゴロ問題に対する公式見解と、菅原さんの作品の両方をきちんと載せて汚名を雪ぎ、「宇宙塵」と菅原さんの名誉回復をして欲しいと願うばかりである。

サンマは石巻にかぎる

勝山 海百合

三月十一日の地震と津波の被害が明らかになって、まっさきに心配したのが石巻の菅原先生こと嬉野泉のことだった。北上川の河口近くにお住まいなのを知っていたので。でも、あまりの被害の大きさに、先生がどうなったか考えるのが怖かった。どこかの避難所で「煙草も貴重品だな」と文句を言っていればいいなと思っていた。四月十一日になって、青山智樹から電話があったが、「あのさ、海百合知ってる？」という声に悪い予感がして、知らない、なんにも知らないと返事をし、それからなにがあったの？　と聞き返した。

「菅原先生の遺体が見つかったらしい」

と言われた。

「昔取った杵柄だっつって、避難所で医療ボランティアでもしてるかと思ったんだが」

そのとき、自分がなんと答えたか覚えていない。そんなのいやだとか、仕方がないとか、見つかって良かったとか、そんなことを言ったはずだ。そして、二人で「菅原先生にもらったサンマ、美味しかった」と言いあった。青山智樹と私は、菅原先生が参加しないＳＦ大会で『ボレアス』の売り子をしたお礼に、刺身で食べられるほど新鮮なサンマを送ってもらったことがあるのだ。

津波から二カ月以上経った先日、案内してくれる人があって宮城県の沿岸を見て歩いた。石巻にも行ったが魚市場はまだ水浸し（地盤沈下したので水が引かない）で、海に近い住宅地は基礎だけが並び、路肩に焼け焦げた車が転がっていた。被災した製紙工場の近くは、家や塀、街路樹に溶けた紙がべったりと貼りついて汚れていた。菅原先生の住所があったあたり（たぶんこのあたり？）は何も残っていないように見えた。

津波の強大さ、情け無用の自然災害には驚きと怖れしか抱けなかった。津波、おっかねえ。

菅原先生、色々とお世話になりました。ありがとうございます。いただいた明治書院の『世説新語』、大事にします。

日々、余震の続くなかで慟哭する

立花 生

２０１１年３月１１日の東日本大震災。

死者、不明者が二万数千人という未曾有の巨大地震、そして津波だった。その中に、菅原豊次（嬉野泉）さんが巻きこまれ、死者の名簿に名を連ねてしまうなどと、地震が起こるまでは思うだにしなかったことである。こんな形でお別れしなければならないなんて、世界は本当に無常だと思う。

思えば、嬉野さんの発刊されたＳＦ同人誌「ボレアス」に出会ったのは、私が若かりし頃、仙台のとある書店でだった。その書店の片隅に「ボレアス」第２号があった。ＳＦに憧れてはいたが発表の場のなかった当時の私は、すぐにボレアス入会の手続きをとった。

つたない私の作品を持ち上げて、毎号のように励ましていただいた。私に青春というものがあったとしたら、「ボレアス」抜きには考えられない。それほど重要な季節だった。今は落ちぶれて怠惰になってしまった自分ではあるけれど、そういった輝いていた季節もあったのだ。その場を提供してくれたのが「ボレアス」であり、嬉野さんであった。

悔しいという思いでいっぱいだ。どうしてもう少し「ボレアス」に貢献できなかったのか？　どうして嬉野さんにもっと近づけなかったのか？　嬉野さんのお住まいが石巻という近距離にありながら、一度も訪ねたことはなく、地方コンベンションのダイコンなどで遠くからそのお姿を窺っていた、若き頃のシャイな自分がいた……。

嬉野さんの医学知識を生かした奇想天外なＳＦ、ご高齢でありながらも毎号の旺盛な執筆力、ただただ感心するばかりだった。今後もボレアスが続き、嬉野さんの健筆が冴えわたることを信じて疑わないでいた自分を、残酷な現実が引き裂いた――。

心からのご冥福をお祈り申し上げます。そして長い間ありがとうございました。

菅原（嬉野）氏とのこと

松宮　静雄

菅原豊次（嬉野泉）氏はご夫人ともども（のようですが）東日本大震災の際、家ごと津波に流され、後日ご遺体で発見されたとのこと、誠においたわしいかぎりで、謹んで哀悼申し上げます。

氏はきわめて独創的な優れたＳＦ小説を精力的に量産されてきましたが、今後その新作を読めなくなったのは甚だ残念に思います。

実は、私が氏に直接お逢いしたのは十年以上前のあるＳＦ関係の記念パーティー（「宇宙塵」四十周年だったかも？）でのわずか一回だけ、それも私が氏の席まで行って挨拶し、二三会話を交わした程度でした。

でも、それ以前から氏の主宰するＳＦ同人誌「ボレアス」と私の編集発行するＳＦ短歌同人誌「フロンティア」とは、お互いに寄贈し合うという関係を続けてきました。その間氏からは拙作ＳＦ短歌についてご感想を頂いたり、アンケート回答をして頂いたりもしました。五年前、私の歌集二冊上梓の時にはお褒めの言葉も頂戴しました。

ところで（あまり知られていないかもしれませんが）氏は菅原九馬の名で俳句も作っておられました。私は氏から氏の所属する地域俳句グループの年間合同句集を思いもかけず三度も送って頂きました。当方の「フロンティア」が創刊二十周年記念号（65号）を出すときには氏に寄稿をお願いし、氏がその時はじめて試作したというＳＦ的な俳句「時のごった煮」十句を掲載することができました。次にそのうちの二句だけを紹介して追悼文の結びといたします。

エイリアンの唇のごとチューリップ

瀬戸の夕凪底はナウマン象の墓地

追悼歌

鶴田　英之

余震（なゐ）つづく北風の地に歿したまふ浅き縁の人を弔ふ

いかばかり口惜しかりけむかつてなき大災害を筆になしえで

かつてありこれからもあるただ大地（なゐ）のみじろぐのみと故人言へるか

菅原豊次様への追悼の言

阿部 伸義

石巻で唯一の同人でありました私は、菅原内科医院に何回も足を運び、原稿を直接手渡しできた同人であり、、直接ボレアスの新作を取りに行けた同人でありました。内海橋を二つ渡ると、すぐに菅原先生の自宅病院があり、私は何度菅原医院に通い続けたか分かりません。菅原先生と私の連作、モンスタールンバ、黒い夏などが記憶に新しく、また先生に感謝しなければなりません。また個人的にも先生に五十数通にも及ぶ手紙のやり取りをして、相談にも乗ってもらいました。先生との作風とは違い、先生は私の作品を“ペシシズム”と評し、その都度お褒めの言葉を頂きました。最後に、私は先生に警告した事がありました。いつまで文学を書いているのですか？　と。文学を書くと、その文学を書いたカルマが生じるのですよ。先生も分かってはいたでしょうが、小説家はその責任を取らなければならないのですよ、と。私の場合、それで書くのを止めた。私の場合は、ノイローゼや病気などがあったから。でも先生の場合、そのような軽いものではなかった……。ですが、私は運命を寿命と信じている人間として言わせてもらいました。先生のご冥福と霊生に多くのご多幸がありますように。

アーメン。

作家　嬉野泉の悲報に接して

椎原　悠介

ＳＦ同人誌の火がまたひとつ消えた。

そして嬉野泉の新作を読む機会も、もはや、なくなった。

熟年とは思えぬぐらいエネルギーに満ちた作品を多数執筆された嬉野泉という小説家が日本の未曾有の災害を境にこの世から姿を消した。

生命感にあふれ、苦境をものともせぬ作中の登場人物像を知る読み手としては、避難してどこかでリーダー・シップを発揮されているのではと、ごく普通に期待していた。力量あふれる作品がそんな幻想を抱かせた。

もし津波が無ければ、百歳を超えても作品づくりにいそしんでおられたのではないかと今更ながらに残念に思う。

人は年を経て枯れてゆく。あるいは淡泊になって行く。

しかし嬉野泉氏はＳＦのどんな作中世界に暮らしても、生き抜くと言う事にどん欲で、人生の楽しみ方を追求していた。

本当に惜しい人を失ってしまった。

はるか年上の希望にあふれた人物の死がこんなに心に冷たく響くとは思ってもみなかった。

もう二十年、三十年でも導いて頂きたかった。

多くの事を教えて頂いた事に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

嬉野泉作品よ、永遠なれ！

秋山　英時

最初に出遭った嬉野泉さんの作品は遠い記憶の彼方だが、ＳＦ同人誌「宇宙塵」（主宰・故柴野拓美氏）第一八五号に掲載された「ミトコンドリアン・カタストロフィー」に感銘を受けなければ、「ボレアス」に参加することはなかっただろう。一九八四年のことだ。核となるアイデアは後に一世を風靡する「パラサイトイブ」（瀬名秀明）の先取りで、しかし話の展開は絶望的な人類終焉の夜明けとでもいったものだった。

嬉野さんの小説には行間がない。視線は冷徹な医者の目で、好んで書かれたファース（ファルス）の場合でも、それは同じであった。

通常作家の小説であれば、行間のないことは大きな欠点となる。文章に書き込まれたことだけしか読者に語られないからだ。しかし嬉野さんの場合はそれがプラスに働いて、どう読んでもフィクションとしか思えない内容のお話にノンフィクションの重みを与えた。嬉野さんの小説のリアリティーはそこにある。いまここにある事実、あるいはもう過ぎ去ってしまったが実際に起こった事実として、嬉野さんの小説は描かれている。そこに作家の才気がある。

さらに指摘すれば、嬉野さんの小説には下品さがない。小説に描かれた内容を要約すれば下劣となってしまうような作品の場合でも、嬉野さんの行間のないカメラアイが、通常作品であれば読者が想起するはずの不快感を見事に拭い去ってしまうからだ。

一方、そのことによって失われてしまったものも多い。一例を挙げれば情愛のシーンだが、嬉野さんのセックス描写に色気はない。良くも悪くも事実が事実として描かれているだけだからだ。しかし実際にそれを校正されているときの嬉野さんのお気持ちはそうともいえなかったようで、ボレアス第四十一号に掲載された「女人天国」の校正文と同封のお手紙には、「今読んでみると、こっ恥しくなる一文ですな」といった文面も見られた。

だが幾つかの欠点はあったにせよ、嬉野さんの作品は、その温厚なお人柄とともに多くの読者に長年にわたって愛され続けた。

全世界を見まわしても、ほとんど類似の作品を感じさせない嬉野泉さんの小説作品よ、永遠なれ！　加えてその作品群を精力的に量産してくださった嬉野泉さんに祝杯を！

レバーのバラード

嬉野　泉

未来(むかし)未来(むかし)　その未来(むかし)
患者が一人　死にかけた
　病名末期　肝硬変
治療手段は　一つだけ
　他人の肝を　移植する
されども彼は　重体で
　心腎肺も　冒されて
足もむくめば　顔も腫れ
　腹には黄水　たっぷりと
とても手術は　できそうない
　思案投首　医者たちが
みな集まって　鳩の首
　後何日の　命かな？
ここに外科部の　部長あり
　「この上は彼に　最新の
肝細胞の　点滴注
　彼の脾臓に　入れてやり
脾臓を彼の　肝臓と
　するより手段　他にあるか」
まだ学界も　知りやしない
　彼の研究　テーマなり
犬や猫では　大成功
　されど人では　未経験
内科の医師の　一人言う
　「黙って彼を　死なすより
一か八かの　大博打
　打つが最後の　手段かも」
三人目の医者　厳かに
　その首縦に　振ったので
哀れ患者は　モルモット
　黙って昇る　台の上
黙っているはず　その時は
　彼はたんまり麻酔薬

　肝細胞の　浮遊液
イルリガトールに　入れられて
　先に鋭い　針つけて
ずぶりずぶりと　腹の腔
　目指すは脾内　脾動脈
メチルエチレン　メタ何とか
アルファかんとか　ムコ硫酸
肝細胞を　いつまでも
　生かす世紀の　ご神薬
脾臓にうまく　定着し
　やがて脾臓は　肝の臓

　だが直管に　奇形あり
動静脈の　奇吻合
　エコーＣＴ　ＭＲＩ
あまた兵器を　欺いて
　点滴針は　静脈へ
肝細胞は　心臓へ
　心臓直ちに　送り出す
肝細胞は　全身へ
　やがてこのまま　推移すりゃ
やがて全身　肝になる
　世に珍しき　肝人間
まず誕生の　エピソード

皮膚と歯と骨　肝でない
　脳は肝だが　眼は違う
肝は肝だが　硬変で
　役に立たない　硬さなり

そして彼氏は　肝人間
　いくら飲んでも　酔やしない
こうなったのも　霊薬の
　ムコ硫酸の　なせる業
霊験あらたか　ムコ硫酸
　身体各所で　肝細胞
どっと勝手に　分裂し
　どんどん造る　肝組織
筋肉は肝　肺も肝
　腎も肝なり　心も肝
表は人だが　その内部
　世にも珍し　肝臓人
完成時に　二ヶ月目

お医者様たち　大慌て
　これが漏れたら　訴訟沙汰
何とかしなくちゃ　肝人間
　幸い不治と　家族には
言ってあるから　助かった
　今のうちなら　何とかと
ひそひそ話　鳩の首
　一人目の医者　言うことにゃ
「今のうちなら　不始末も
　知れず何とか　なるだろう
こっそり一服　診断書
　肝硬変で　死にました」
二人目の医者　手を叩き
　「ナイスアイデア　ベリグッド
して方法は　いかんする？」
　三人目の医者　指鳴らし
「外科医の指に　誓っても
　奴はあの世へ　行くはずさ」

　医者が患者に　言うことにゃ
「あなたの肝は　肝硬変
　既に一部は　癌化して
切らねばやがて　死ぬ運命
　だから外科医の　腕信じ
肝を切取り　長生きを」
　肝人間は　馬鹿じゃない
医者の偽り　見破った
　なぜかよくなる　脳の冴え
肝細胞の　働きと
　知ったわけでは　ないけれど
医者たち何か　失敗を
　しでかしおれを　この世から
抹殺する気で　いるらしい
　所は多分　手術室
首謀者多分　外科部長
　それならそ知らぬ　ふりをして
従うと見せ　その後で
　病院こっそり　抜け出して
自宅に戻り　正常の
　家庭生活に　戻りましょ
「分かりましたよ　そうします
　して手術の日　いつですか？」
「善は急げと　申します
　丁度あさって　大安で
難手術には　もってこい」

薬が来たが　飲んだふり
　益々鋭き　六感で
前後不覚に　してしまう
　眠り薬と　知ったから
二時まで彼は　ベッドイン
　二時の時鐘で　起き上がり
深夜の病院　抜け出した
　まっすぐ家へ　帰る道
バスも電車も　もう来ない

タクシー乗る金　持ってない
テクテク二時間　歩いたが
疲れ少しも　感じない
これも全身　肝のため

家へ帰れば　これいかに
家の前には　救急車
見覚えのある　医者もいる
もし逮まれば　身の破滅
よろよろ歩き　公園の
ベンチの上で　溜息を
二つ三つつき　うなだれた
疲れはあまり　ないけれど
したことのない　運動を
たっぷりしたる　お返しで
腹は北山　喉河内
側に一本　紫陽花の
木の葉の緑　おいしそう
思わず一枚　口に入れ
むっとうめいた　そのうまさ
彼は続いて　二三枚
葉を食べ腹は　南山
汁吸い喉も　潤って

和泉のごとく　なりにけり
紫陽花の葉を　食い尽くし
蒲公英の茎　吸い尽くし
足取り軽く　肝人間
公園を出て　大通り
ヒッチハイクを　するつもり

それからざっと　二年間
山で暮らした　肝人は
草や葉を食い　根をすする
しかし健康　そのもので
体重増加　十二キロ
ある日肝人　皮膚に傷
傷からぞろぞろ　肝組織
自分の体　肝臓に
なってしまった　ことを知る
それと同時に　医者たちや
更には普通の　人にさえ
恨み妬みの　仇心
復讐心を　持ったとさ
以来肝人　精出して
山で薬草　茸類
集めて町へ　売りに行き

せっせと金を　貯め続け
貯った金で　肝人は
屋台を一つ　買ったとさ
街で屋台の　焼鳥屋
開いて自分の　肝臓を
焼鳥にして　売るつもり
原料只で　無尽蔵
どんどん自分の　体から
湧くように出る　永久に
それを肝人　生焼けで
客に食わして　やるつもり
希望の客には　レバ刺しを
たっぷり食わして　やるつもり
原料はこれ　無尽蔵
取っても取っても　まだ余る
どんどんできる　身の中で
それをお客が　半生や
レバの刺身で　食ったなら
やがて彼らも　肝人間
仲間殖やして　この世界
肝人世界に　してみしょう
まず第一に　復讐を
したいは憎い　医師三人

肝人の屋台　大はやり
押すな押すなの　盛況で
口から口へと　伝え聞き
店を開かぬ　うちに列
原料はこれ　無尽蔵
皮膚を切れども　痛みなく
どっと溢れる　生レバー
少しの体重　減少も
一夜明ければ　元になる
肝細胞は　旺盛に
分裂繁殖　し続ける
その上肝人　便利な身
食費全然　必要ない
腹減りゃ木の葉　二三枚
渇けば草を　二三本
それが身となる　肝となる
一日実に　六キロも
取っても体　衰えず
皮膚を切っても　ない痛み
痕なく元の　艶やかさ
時々思う　肝人は
おれは不死身に　違いなし

いずれ晴らさん　この恨み
全ての社会の　人たちに
噂聞きつけ　第一の
医者が屋台に　やって来た
「何にします」と　肝人は
はやる心を　抑えつけ
いったが医者は　分からない
屋台の親父が　肝人で
かっての彼の　患者とは
肝人類は　赤ら顔
かっての蒼さ　どこへやら
鼻の赤さも　絶えてなし
眼の黄色さも　絶えてなし
その上黒い　サングラス
顔にぼうぼう　不精髭
こけたる頬は　桃のよう
中にびっしり　肝細胞
時に「レバ刺し」　客が言う
肝人自慢の　生のレバ
薄切りの腕　鮮かに
よだれ滴る　よき眺め
「おやじお前の　レバ刺しは

天下一品　うまい味」
客の誉めるの　聞き医者は
肝人につい　注文を
「おやじおれにも　レバ刺しの
いきのいいとこ　二人前」
医者はたっぷり　レバ刺しを
五人前ほど　平らげて
ほんのり酔って　上機嫌
心の中で　思うよう
こんなレバ刺し　初めてだ
おまけに値段も　安いから
土産にレバ刺し　五人前
それは子供と　女房の
機嫌とるため　持ち帰る
その夜の医者の　体内に
入った肝の　細胞は
八千五百　六十万
そのうち仮に　十分の
一が生きてて　根を張れば
たちまち医者も　肝臓人
一家揃って　肝人間

第二の医者は　次の晩
宣伝惹句に　つられ来る
宣伝したのは　同僚の
昨夜肝人に　なった医者
されど最後の　三人目
外科の部長は　肝嫌い
店に一向　来てくれぬ
彼を肝人に　しなければ
心の怒り　治まらぬ
それから連日　昼間は
にっくき敵の　家狙う
しかし昼には　外科医者は
いつも病院　手術室
けれど土曜の　午下がり
それと日曜　祭日は
出勤せずとも　いいはずと
彼は作戦　変えてみた
しかし休日　彼ゴルフ
ある雨の日の　日曜日
薄ら寒くて　底冷えの
こんな日ならば　いくら彼
ゴルフ気違い　だろうとて
家にいるはず　いいチャンス
こっそり忍び　入るために
彼は裏口　勝手口
しかし隙間は　あるけれど
中から錠が　かけてある
押せども引けども　開かない
隙間狭くて　入れない
隙間に指を　入れたとき
ぱっと裂ける　指の皮
中からどろどろ　肝細胞
意志あるごとく　隙間から
家の中へと　入りけり
アミーバのごと　足出して
錠を見事に　外しけり
開いた戸から　本体が
入ろうとした　その刹那
どっと溢れる　肝細胞
内臓全部　融け出した
続いて骨も　皮膚も融け
最後残った　眼球は
ぽたりと肝の　上に落ち
偽足を出して　家の中
この時医者は　いい機嫌
ゴルフできぬが　無念だが
たまには雨の　日曜日
のんびり疲れ　癒しましょう
ちびりちびりと　ブランデー
急に戸が開き　廊下から
異様な物が　入り来て
外科医師めがけ　這い迫る
いったいこれは　何物だ？
姿形は　アミーバだ
しかし二つの　目玉ある
迫り寄ること　なめくじの
這うにも似たる　気味悪さ
ただしその色　紫赤色
似たる色なら　人間の
肝臓の色　思わせる
しかれど色は　どうあれと
こんな巨大な　肝臓は
無論一度も　見たことない
怪物としか　思われぬ
それがじりじり　迫るのだ

医者は思わず　ひと叫び
　悲鳴を聞いて　駆けつけた
家族怪物　一目見て
　あっとたまぎる　叫び声
すぐに電話を　一一〇番
「もしもし一一〇　番ですか
只今我家に　怪物が
　現われ主人を　殺そうと
してますすぐに　来て下さい
　主人が殺され　かけてます」

　ゴルフクラブは　いい武器だ
発止発止と　撲ったが
　手応えまるで　ありゃしない
敵は一向　怯まない
　一分後には　外科部長
部屋の隅まで　詰められ
　今や外科医者　土壇場に
肝臓人は　這い上がる
　すねから腿へ　また腹へ
悶く外科医の　抵抗も
　物ともせずに　鼻と口
自分の組織の　一片を

　注いで仕事　完了だ
これでやがては　外科医者も
　同じ身分の　肝人間
彼は悠々　引返す
　失神せし医者　後にして
息を潜める　家族たち
　知らぬふりして　悠々と
そして山野に　身を隠す
　パトカーは来る　二時間後
その頃医者は　青い顔
　やっと失神　醒めていた

　警察官も　頸捻る
怪物出たぞと　聞いたけど
　どこにもそれが　見当たらぬ
主人が死ぬと　聞いたけど
　青い顔だが　生きている
青息吐息　ブランディ
　気付け薬の　代わりかな
雲摑むよな　怪事件
　パトカーそのまま　署に帰る

今や完全　肝人間

人間の脚で　歩けない
　人間の手で　握れない
代わりに彼の　どの部でも
　アミーバのごと　脚になる
手になり物も　掴まれる
　その手で木にも　登られる
水に浮かぶも　自由なら
　水に沈むも　思うまま
狭いとこにも　入りこみ
　拡がりゃ十畳　十二畳
されど考え　人間の
　いまだ残れる　その知能
世に報復の　その誓い
　おれがこんなに　なったのに

　奴らはいまだ　人間で
恋をささやく　浮気する
　おれが草木で　飢えや渇
凌いでいるのに　あいつらは
　うまい物食べ　うま酒を
したい放題　したいこと
　やっているのが　憎らしい
だからやってる　連中を

次々おれと　同じ身に
してやるきっと　してやるぞ！
肝臓人の心意気

まず第一に　狙ったは
ふらりふらりと　干鳥足
酔ってくだ巻く　連中だ
瞬き一つ　するうちに
移植完了　肝細胞
酔ったる人は　肝人間

けど人間が　肝人に
なってもしばらく　分からない
肝細胞が　全身に
散らばったのに　その変化
出るのはずっと　後のこと
草木食いたく　なるだけで
普通生活　楽しむに
何ら障害　ありゃしない
自覚症状　まったくない
あるのは一つ　健康感
それとお酒が　嫌になる
やがて社会に　変化出た

酒飲む人が　漸減し
酒商人は　頸捻る
更に肉屋と　魚屋が
今まであんなに　飲んだ人
今まであんなに　食った人
急に飲食い　なぜ止めた？

さてその後の　お話は
あの病院の　医者たちが
主役となって　活躍を
ある日の午後の　外科医師と
内科の医師の　あの二人
外科医師時に　手術中
内科の医者は　見学中
突然変わる　その姿
どろどろどろと　融け出して
寒気するよな　怪物に
なったからみな　たまらない
先争って　部屋の外
なぜ逃げるのか　と医師たちが
互いに見交わす　肝と肝
互いの体に　驚いた
手術室には　鏡あり

彼らは壁を　よじ登り
おのが顔見て　驚いた
あっと叫ばず　卒倒を
しそうになって　眼に涙
こうなったゆえ　止むをえず
仲間をたんと　作ろうと
直ちに作業に　とりかかる
まず第一は　癌患者
その時丁度　手術中
裂かれた腹の　隅までも
どっと入った　肝細胞
ただし彼をば　苦しめた
癌細胞は　死んじゃった
というはつまり　肝細胞
癌を治すと　いうことさ
ただし後々　肝人に

しかし人間　逆襲す
ここに勇敢　なる男
普段はうすのろ　雑用夫
恐怖ということ　知らぬ人
彼はバケツを　一つ持ち
中には一杯　ドライアイス

それをざばっと　肝人へ
　たちまち凍る　肝三つ
肝人気がつきゃ　瓶の中
　瓶の周囲にや　同僚や
看護婦賄い　薬剤師
　事務や警備や　検査技師
レントゲン技師　下足番
　中に一際　目立つ顔
頭禿げたる　院長が
　しげしげと見て　言うことにゃ
「これはおそらく　宇宙人
　医師に変装　違いない
早く警察　自衛隊」
　事務の男が　電話した
やがて来た来た　パトカーが
　幸か不幸か　パトカーは
交通事故で　横転し
　瓶が壊れて　自由の身
ずるずるずると　這い出して
　公園の中　叢に
こっそり身をば　忍ばせる
　幸いここには　草がある
木の実もあれば　葉も繁る

　冬にも枯れない　木もあった
生きて行くには　好都合
　じりじり迫る　太陽の
光は木陰で　防げばいい

さてさてこの日　肝人に
　なった人間　五千人！
てんてこ舞いだよ　警察は
　事故を起こすも　無理からぬ
一般大衆　パニックを
　慌てて田舎へ　疎開など
した人たちも　たんといた
　トキオは今や　半狂乱

　その時元祖　肝人は
ラジオでこれを　知ったとさ
　勿論ラジオは　盗品だ
忍びこんだる　その家の
　ロックを聞いて　勉強を
しながら眠る　受験生
　黙って持って　来た物さ
ついでに彼も　肝人間

ある日のことだ　公園で
　元祖が外科の　医師と会う
肝人同志の　語り合い
　元祖肝人　大獅子吼
「こんな体に　なった上は
　肝人たんと　作り出し
普通の人間　駆逐して
　日本中を　肝人で
いいや世界も　肝人の
　世界にしよう　どうですか？
そして建設　肝帝国」
　医師も直ちに　賛成す
四方の仲間を　駆り集め
　目指すは肝の　帝国だ
大肝帝国　万々歳
　草の根すすり　誓い合う
集う仲間は　五千肝

やがて来た来た　夏が来た
　どこのプールも　超満員
肝人間は　夜のうちに
　プールの底に　張りついて
泳ぐ人来る　時を待つ

身は金箔の　ごと薄く
厚さ一ミリ　ほどもない
だから体は　透明で
いるのに誰も　気づかない
プールの水は　にーがいぞ
ほーほー螢　入るなよ
しかし人間　螢じゃない
あまりの暑さに　耐えかねて
入りゃいつかは　肝人間

さて秋の候　深まって
突如多発の　肝人間
そちらこちらで　変身が
グロテスクなる　肝人間
のたりのたりと　偽足出し
家族は警察　呼ぶけれど
留置所隙間が　広すぎる
一夜で藻抜けの　空となる
ドライアイスは　あるけれど
肝人今は　利口なり
凍った体の　一部をば
とかげのごとく　切り離し
本体被害　被らず

ただし火にのみ　弱かった
その他の物は　銃弾も
刀も槍も　無効なり
たちまち払底　ドライアイス
おののくトキオの　都民たち

秋は次第に　深まって
発生率が　増大す
遂に政府は　断下す
アミーバ状の　宇宙人
発見次第　焼き殺せ！
火炎放射器　自衛隊
シェパード連れて　巡回す
彼らの後から　野良犬と
野良猫どもが　ついて来る
空には舞うや　烏ども
焼鳥たべたさ　ついて来る

ある日トキオの　小学校
児童の凡そ　七割が
突然変身　肝臓人
プールで泳いだ　児らばかり

慌てふためき　先生は
職員室へ　馳せ戻る
されどそこでも　肝臓人
水泳指導　した教師

この日変身　した人は
都内だけでも　約五万
非常事態の　発生だ
政府は軍を　大動員
かくて始まる　レバー狩り
焼鳥臭の　立ちこめて
煙棚びく　干葉までも

されど肝人　負けていず
時に木の上　時に地下
下水道など、よき棲家
その指導者は　第一号
肝臓人の　大ベテラン
下水の中で　指揮を取る
当分このまま　ゲリラ戦
幸いどんな　狭い穴
身を細くして　抜けられる
下水道から　屋内へ

トイレの中で　待てばいい
　トイレの中は　無防備で
侵入口も　開いている
　たやすく侵入　できるはず
かくてトキオは　大混乱
　次々発生　肝臓人

焦った首相　獅子吼える
断固肝人の　絶滅を
　しかし日中　肝人は
下水の中に　身を潜め
　夜来るを待ち　動き出す
これじゃ退治は　とても無理
　その上強い　自衛隊
敵のゲリラに　襲われて
　肝人間に　されちまう
これじゃ到底　退治無理
　最後の決断　首相吼え
肝人間の　根拠地を
　なんでもかんでも　焼き尽くせ！

　命令一過　攻撃隊
さっと飛び立つ　飛行基地
　ナパーム弾を　雨霰
肝人地区へ　投下する
　人々鼻を　びくつかせ
「いい匂いだな　飲みたいな」
　されど肝人に　とり見れば
火災地獄に　ある心地
　あっという間に　二万余の
肝人灰に　なりにけり
　だが滅亡には　ほど遠し
リーダーかくて　思うよう
　密集しては　危ないと
仲間ちりぢり　分散す
　所はいずこ　下水道

　ここに一人の　老学者
ウイルス学の　大権威
　焼鳥臭に　ヒント得る
首相に進言　していわく
「総理あいつら　怪物は
焼けばレバーの　臭いする
　肝臓に近い　生物と
私は考え　結論を
　出して対抗　策たてた
肝を殺すにや　刃物など
　全然いらぬ　必要ない
肝の天敵　ウイルスだ
　特にB型　肝炎の
ウイルス多量に　下水道
　撒けば奴らは　虫の息」
首相はこの案　採用し
　直ちに集める　B型の
肝炎ウイルス　大量に
　下水の中に　流しこむ
効果たちまち　現われて
　ばったばったと　肝人は
小さく縮んで　死んで行く
　これぞ有名　劇症の
命取りなる　B型の
　濃厚感染　重感染
たった十日で　肝人の
　大軍ほとんど　倒れ死ぬ
その後しばらく　肝人の
　姿を誰も　見ていない
首相はほっと　一安心
　これで首都圏　騒がした
怪物どもも　退治した

明日から都民　高枕
学者に文化　勲章を
　与えて功績　称えましょ

しかし残った　者もいた
ただしその数　一握り
　下水の中で　ひっそりと
彼らが生きたは　肝炎の
　それもB型　ウイルスに
一度かかって　濃厚な
　免疫得たから　死にもせず
下水の中で　生き伸びた
　その数四十　七肝士
何かするのに　いい数だ
　もっともするは　ただ一つ
中心に立つ　リーダーは
　いわずと知れた　あの男
みなを集めて　いうことにゃ
「みなさん敵は　暴虐な
多数の仲間を焼き殺し
　残った仲間を　B兵器
その名もB型　肝炎の
　禁止されたる　ウイルスで

アウシュヴィッツや　広島の
　ごとく無残に　殺しけり
虫一寸に　五分のたま
　我々だって　生きている
心も人と　同じよう
　持っているのに　この仕打ち
あまりなことでは　あるまいか？」
　みな一斉に　リーダーに
同意を示し　問いかける
「ならばリーダ　我々は
どうすりゃいい　と考える？」
「少ないけれど　我々は
四十七人　ここにいる
　狙う筆頭　あの男
仲間殺した　張本人
　国の総理と　その腹心
手先となって　我々の
　迫害にこれ　勤めたる
奴らを一人も　逃さずに
　全部肝人　してやろう
こっそり家に　忍びこみ
　家族諸共　肝人に」

　粛々として　下水道
先導するは　元巡査
　何度も首相　官邸の
警備したから　よく分かる
身を細くして　マンホール
　隙間から出て　庭の中
一人二人と　隠れたり
　たとえ鍵穴　たりとても
潜り込むこと　簡単だ
　床を這うだけ　能でない
壁伝わるだけ　芸でない
　天井を這う　なめくじの
ように落ちずに　進まれる
　一番体を　薄くすりゃ
月の光も　透けて見え
　そうなりゃ誰にも　見つからぬ

だけど首相は　不在宅
一同がっかり　したけれど
　待てば海路の　日和とか
天井裏で　ややしばし
　待ってチャンスを　掴みましょ

その頃首相は　宴会だ
変化自在の　宇宙人
全滅させた　お祝いだ
ただし宴会　焼鳥は
ご法度である　出はしない
出席者はこれ　軍官財
各界きっての　大物と
それにあの人　老学者
文化勲章　確定的
全員夜の　明けるまで
飲み明かさんと　する心
首相は何度も　乾杯の
音頭をとって　ご満悦
誰かれとなく　握手して
冗談飛ばして　いうことにや
「もしも私が　怪物で
あったら君と　握手すりゃ
君もなるなる　怪物に」
ぐでんぐでんで　いったとさ
何も知らずに　いったとさ
さてその頃にゃ　官邸で

肝人たちが　活動を
首相はいまだ　来ないので
留守を預かる　二十人
まず血祭に　上げましょう
全て仲間に　してやろう
天井裏から　這い出した
まず第一は　門衛を
繁みの中を　五肝ほど
地面を低く　這って行き
門衛詰所の　隙間から
中へ入って　天井へ
投網のごとく　頭上から
すっぽり二人の　門衛を
包んでしまい　暴れても
いっかな退かず　鼻と口
覆い続けて　離れない
悶く二人は　息できず
ぱくぱく口を　開けたから
どっと細胞　入りこむ
これだけ細胞　入ったら
二人が肝臓　人間に
なる日は明日の　午前中

次に狙うは　玄関の
脇に設けた　警備室
そこに三人　ＳＳが
うつらうつらと　仮眠中
あっさり三人　肝人間

次は首相　令夫人
すやすやすやと　床の中
だからあっさり　肝臓人
かくて首相の　留守の間に
官邸全部　肝人間
門衛二人にゃ　記憶ある
あとは知らずに　肝人間
甘しの夢を　むさぼって
明日の運命　誰ぞ知る

やがて失神　から醒めた
二人の門衛　不思議顔
確かに暴徒に　襲われた
しかし怪我など　どこにもない
顔を見合わせ　いうことにゃ
「あれは確かに　過激派だ
幸い首相は　不在だが

家族に何か　あったなら
おれたち首が　飛んじまう」
すぐに詰所に　電話した
「いやこちらには　何もない
賊が入った　跡もない
しかし万一　過激派が
潜んでいたなら　大変だ
今からそれを　捜査する」
ピストル片手に　三人の
ＳＳ隅なく　捜したが
過激派なんぞ　いやしない
肝人間も　いやしない

ほっと安堵の　胸のうち
門衛二人も　一安心
その頃四十　七肝は
次の要人　家めざす
防衛庁の　長官と
警視総監　この二人
次の仇と　見定めて
二手に分かれ　向かいけり
まだ宴会は　継続中
まだまだ首相　上機嫌

夜がしらじらと　明ける頃
首相は家へ　帰り着く
門衛二人　最敬礼
胸に一物　あるのだが
酔った首相は　その心
神ならぬ身の　知るよしが
とてもじゃないが　ありはせぬ
ＳＳ起立で　迎えたが
首相は軽く　挨拶し
自室に戻り　妻の側
服も脱がずに　転がった
たちまち起こる　大いびき

官房長官　各大臣
政党首脳　平議員
政界元老　警視庁
財界幹部　陸海空
いずれもしたたか　酔払い
帰るや否や　高いびき
されどそのうち　十数人
特に力を　持つ人の
家族や今や　肝人間

ただしも少し　潜伏期
マンホール抜け　下水道
四十七士が　復讐を
遂げて集まる　欠けたるは
一人もおらず　大成功
ただし数多の　人間に
肝細胞を　入れすぎて
大きさ前の　四半分
だけど木の葉や　草の茎
食べればすぐに　また育つ
その上今日の　午前中
仲間がどっと　増えるのさ

こなた首相は　二日酔い
首相夫人は　浮かぬ顔
何だか体が　ちと変だ
嫌いなサラダ　おいしそう
首相は吐き気と　頭痛して
コーヒー一杯　ハムエッグ
その他の物は　入りそない
給仕の女中も　少し変
首相が残した　あのサラダ

食べたい食べたい　食べたいよ
　やがて首相も　女房と
女中の態度に　気がついた
　気がついた時　遅かった
二人はサラダ　鷲掴み
　もぐもぐもぐと　口の中
あっけにとられ　見る首相
　二人はたちまち　別の物
着ていた物は　ふんわりと
　脱げてフロアの　上に落ち
中から出てきた　その物は
　全滅したはず　宇宙人
世に恐ろしき　怪物だ
　首相はわっと　喚きたて
慌て廊下に　飛び出した
　向こうから来る　老執事
向かって叫ぶ　「大変だ！」
　その大声に　応ずるよう
たちまち執事も　怪物に
　怪物執事に　触らぬよう
首相は側を　駆け抜けて
　ＳＳ室へ飛びこんだ
あっと驚く　その部屋に

怪物三匹　いたからだ
　息も絶えだえ　老首相
　門衛室に　向かったが
そこで見たのも　怪物だ
　官邸全部　肝人間
遂に首相は　囲まれて
　無理やり口を　開かせられ
どろどろ入る　肝細胞
　遂に首相も　肝臓人

　防衛庁の　長官も
外務・大蔵　厚生も
　警視総監　両議長
陸海空の　幕僚長
　経済界の　ボスたちも
この日から後　肝人間
　これが知られた　その時は
一大パニック　発生し
　トキオ逃出す　数知れず
無論逃げない　者もいる
　そのほとんどが　肝臓人

やがて日本　全国が

小笠原とか　沖縄の
　離島を除き　島々は
肝人間の　国となる
　外国人は　このことを
いたく恐れて　日本に
　一歩も入る　ことしない
入ればすぐに　恐ろしい
　肝人間に　されるから

　しかし独自に　肝人は
文化科学を　作り出す
　やがて肝人　同志して
結婚し合う　者もある
　子供の肝が　生れくる
肝が次第に　増加して
　町が作られ　市となって
やがて首都まで　定められ
　大統領が　選ばれて
一つの国を　作ったが
　国連加入は　しえっこない
オリンピックも　締出しだ
　第一出られる　競技がない
天井這いなど　種目にゃない

しかし肝国　平和なり

長々続いた　バラードも
肝人間の　繁栄で
めでたく終わりと　しましょうか

註「してみしょう」は原文「してみしょう」。これは「してみせよう」という意味で七五調リズムに合わせたのか？

星群ノベルズ13
オリジナルアンソロジー
「金剛流砂」（一九八八年七月一日）
より

地球一公転（抜粋）

菅原　九馬

凩や天井二三寸動く
麦の秋病者の脈の細かりし
四股を踏む如く大蟾（おおひき）いでにけり
手拭の如く湯冷めをいたしけり
躊ひてそっと泉に手を入れる
只一つ才女の化粧寒の紅
蝶々は二つ折りした恋の文
春の海逆光の海女仁王立ち

鉄瓶に湯の沸く音や霜夜かな
富士一つ残して甲駿山笑ふ
雁風呂やどこの家からよされ節
川向こうの寒念仏や淋しき夜
一山を我物として閑古鳥
駆ける子の帯解けゆく浴衣かな
お勧めは秋鯖味噌煮純米酒

合同句集「海雲」Ⅳ（平成三年八月一日）より

吸血観音

嬉野　泉

1

まったく、厄介なものがはびこっている。厄介なものとは、虱（しらみ）であった。

ＰＣＢ汚染が叫ばれ、ＢＨＣやＤＤＴが製造中止になった時、既にある程度の予感を持っていた人があったのだが、それが事実となったのである。しかも、新種の巨大な虱が、蔓延しているのである。

人体に寄生する虱は三種ある。衣虱（ペディクルス・ベスティメンティ）、頭虱（カピティス）、毛虱（プビス）である。それらはおのおのの領域を、堅く守り、他の種族の領域に踏みいる事はない。所が、この新種の、最大一・五センチに達する吸血観音菩薩は、衣服であれ、頭髪であれ、陰毛であれ、どこにでもつくのだから仕末が悪い。しかも、かつて最も有効で、虱一族の衰退に役立ったＢＨＣやＤＤＴはもうないのである。蝿や、ゴキブリ用の薬品は、いかんせん、人の肌につけるのだから使用出来ない。当初は虱駆除薬を作ったり、研究している製薬会社は一社もなく、当分製造される目処すら立たなかったのだ。

被害にあった人達は、あのＤＤＴやＢＨＣを復活させろ、と叫んだが、既に製造中止したものを、そう早く製造再開出来るわけはない。更に、その前にあの面倒な手続をふんで、法律を改正しなければならないのだ。また、かくも虱の恐怖に人々が脅えているのに、公害反対と称してキャンペーンをはり、ＢＨＣやＤＤＴの製造を邪魔するグループもあるのだから、当分製造される予定などなく、他の代替薬品には全然効果がなく、副作用だけが強く出るだけであった。

全世界同時、しかも、一斉に出現した様な形で出現したのであるが、その初発地区に関しては諸説があった。それを検討してみると、共通点がある。ごく騒がしい所が出生地の嫌疑をかけられているのである。

一説にアフガニスタン。同国では、この虱の出現がソ連兵にパニックを起こした。国民は陰でアラーの神の神威によるもの、と言って喜んでいた。しかし、やがてアフガン人の間にも猖獗（しょうけつ）を極める様になった。

一説にイラン。同国ではこの虱はアメリカ人の人質の間から発生した、と言っている。更に、ＣＩＡの陰謀説も囁かれた。この虱は、アメリカで、敵対国のエネルギーを阻害する為に研究され、造られた虱で、人工衛星からイラン国内にばらまかれ、この作戦にはイスラエルとイラクが加担したそうである。

一説に、タイ・カンボジア国境。難民の間に最初に発生した、と言われ、最も信憑性の高いもの、とされている。

また、度重なるクーデターで安定しないボリビアもがあげられている。その他にもその起源をめぐって、諸説がある。ある人は、この虱が同時発生的に、世界の数か所で、在来種が突然変異した、と言う者もいるし、宇宙人が地球人の力を弱めるため、虱を撒布したという奇説をたてる者もあった。

全世界は困り果てた。痒がった。ＤＤＴや、ＢＨＣを探した。そして、見つけたのである。ある開発途上国が、今なお製造し続けていたのである。その国は、それらの薬品を大量に輸出して、大儲けした。しかし、虱は一か月程で、それらの薬剤に対する耐性を得て、また元の猛威を復活させたのである。

化学的方法で虱を根絶させる事は、困難な仕事と思われた。ＤＤＴやＢＨＣの誘導体で、この虱に効果がありそうな化学物も研究されてはいたが、もし製品化されてもすぐ耐性がつく事が予想され、この虱を殺すのは、別の、全然構造式を異にした薬品でないと駄目ではないか、と考えられた。

日本ではこの頃、やっとＰＣＢに関する法律が改正され、製造の許可がおり、各製薬会社が一勢に、巨利をみこんで製造に着手せんとしていたのであったが、既に輸入されていたＤＤＴやＢＨＣが、虱の耐性によって効果がなくなってしまったのを見て、再生産を中止した。しかし、この虱に対して効果のある薬の研究を続けていたのは当然であった。あたれば、巨利を博するのが目に見えているのだ。

ある商社が、発展途上国から薬を輸入して巨益をあげた実例があるのだ。商社は、いい商売をみこしてその国から大量の薬品を、相手の言い値で輸入した。それを、一グラム二百円で卸した。小売店は一グラム四百円でそれを売った。しかし必要上、人々は争って買ったのである。

所が、それがすぐ効かなくなった。小売店は激昂した群衆の襲う所となり、商社は被害者グループから詐欺で訴えられ、司直の手がのび、関係者が逮捕される有様となった。

その後現在に至るまで、この大型の虱に効く薬はない。ただ硫黄の燻蒸や、濃厚な硫化カリ溶液の浴槽の中に着衣のまま入り、時々頭まですっぽりその中に潜る方法が効果がある、とは言われるものの、中毒する人も多く、奨められない療法である。

とどのつまり、物理的方法しかない。それも一つ一つ、虱を潰す古典的な方法と、それからヒントを得た方法であるが、完全ではない。一つ一つ潰すのは手間がかかる。その方法を発展させた、刃びきした鎌の様な道具で、虱をこしつぶす方法もある。背中などは人にやって貰う必要があるが、つぶしもらすのが多く、何度もやらなければならない。それでも、生き残るのが多くいる、しぶとさを持つ虱なのだ。

この新種の虱は勿論昆虫で、翅はない。脚は六本、長さは同類の他の種より遥かに長く、一・五センチにもなる。親になると血を、一日〇・三ＣＣ吸う。親には二週間でなるのだ。吸われるとひどく痒い。多数にたかられ、痒さの為に発狂する

者さえでた。多量に虱に寄生された者で、身動きの出来ない赤ん坊や、寝たきりの老人などは、急性の貧血のため死亡する者さえ出たのである。

大の大人でも、虱の吸血による貧血のために、たえずふらふらし、満足に働けない者はざらにいる。

この、現代のバンパイヤーは、特に人間の体毛を好む。その毛根にしがみついて外寄生している。勿論、衣服の中にも巣くっている。その生命力は抜群に旺盛で、血を吸わなくとも一週間は楽に生きのびる事が出来、人間に寄生するチャンスを持つ。一匹の雌は毎日、四、五十個の卵を産む。だから、あっという間に増える。卵が孵化(ふか)するのに二日間、そして親には二週間でなれる。いや、その前既に、孵化すると同時に、血を吸い始めるのだ。

この吸血観音の学名は、ペディクルス・インペラトリス。日本の学名を皇帝虱という。だが一般の人々は、そんな名で呼ぶ事はなく、大虱とか吸血観音と呼ぶ。

あっという間に吸血観音は全国に蔓延した。幸いなことに、虱で伝染する、発疹チフスや再帰熱などは、既にこの世界になくなっていた。もし、発疹チフスが発生したら、数千万の死者が出たであろう。しかし、虱は皮膚に数多くの化膿を人間に生じさせた。その皮膚化膿瘡、俗称観音瘡(かんのんがさ)が原因となって、入院する人も相当あった。

この、皇帝虱、吸血観音は、その口嘴(こうし)を真皮の中迄挿入して、血を吸う。不潔な口嘴が、化膿菌を皮膚の下に送りこむのである。それに、下手なとり方をすると、虫体が除かれても口嘴が皮膚の中に残る。それが腐敗して、難治性の、時に深い皮膚の潰瘍さえ造る、瘡が発生するのだ。時として、広汎な皮膚や、皮下組織の化膿性の炎症や、局所淋巴腺の化膿、さては敗血症にまで至り、死の原因となる事すら稀でなかった。

だから、皮膚にくらいついている虱をとるのは技術を要する。一番有効なのは、虱が血をたらふく吸って、口嘴を皮膚からぬいた時、ひっぱってとる方法である。これには技術はいらないが、その代りあの痒さを我慢しなければならない。あの、殺人的痒さを！　とにかく痒いのである。その痒さたるや、前にも言った通り発狂者も出たし、自殺した者すらある、それ程のものなのである。その痒さの原因は、虱が皮膚から口嘴をぬくとき、血がふき出さない為に出す、血止めの効果がある、ヒスタミンに似た物質を含む唾液によるのである。余談ではあるが、この虱の唾液の中の、止血作用のある成分を研究し、止血剤を製造した製薬会社があった。それはよく効いたが、売れ行きは悪かった。注射した部分が腫れあがり、猛烈に痒くなったのである。返品が相つぎ、同社は大損害をうけたといわれる。

も一つ、この虱をとる方法は、まだ血を吸っている最中の虱の腹を、二本の指で柔らかく抓(つま)み、虱をくるくる二、三度廻し、スポンと抜く方法である。これは技術を要する。誰にでも出来るという技術ではない。普通の人がやると、口嘴が体内に

残るのである。やがて、専門的な技術者が出現し、商売として成りたつ様になった。虱一匹につき何円という商売である。彼らは、巨利を得、豪壮な邸宅さえ建てる者もあった。テレビに出演して、虱取りの技術を公開した者もある。何と、あのＮＨＫの、教養番組としてである。

さて、吸血観音は体のどの部分にもくらいついたが、定住するのは衣服、特に下着と、有毛部である。毛の中では、彼らは毛根にくらいついて安穏な生活を送れるのである。長い毛の毛根にしがみついている観音様をとる事は、専門家でも難かしい。

それで行く所迄行った。つるつるに、全身の毛という毛を剃るのが流行したのである。外部から見える毛は、睫毛と鼻毛を除いて、全部剃刀で剃ってしまうのである。これが、最も有効な手段である事はすぐ判明した。もう、おしゃれなどにかまっている時ではない。全国、津々浦々に至る迄、生まれたばかりの赤ん坊から、よぼよぼの老婆に至る迄、俄道心、俄ブリンナーがあふれた。このブリンナーは、眉毛も剃るのである。眼の上はすぐ頭といってもよいし、言い方によっては、後頭部迄額といってもいい。恰好が悪いとみるむきは、男でも眉を書けばいいのである。

それ以外の毛も、腋毛や陰毛は言うまでもなく、肌の毛も一本も残さず、三日にあげず剃って、つるつるにしておく必要があるのである。床屋は、虱採り専門家に劣らず、財を得た。剃刀は、飛ぶ様に売れた。ある気の早い製薬会社は、永久脱毛剤を多額の費用をついやして開発し、売出したが、売れ行きは悪かった。虱がいなくなれば、もとに戻れるのだ。その時、一人だけ全身の毛が一本もないつるつるだったら、恰好が悪いではないか。

そして夏が来た。虱どもは依然として大繁殖を続けていたが、この剃毛（ていもう）作戦によって、やや下火になる傾向を見せていた。そこへ、夏が来たのである。

政府も、虱を駆除すべき絶好のチャンス、そう考えた。外でも内でも、裸でいよう。そういうキャッチフレーズのもと、裸運動を提唱したのである。まず、子供達が裸になった。勿論、どこも隠さない。そしてやがて、一部の軽薄な青年男女がそれにならった。

それらの人々によって、裸でいると虱がつきにくく、ついてもすぐ発見され、咬みつかれる前に駆除出来る事が判明したのである。殊に、全身に毛がない場合はそうであった。毛を探して、もそもそ蠢（うごめ）いているうちに、直ちに発見され、潰す事が簡単に出来るのだ。裸になった人々は、安心して生活する事が出来た。

かくて、七月の中旬になると、日本中の、半数をオーバーする男女が裸で、暮し、働き、食べ、そして眠る様になったのである。

虱共には大打撃であった。

しかし、裸でいると困る事もあった。殊に男には。だがそれ

にも、やがて慣れた。
衣料業界には泣きっ面の夏であった。それと、ポルノ映画や雑誌、その他の業界にも。
だが、夏はやがて過ぎた。人々は衣服を着た。といっても、かつての様な衣服ではない。あのウェットスーツの様な、体にぴったりと密着した、ゴムかビニール製の衣服である。それで顔面の僅かな部分を除き、全身を覆うのである。寒い日には、その上にコートをはしょればいいのだ。今度は、ゴムやビニール関係の業者がうるおった。
しかし、ゴムやビニールの中では体がむれる。皮膚病の薬の売れゆきが、盛んになった。
晩秋、冬、そして早春から春。まだ虱はざらに見られる。前程の威力はなくなったが、どこにでも、ふんだんに見られる動物である事は間違いない。

2

「やあ、皆、お早よう」
課長の大滝が入ってきた。三つ揃いにネクタイの、フォーマルな服装をしている。頭髪もやや薄い、ちょっと白が混ったのを長々とのばし、眉毛もそってはいない。彼は上着をハンガーに吊し、それをぱたぱたと備えつけの竹の鞭で叩いた。五つ六つ、白いものが床に落ちた。彼はそれを踏み潰した。勿論皇帝虱、いう所の吸血観音である。
「いいですな、課長は」
課員の山本が言った。こっちの方は、てかてかの坊主頭、眉毛まで剃っていて、顔面と額より少し上の頭部を除いて、全身をぴったりしたゴムのウェットスーツの様な普段着で覆っている。そのスーツの上に、寒い時はコートを着る。これが彼らの通勤着である。
「そねむな、そねむな」
にこにこ笑いながら大滝は、そう言って自席に坐った。
色とりどりの、ウェットスーツの男女が腰かけて仕事をしている。女の子は赤や黄や菫色や青などの、色が入り混った、カラフルなウェットスーツでなく、ラウススーツを着ている。ラウススーツがこんなにカラフルになったのは、ここ数か月の流行である。男の方は、大体グレイか、紺か、茶系統の単色のラウススーツである。この頃は黒の喪ウェットスーツや、白の婚礼用の品物まで売り出されているという。
体の線がくっきり浮き出て、よき眺めじゃわい、と女の子達の肉体の線を眼で追って、大滝はやに下った。ヌードと変りがない眺めである。だが、僅かに出ている頭部が、どの子も尼僧スタイルなのが、マイナスとなる。
妊娠した時は困るだろうな、と大滝は思っている。妊娠すればすぐ判る。そして、次第に腹がせり出して来たら、ラウススーツが裂けかねない。

いつも、虱から身を守るために、ラウススーツを、寝る時も着ていなければならないのは、患わしいだろうな、と大滝は思っている。彼の妻もラウススーツを着ている。汗をかいても外へ発散せず、体表を流れ、躯幹のものは股間に溜る。それで汗疹が、下腹部から股間にかけてうんとでる。表面から掻いても、それ程効果はない。あまり強く掻くとゴムが破れるおそれがある。破れて、そこから虱が侵入したら……。汗疹よりひどい事になるだろう。

汗疹ならまだいい。今、いんきんたむしが大流行しているそうである。当然の事であろう。

鼠蹊部に、汗ぬきの穴があいてるラウススーツが売り出された事があった。しかし、その穴からよく吸血観音が入りこむので、やがて発売されなくなった。ごく小さい穴なのだそうだが、それを着ていた人は皆虱に入りこまれたという。

今のやつは、穴の外にもう一枚、ゴムが冠さっている。上のゴムをはずすと、溜っていた汗が外へ流れ出すというが、それ程の効果はないそうである。穴が、ごく小さいからだそうだ。

一番いいのは、風呂である。これが汗疹やいんきん田虫予防には一番いい。今、大滝の会社では午前と午後に二回、全員を交替に風呂に入れ、皮膚病を予防している。

「課長、これに判を」

大下さんが来て書類を出した。彼女は、かつては課一の美女という定評があった。しかし、吸血観音が猛威をふるう様になってから、彼女の評価が下がった。丸坊主になった彼女の、頭蓋骨の形がごく悪く、ラウススーツを通して見える彼女の肉体も、胸部がぺしゃんこで、やや猫背で、ヒップの半球が下降ぎみで、大腿骨が湾曲していて、見るにたえぬ無惨さだったため、忽ち人気が下降したのだ。虱以前、即ちＢＬの時代の彼女は、申し分なく美しかった。その笑顔は女神の様であった。神秘的な美貌、と言う者すらあった。しかし、虱以後、ＡＬの現在は、その評判はすっかり下落した。そして彼女は目立って沈鬱となり、あまり笑わなくなった。

「ああ、これだね」

彼はポン、と判をおした。今は、かつては見むきもされず、二十七歳になってやや売れ残りのハイミスの感じのあった、村田嬢がかつての大下嬢のおかれていた地位にあって、男どもにちやほやされている。彼女は、頭蓋骨の骨相が極めていい。そばに行って、頬ずりしたくなる様な、恰好のよさである。その上、ラウススーツに覆われた肉体の線のいい事！　胸も腰も、ヒップも、申し分のない曲線を造っている。若い連中の中に、ミロのヴィーナスより美しい、と言う者がいる位だ。それに、ヴィーナスの丘が、下から鮮やかな、しかも魅惑的な曲線で盛りあがっている。ラウススーツのあまりぴったりしたのを着すぎた若い男が、その丘に視線をやって、自分と同じ個所に変化を起こさせてしまい、顔をしかめるのを、大滝はよく目撃している。ラウススーツのぴったりしたのを着て、勃起させるとご

く痛いであろう。
「有難うございました」
一礼し、貧弱な背中と尻を彼に見せ、大下嬢は自席に戻った。ラウススーツが、尻の割目に食いこんでいる。それを見ても大滝は興奮しはしない。よく見ると、肛門の形や貝殻の形まで判る。ヌード同然なのである。大下嬢のそれを見ても大滝は興奮しないが、そのいい年をした彼も、村田嬢の同じ部分を見た時は興奮した。
大下さんを、モーテルに連れていく事を、何度も妄想したっけな、と思った。行って、裸にしたら幻滅を感じたであろう。でも、そこは勘定高い中年男の彼である。やるだけの事はやったであろう。だが、今はそんな所へはいけない。モーテルに行き、事を行おうとして裸になったら、すぐに何千、何万という虱に襲撃される。そんな所の虱は飢えている。餌がこないからである。暫らく前、モーテルですっかり血を吸いとられた男女の話が、新聞にのっていた。
もっとも、俺は大丈夫だ、と考えた。なぜか彼には虱がたからないのである。今度の騒ぎがあって以来、一度も食われた事がない。
「お前は虫が好かん奴だからさ」
同じ課長で親友の本山が言った。しかし、何といわれても気にしない。虱に食われない、なんて、こんないい事があろうか。そのため、坊主にもならず、普通の服も着れる。あなたを検査させてくれ、といって、大学病院から医者達がしつこく何度もおしかけて来たのには、閉口したが。こんな、虱に好かれない人間が、千人に一人はいるらしい。でも会社では大滝一人である。遺伝するらしく、大滝の子供二人にも虱はたからない。大滝家の虱は食糧不足である。対象が、大滝の妻一人しかいないのだから。
大滝がトイレに立った。立ち上がりながら、周囲を見渡した。皆、熱心に仕事をしていた。肉体の線を露わにしながら。村田嬢の背中が、やはり一番魅力的である。背から腰にかけて、ぎゅっとくびれ、その下、尻の所でまた大きく拡がる。臀に、えくぼが左右に一つづつ、出たり消えたりするのが特に魅惑的である。大滝はそれを見ているうち、勃起しそうになったので、慌ててトイレに急いだ。歩きながら、彼女とモーテルに行く事を考えてしまい、更に興奮してきたので、慌ててベッドの上で吸血観音にたかられ、全身を真っ白にした彼女を連想し、興奮を鎮めた。
「やあ」トイレの入口で、課長仲間の本山にあった。羨ましそうな顔で、昔のままのスタイルの大滝を見た。
二人は並んで放尿した。大滝はチャックをはずし、すぐ放尿し始めたが、本山の方はすぐには出せない。あの部分はチャックではなく、二枚のゴムを虱の入れぬ様に複雑に重ねあわせている。もっとも、表から見ると一枚のゴムで出来ている様にしか見えない。はずしにくい構造になっているので、放尿に時間

がかかる。年配者には、もっとそこがはずれやすい、だぶだぶの構造になっているのもあるが、年の割にしゃれ男の彼は、若い者と同じ製品を着ているのだ。チャックの製品はない。チャックの部分に、虱が卵を産みつけ、チャックを開いたとき、孵化した幼虱が内部に侵入するからだそうである。

若い男用のスーツを着ているにもかかわらず、いや、そんなものを着ているから尚更なのであろうが、彼のラウススーツを着た恰好は、お世辞にもいいとは言えない。腹が膨れ、胸部の、乳のあたりが女の様に膨れ、脂肪が臀部に厚く堆積している。以前は、話せる課長として女の子にも人気の高かった本山なのだが、今は、特に女性社員の人気はゼロである。

「大滝」放尿し終わろうとしていた大滝に、本山が声をかけた。

「何だね」一物をふって、雫をきりながら、大滝は答えた。

「すまん。今日は特にぴたっ、とあっているとみえ、出てこん。君、出してくれ」

「やれやれ。だから無理して若者むきのでなく、年配者むきのにすればいいのに」

「今迄はこんな事がなかったんだ」

大滝の、細くて長い指は、簡単に本山のペニスを出してやった。ペニスが出ると、周囲からゴムが寄ってきて、ペニスの根本を隙間なく塞ぐ。ここから虱が入りこんで来ては大変である。大便や、女性のあれの時も、隙間は最小限しか開かないつくりになっている。さぞかし、不潔な事であろう、と大滝はいつも思う。赤ん坊のおむつも総ゴム製という。さぞかし、赤ん坊のその辺は物凄いであろう。そういえば、この頃赤ん坊の死亡率が増加しているという。

「有難う」本山は放尿し始めた。大滝は手を入念に洗った。ホモでもないのに、変なものを抓(つま)んでしまったからである。所が、洗い終ってハンカチで手をふいている時、また本山に呼ばれた。

「どうしたんだ?」

「今度は中に入らなくなったんだ。入れてくれ」

あまりゴムが緊くペニスの根本を絞めつけたので、ペニスが鬱血し、膨張したので、元に戻らなくなったのである。

大騒ぎとなった。大滝の手では元に戻らない。それで課員を呼び、誰かれの手をわずらわして元に戻そうとしたが、いっかなスーツの下へ戻らず、根本が緊縛されているのと、誰かれの手によって刺激された為に、次第に大きさを増し、見た事もない巨大さとなった。後から来た者はあっ、と驚きの声をあげ、その声をききつけ、女子社員迄が見に来て、悲鳴とも嘆声ともつかない声をあげた。その色も赤紫色を通りこして、ぶどう色——といっても明るいマスカットやデラウェアの色ではない——を呈した。

「どうしたんだ?」

石持部長が葉巻をくわえ、悠然と現れた。

「あ、部長。見て下さい、課長のペニスを!」

「ワッ！」
部長も驚き、くわえていた葉巻を落としてしまった。それが怒張した亀頭に命中したからたまらない。
「ア、ツウ」
本山が悲鳴をあげたが、とたんにさしもの大ペニスが急速に縮小し、スポン、と音をたててラウススーツの中におさまってしまった。
「ア――」あっ気にとられて、一同が叫び声をあげた。一人、本山だけは、
「ああ、熱かった。でも助かった。一時は切らなならんと思った所だった。部長、有難うございました」
深々と頭を垂れた。しかし部長は、彼の方を見ず、トイレの床に転っている葉巻をおしそうな顔で見ていた。

3

ともかく、本山の事件は大騒ぎであった。暫らく仕事が手につく者は誰もいなかった。男子社員は、笑いながら話しあっていたし、女子社員も、赤くなりながら、そして笑いながら、話しあっていた。内容は、勿論本山課長の、あのペニスの話にきまっていた。
「しかし、あんなに大きくなるものなのかねえ。びっくりしたよ」
大滝もその話をしていた。相手は、山木という課員で、話好きで、かつ色々な事を細かく知っている男であった。
「課長、僕は前に慰安旅行で温泉に行ったとき、本山課長のを見た事がありますが、むしろ短小といった方がよい位の代物でしたがねえ」
「ふーん。とてもでないが、短小だなんて思えないな、あれが」
「医学的に言いますと、拿捕陰茎（だほいんけい）、というんだそうです」
「よく知ってるな」
「色々と読んでいますからね。よくワギニスムスの時なる状態なんだそうです」
「へーえ」
「このラウススーツは完全防水、このまま海に入っても水を通さない、という代物ですが、あの排尿の時は、時にあんな事故をおこし、製造元でも頭を痛めているそうです。今に改良型が出、あんな事故はなくなるかもしれませんが。ですが、火をおっつけると小さくなる、って事は聞いていませんでした。教えてやりたいですな、製造元に。普通は何とかなりますが、ひどい場合は外科へ連れて行って切開し、鬱血をとってやらなければならないそうです」
「痛いだろうな」
大滝は顔をしかめた。
「麻酔はかけるでしょうが。所が、一人、自然に戻った男がい

るそうです」
「どうしてだ？」
「立小便してたら、本山さんみたいになり、苦しんでいたそうです。所がそこは不潔な場所で、どこからともなく虱が集ってきて、ペニスから血を吸ったんだそうです。すると小さくなった」
「なる程、毒を以って毒を制すだな」
二人は笑った。大滝が言った。
「本山君も若い気をおこさず、年配用のラウススーツを着ればいいんだ」
その日は、ずっと本山課長の噂であけた。所がそれ以来、大滝には面白くない事がおこったのである。何と、俄に本山が女子社員にもてだしたのである。
その二日後、新しい事件が発生した。課員の若い香川という男が、外から真っ蒼な顔になってあたふたと帰って来てて、叫んだのである。
「誰か、助けてくれ！」
彼はばったり、うつ伏せに倒れた。課員達は集ってきたが、誰も彼を助け起こそうとする者はなく、血の気の失せた顔を見あわせあうだけだった。
彼の尻の部分のラウススーツが、十センチ平方位、破れており、そこに、それこそ立錐（りっすい）の余地もない位に、虱がわんさとくらいついて、血を吸っていたのである。
誰も、手を出そうとする者はいなかった。
「救急車！」
誰かが叫んだ。すぐ一人が電話した。そして理由を説明した。
「え？　何ですって？　そんなのには救急車は回せない？」
ガチャン、と彼は受話器をおいて、言った。
「怪我でも急病でもない、虱にたかられた位のには、救急車は出動出来んそうだ」
よし、俺が男になってやろう、と大滝は思った。香川は、課一番の美男子で、色も白く、背も高い独身の、この課のみならず、社中の女性のあこがれの的であった。その証拠に、他の課からも独身の女子社員が、ぞろぞろ、集まってきていた。この連中の眼の前で香川を助ければ、俺の男があがり、本山と同じ位女にちやほやされる様になるかもしれない、彼はそう思ったのだ。
「俺にまかせろ」
彼はそう言って、皆の前に出た。虱に嫌われている、という定評のある大滝である。皆は彼を前におし出す様にして、通した。
香川は、まだうつぶせになっていた。尻の破れ目に、虱が、なんと五センチ位も盛り上がって、おしあいへしあい、動きながら、彼の皮膚に達し、少しでも血を吸おう、とひしめきあっているのである。
「誰か、医務室からドライアイスをもってきてくれ」

医師は常駐していないが、医務室はある。急に海外出張の社員が出ると、近くの医師が来て、予防注射をする事がある。そのワクチンがいつも、たっぷりドライアイスをいれたアイスボックスの中に入れてあるのを、思い出したのである。

香川は、失神していた。恐怖のあまりであろう。しかし、失神したので痒みを感じなくてすんで、かえってよかったであろう。彼の顔面は蒼白であった。失神迄おこさせる強度の精神的ショックの他に、虱に大量の血を吸われて、本物の貧血になり始めているのかもしれなかった。これ迄、若い強壮な成人が虱に血を吸われて死ぬ、という事は例のモーテルの事件の他、あまりなかった。死ぬのは殆んど乳幼児か、寝たきりの老人に限られていたが、しかし今、皆がラウススーツで身を堅めた為、虱共は飢えている。その飢えている虱の大群が、飽きる位血を吸ったとすれば、成人でも失血死するかもしれない。

わいわいがやがや、社員の、特に女の子が心配して騒いでいた。泣き出す者もいた。

「大丈夫か、香川君は、大滝課長」

石持部長も来ていた。

「ええ。若いですから、大丈夫だと思います」

あんたの年齢だったら、判らないな、と思いながら大滝は答えた。相変らず、葉巻をくわえている。大滝は石持部長が何となく好きではない。やり手だが、気障だからである。所謂、虫が好かない、という奴だが、今この会社で、一番虫が好かない人間は、大滝自身であろう。

「課長、持ってきました」

課員の宝田が、タオルに包んだ、相当大きなドライアイスの塊を持ってきた。大滝はそれを受けとった。タオルの上から、指が痛くなる位の冷たさを感じた。

「よし、準備は完了した。誰か廊下にビニールを敷いて、その上に香川君を運んでくれ。ここでは虱が床に落ちて、生き還ってまたいたずらするといかん」

すぐ用意され、香川は廊下に運ばれ、ビニールの上に寝かされた。まだ失神していた。廊下だから、更に大勢の社員が見にきた。

その連中が凝視する中で、大滝はドライアイスを虱にあてた。虱はすぐ凍って、上層の奴からぼろぼろ、ビニールの上に落ちた。最後に、直接肌にくらいついていた、血で真っ赤に膨れあがった奴も凍って口嘴を放した。香川は助かった。しかし、彼の局部の皮膚は、赤紫色となり、丸い発疹がぶつぶつと噴き出し、虱の刺口が血をにじませ、数百本の針をまとめて刺した程の密度で残っていた。彼は、尻に、虱による刺傷と、凍傷をうけたのである。

ビニールに包まれた冷凍虱は、相当の量があった。重さもかなりあり、物好きが医務室の秤で計測したら、五百グラムもあった。半分が香川の血だとしても、大した量であるには違いない。

虱は、金属のトレイの中に入れられ、アルコールをかけられてから焼き殺された。

香川は、近所の医者が往診し、強心剤を射ったら失神から醒めた。醒めるとすぐ、痒い、痒いを連発して、尻をがりがり掻きむしった。顔は、まだ蒼ざめていた。

「どうしたんだ、香川君」

「はあ」掻きながら、香川は答えた。「課長、私は書類を届けに、役所にいきました。その帰りに、バスに乗り遅れそうになったので、馳けたんです。そうしたら、誰かが捨てたバナナの皮を踏んずけてしまい、尻餅をついてしまったんです」

「ふーん。だが、尻餅位では破れる筈はないだろう」

「所が課長、この頃のラウススーツは、何かと同じで、次第にゴムの厚さが薄くなってきているのをご存知なのですか。折悪く、私は今日最新式の奴を着てきたんです。ですが、尻餅をついても私は尻に手をあててみる余裕はありませんでした。バスが来てましたし、まさか、あれ位で破れるとは思ってもいませんでしたし。明日からは絶対薄手の奴は着ない事にします……。それで急いで乗りこんだのですが。バスや電車には裸では乗るな、と言われてますが、本当にその通りです。シートの隙間や、その他、隙間という隙間からぞろぞろと……。私の尻をめざして這い出して来て……。やっとの思いでここ迄辿りついたのです」

「酷い目にあったな」

「はあ、死ぬ想いでした。課長、今日は帰らして頂けないでしょうか。気分が悪くて、たまりません」

「いいさ、帰りたまえ。だが、尻をそのままにしておくと、また虱に襲われるぞ。そうだ、ガムテープで蓋をしてやろう」

「私がやりますわ、課長」

いつ、この医務室に入ってきたのか、あの肉体美の村田嬢が、すぐガムテープを探して来て、香川の尻にはってやった。

その後、大滝はゴムが破れて虱に襲われたのを、二度見た。やはり、薄いゴム程破れやすい様であった。一例は煙草の火の不仕末で、少しの焼けこげが、ぱんと張っている為か、大きく口を開いたのであった。やはり、虱の大群がその露出面めがけて殺到するのである。

そして、また、夏となった。暑さで誰も衣服を着ていられなくなった。虱が、再び跳梁（ちょうりょう）し始めた。

4

長髪、開襟ながらシャツ、下着も着ている。ズボン、ソックス、そしてメッシュながら皮靴。こんな服装をしているのは大滝一人である。虱に嫌われている者ですら全裸となっているのだ。大滝は、一方では得意であり、一方ではいくらか恥ずかしい。男も女も、もうあのラウススーツを着ている者は百人に一人もいない。股間だけ、あのゴムのパンツをはいて隠している

者があるが、あれは欠陥人間に違いあるまい、と大滝は考えている。暑くて、むれて困ると考えられるのに、はいているのである。大欠陥があの部に存するのであろう。

大滝はじろじろ、皆に見られた。パンダでも見る様な眼で彼を見る。男も、女も、子供も。彼は、実の所、女性の、一糸所か一毛もまとわないヌードを、時間をかけて観賞したいのであるが、衆目が皆、着衣の彼に集中しているので、そう時間をかけている事は出来ない。

オールヌード。夏はおそらく、どこの国でもこれが当り前なのであろう。ポルノ雑誌などは見むきもされない。一歩外へ出れば、生のヌードを、たっぷりおがめるのだ。

虱。あのラウススーツを脱ぐと、虱はまた人間にたかってきた。だが、裸でいると、それはすぐ除去出来る。街中で裸の人間が、あの猿山の猿の様に、お互いの体表の虱をとりあっている光景がふんだんに見られる。また、プロの虱とりが、一匹何円かで街頭で商売しているのにもよくお目にかかる。

それらの裸の人達は、体の毛を一本残らず剃っている。理髪店、いや理毛店で。

大滝がその理毛店に入った。大きな店で、全裸の理毛師達が十人以上もいて、忙しく立ち働いている。

「やあ」声をかけて彼は悠然と入っていった。店主始め全従業員が、目礼した。毛を剃られていた客や、待っている客が、彼を羨望の眼で見た。

「少し時間がある様だね」

「ええ。三十分位、お待ち願えますか」

店主の中西が言った。

「ああ、待たして貰おう」

彼は全裸の客が三人、腰をおろして待っている長椅子の、あいている所に腰をかけた。両隣は女性で、髪や陰毛が二センチ位のびている。二センチならいい。三センチになると、危い。虱の危険性がある。

左隣の女性の襟足に、皇帝陛下が鎮座していた。

「襟首に虱がついていますよ。とってあげましょうか」

「お願いしますわ」

女性は言った。肉づきのいい、乳房の豊かな若い女だ。彼は欲情した。短い毛の隙間から、活断層がちらちら見えたからである。彼は興奮もした。しかし、外からはその度合が見えない。十台並んだ、全身剃毛用のリクライニングシートの、こちらから三番目の男の様に。その若い男は、会陰部の剃毛をして貰っている所であった。担当の理毛師は、うら若い、乳首がピンク色をした女性であった。たっぷりシェービングホームを塗りたてられ、邪魔なペニスが彼女の手でそっちへ押しやられ、こっちへ押しやられているうち、興奮してしまったのである。剃るには、かえってこうなった方がいいらしい。術者は中腰になって剃っていた。大滝の方に、尻をむけて。

大滝はパイプと楊子を出した。パイプのやにを楊子でほじっ

て、それを虱の体に塗った。手頃で手軽な、駆除法である。虱はやがて皮膚を離れて落ち、大滝はそれを踏みつぶした。

「落ちましたよ」

「有難うございます」

十人の、今理毛されている人のうち、男の客は五人で、そのうちの四人はまだ頭や髭や、せいぜい胸毛を剃っている段階であり、あの若い男だけが陰毛の段階である。そして剃毛が終り、そのあとクリームをぬりたくられていた。新米と見え、それは丁寧すぎた。

「もうやめて下さい！」

若い男は叫んだが、もう遅かった。ピュッと、白濁した液がとんで、ちょうど理毛師が、ペニスを斜に抓(つま)んでいたから、それは隣席の、ちょうど陰毛を剃りつつあった為、開脚していた女性の、その部分に落下したのである。

その女性は三十年配の、既婚者らしい女であった。忽ち、騒ぎがおこった。

「まあ、何てことしたんです！　私、夫があるんですよ！　それなのに、他人の精液をうけて、もしあなたの子供が出来たら、どうすればいいんです！　私、訴えます」

誰も、この女性に同情するものはいない。皆、くすくす笑っていた。勿論、大滝も笑った。若い男は、まっ赤になって恥ずかしそうである。

夫人は更に息まいた。しかし、理毛店主が仲に入り、夫人は洗髪用のシャワーで、長時間洗滌されてけりがついた。若い男はいつの間にか、こそこそと逃げる様に帰って行った。夫人は長い時間シャワーを敏感な所にあび、わけの判らぬ声をもらし、眼をとろんとさせ、口から涎をたらした。要するに、エクスタシーを感じているのであった。

男も女も全裸であった、殊に局所の剃毛の時は、男性が興奮するのがはっきり判った。そうでなくとも、女達が局所の剃毛の時、あられのないラーゲをとるのが、直接や、鏡に映った間接の姿で見えるので、眼をつぶっていなければ、興奮をとめる事が困難であった。いや、眼をつぶっていても、女の理毛師が全裸で、剃って貰うとき、肌をぴったりとおっつける事もあるのだ。

大滝も興奮したが、彼は誰にも覚られずにすむのである。最近、年のせいでやや下降気味の彼のポテンツであるが、理毛店に来た夜は、妻に対して充分義務を果たす事が出来るのである。

彼の順番が来た。若くて、乳房と活断層の割目の大きな女性が、彼を呼んだ。

「全身ではないのでございますね」

「ああ。頭の調髪と、髭だ。眉は残しててくれ。頭は裾だけ。前髪の長さを少し、短目に」

「はい、判りました」

女は仕事を始めた。

「宜しうございますこと、虱に好かれませんで」

「ああ」
髪を刈られながら、彼は言った。
「なぜか、僕には虱がたからんでねえ。会社の連中は、大滝さんは虫が好かん人だからだ、といっている」
「まあ、おほほ」
女は笑った。笑うと、大きな乳房が震動し、乳首が彼のむき出しの前腕部をくすぐった。
「シャンプーも、頼むよ」
横目で乳房と、それに連なる腹部を見ながら、大滝は言った。

5

理毛店で整髪してもらい、さっぱりした気持で大滝は外へ出た。ぶらぶら、夏の光のもとを、見事に櫛けずられた、油のきいた頭髪を光らせて公園に向かった。暑いので、公園の噴水の所で、涼んでいこう、と思ったのである。暑いのに帽子を冠らぬのは、頭髪を皆に自慢したいからである。もっとも、帽子を冠っている人はいない。帽子の下で虱が繁殖するからである。ビニールの袋に水を入れて、頭にのせて冷やしている者はいる。夏の日光が、じかに頭を直射するのは、やりきれない事だろうからな、と大滝は思った。
噴水の前についた。十数人の裸の人が、その周囲にいた。何だろう、と思って彼は群衆の一人に声をかけた。
「どうしたんです？」
彼はふりむいて、大滝の姿を見て驚きを顔に浮かべ、それでも答えてくれた。
「あれですよ、ごらんなさい、あれを」
「あっ！」大滝は一言もらしたが、そのあとは続けられない。噴水の前に、男女七人のグループがいた。そして、一本の旗を立てていた。その旗には白地に赤く、
『皇帝虱友の会』
と大書されていた。そして、そのグループの七人は、誰も毛を剃っていなかった。しかし、その全身の毛は真っ白なのである。いや、顔面を除いて、毛のない部分も全身、塗った様に白い。
「何で白く体や毛を塗っているんでしょう」
大滝は訊いてみた。するとあの男が答えた。
「塗っているんじゃあ、ありません。ごらんなさい、あの白い所、動いているでしょう」
「はあ、なる程、そう言われると……。何かもじゃもじゃ……。すると、あれは！」
「そうです、虱です。奴らは、全身に虱をたからせているのです」
ぶるる、と大滝は身ぶるいした。ざわ、ざわ、ざわ。彼らの体表の虱が動く。
「大変な事をする連中ですな。見ただけで痒くなる」

「そうですな。よほど我慢強い連中でしょうな」
男が言った時、リーダーらしい旗を持った男が、一歩前に出た。その旗にも、虱が一ぱい附着していた。一陣の涼風が吹き、二、三匹の虱が旗からとばされ、群衆の方に飛んで来たので、女が悲鳴をあげた。
「諸君！」
重々しいが、嗄がれた声で、リーダーは叫んだ。
「虱友の会に入会しませんか。虱、虱と嫌う事はないのです。虱を虫だと思うから厭がる。だが、血を分けた兄弟だ、と思えば、実に可愛いい。その上、大きな利点があるのです」
リーダーが、こう言った時、体からポロポロと虱が落ちた。落ちた虱は、またリーダーの体に這いあがった。大滝に教えてくれた男が言った。
「虱の毒にあてられて、頭がおかしくなったんじゃあないのですかな、あの男」
「利点は一ぱいある。虱にたかられて痒いから、いつも体を掻いている。だから、冬も寒くない。夏は、太陽の光を虱が防いでくれるので、それ程暑くはないのです。その上、いつも掻いているから、血の循環がよくなる」
「馬鹿馬鹿しい」
「古い血を吸われるから、体内にはいつも新しい血が流れる。頭がすっきりする」
「しすぎてますよね、あの男は」
「痒いから掻く。すると、どんな眠気もさめる。能率倍増、仕事がはかどる」
「……」
「何よりも私達は、一匹の虫さえ殺さないという、大慈大悲の心からこの会を造ったのです。それ以来私達の心には、いつも平穏さがある様になった。虱の痒さに比べたら、どんな辛い事でも我慢が出来る。それで、克己心も生れた。そして、虱の眼で物を見る事が出来る様になった。虱の眼でものを見れば、すべてのものが有難く、尊く見えるのです」
「あれは、本当に気違いですな、やっぱり。どうです」
「その通りかもしれません」
大滝も合槌をうった。所がである。男が二人、女が一人、野次馬の中から出て行って叫んだのである。
「入れて下さい。趣旨に賛同しました」
「是非私もお願いします」
「どうぞ仲間に……」
土下座して、虱のリーダーをふしおがむ者さえある。大滝は、男と顔を見合せた。
「おお、よくおっしゃいました。虱の友の会は、喜んであなた方を仲間に迎えます。これから入会の儀式をします。さあ、あなた、座っていないで、どうぞお立ち下さい」
リーダーは座っていた人を立たせた。
「儀式って、何をするんですかね」

「さあ……。でも、見ものですな」
案外簡単な儀式だった。新入会員が、一人一人、旧会員達と抱きあうだけの儀式なのである。
旧会員には、こぼれそうに虱がたかっていた。おそらく、二重、三重に体表にしがみついていたのであろう。最上層の虱は、血にありつけず、空腹だったに違いない。だから虱達は、新しい獲物の方にぞろぞろと移っていき、三人の新会員が、全員と抱擁が終った時は、旧会員と同じく、体表の全面が厚く虱に覆われてしまっていた。
「分別のありそうな人達ですのに、どうしてあんなインチキな会などに入会したのでしょうねえ」
「判りませんな。しかし、あの人達、家へ帰ったらどうなるんでしょう」
「私があの女の亭主だったら、叩き出してやります」
しかし、三人の新会員の、虱に覆われていない顔面は、いともなごやかな表情をしていた。
「さあ、皆さん方、この通りです。新入会員三人の、ごく楽しげな表情をごらん下さい。さあ、もう入会する方はございませんか」
リーダーが言った。体表をすべて虱に覆われた会員達の、その体表がむくむくと動く。大滝は寒気がした。さすがに、そのあとは誰も会員になろうとする者はいない。
「さあ、すぐ入会して下さい。入会者には、必らず至福が訪れます」
リーダーがそう言ったとき、物凄い羽音が聞こえた。急に空が暗くなった。大滝は空を見上げた。それは何千、いや天日を暗くする程の雀の大群であった。他の、食虫性の鳥も混っていたが、大滝には何という種類かは判らない。
鳥群は、大滝達野次馬には構うことなく、ためらわず虱の友の会の連中に突進した。
あっ、という間の出来事であった。ものの十分とたたないうち、友の会々員の体にむらがった鳥の大群は、充分飽食して、飛び去った。
あとには、食いすぎて動けなくなった五、六羽と、友の会に殺された数羽の死骸と、傷ついて動けなくなった十数羽だけが残っていた。附近の木にも、上空にも一羽の鳥もいない。
皇帝虱友の会の人々は、いた。あまりのショックでか、それとも鳥達の羽の力で呼吸障碍を起こした為か、倒れていた。しかし、死んでいるのではない。胸を起伏させ、呼吸はしていた。その体表の、所々から血がにじんでいた。
しかし、あの、おそらく数十億はいたと思われる皇帝虱の大群は、一匹も残っていなかった。皆、鳥共の腹の中に入ってしまったのであろう。
その後、大滝は皇帝虱友の会のことを、見た事も聞いた事もない。

「吸血観音」（一九八五年）より

黄庭狂詩曲

嬉野　泉

1

コウテイ。こうてい（カイザーを意味することもある）と言う崇高な名詞。だが、後庭となると話が違う。要するに肛門の異名である。ケツの穴を後庭とは、不遜であると一喝して、彼らの言う芸術……臭芸または腐芸と彼は呼んでいる。……を、黄庭芸術と名づけたのは、東洋のバーナード・ショウを自認する（他認されているかどうかは、定かでない）皮肉屋で鳴る評論家、由利浩三である。

肛門（由利が好んで言うところのケツの穴、またはケツメド）をもって種々の擬音を聞かせたり、音曲を演奏したりした芸人は江戸時代にもいた。由利の言うケツメドで、その活約筋を随意に収縮拡張させ、直腸を巧みに絞って、いろいろな音を出し、金を得ていた卑俗な芸人は、江戸爛熟期の文化、文政時代に現われ、一時的ながら市民の喝采を博した。その名は今に伝えられている。曲屁曲平。花咲男。尻鳴男。屁平屁八などが特に有名で、彼らは物好きな観客にその下劣な芸を披露した。

だが、そんな世紀末的卑芸が、長くもて囃されることはない。やがて、幕末の風雲急を告げる頃になると、一顧だにされなくなった。要するに、あまりにも泰平が長く続き、世間が頽廃しすぎている時代の、奇形児的な時代の落とし子。そう由利は断定している。

その、長く絶えていた珍芸が、事もあろうに二十一世紀に復活した。由利にとっては頭に来ることである。それが、あまりにも日本が平和すぎるため、つまり、風俗が文化・文政のような、頽廃しきった時代の寵児である、と言うことなど彼は毛頭考えてない。もっとも、今が頽廃しきった時代である、と言う観念は濃厚に持っている。

そもそもの始まりは、テレビである。それが念頭にこびりついていることが、最近由利がテレビの出演を頑強に拒否している最大の理由である。もっとも、ＮＨＫは別である。つまり、全国珍芸大会なるものを某民放が放映した。それに、数週間連続して勝ち抜いたのが、平野成八である。彼の人気は一気に爆発した。それに眼をつけたその局、グローバルＴＶは、彼を高額な契約金で専属にした。そして、彼をレギュラーとして番組を作成した。それは大当たりを取り、視聴率は最高で四十パーセントを越した。まんまと、局の思惑が当たったのである。彼、後に平野流屁道の家元になった成八の人気は沸騰し、後庭芸術、由利が言う黄庭芸術が隆盛を極める基を築いた。

彼の芸術……由利は芸としか言わない。言う時は、いかにも

憎々しげに、唇を歪めて、ギェイと言う。……を二、三披露する。彼は後庭、つまり肛門で、数十曲の曲を演奏し、自分の後庭が演奏する曲に合わせて、歌を歌うことができる。口と後庭で、会話することができる。漫才をするのである。肛門で動物の鳴声や、種々の擬音をも発することができる。更に、口から煙草を吸って、煙を肛門から出したり、水を大量に飲んで、強いライトに向かってその水を肛門から噴霧し、虹を作って見せる。肛門から、盥に入れた水を吸い込むこともできる。その種の特異な珍芸を専門に研究している物好きなある識者は、こう言う。あの男は超能力者に違いない、と。

彼がスターダムに上ると、彼に追随して多数の後庭芸術家が輩出した。テレビ各社……ＮＨＫは除く……は争って彼らの尻芸を放映し、一般の人もこれに染まり、後庭芸術を習得せんと励んだ。街中に放屁の音がこだまし、心ある人々の眉をひそめさせた。玄人の屁は決して臭くない。彼らの主食が果物と香りのいいジュースであるからである。時に、芳香さえ放つ。だが、素人の屁は、百のうち八十くらい、凄まじい悪臭を放つ。その心ある人々の中に、勿論由利浩三もいた。彼は、この臭慣に、怒髪天を衝いた。事あることに、反屁のキャンペーンを展開した。だが、それほど軽薄な人々を啓蒙しはしなかった。

彼は、ガスの素とも言うべき、内服用の発泡剤……胃の中で炭酸ガスを発生させ、胃のレントゲン写真を撮る時使用する薬剤……を製造中止さすべし、と声高く訴えた。ガスを発生させ、屁を多く出すために、玄人のみならず、素人も胃が何でもないのに、炭酸飲料などの他に、大量の発泡剤を飲む。彼らは、屁の量を多くするために、医師が胃のレントゲン写真を撮る時に使う量の、十倍も飲むのである。そのため、数社の製薬会社はほくほくであった。しかし、これらの発泡剤は胃のレントゲン撮影に欠くべからざる薬であるため、発売禁止にはなりはしなかった。その背後に、製薬各社の暗躍があった、と言う噂もあった。

もっとも、これを聞いた平野……今や、屁聖と言われている。……は、せせら笑った。

「そんな薬を絶対必要とするのは、素人の域を脱しない者だけだ。おれやおれの高弟たちは、そんな物など全然必要ではない。そんな物に頼らずとも、口から空気を吸えば、すぐ直腸まで行く。それをおれたちは自在に操ることができる。あれを製造中止してくれれば、雑多な連中が淘汰されるから、願ってもないことだ」

さて。この醜悪な芸に対して、心ある人が怒りを感じたのは当然であった。彼らはデモ行進をした。その数、三百人と言われた。もっとも、由利は体の故障で、参加しはしなかった。だが、それら良識ある人々に対して、心からなるエールを送ったのは当然であった。彼らは行進しながらシュプレヒコールを、繰り返し叫んだ。

「尻の穴の醜悪な珍芸を、法律をもって禁止せよ！」

薬局の前では。

「ケツメド芸人に発泡剤を売るな！」

そして、彼らは最大のターゲットである、関東地区での発泡剤の最大のメーカー、今までの発泡剤の十倍の量のガスを発生させるルフタンの発売元、鯖共製薬本社ビルに押し寄せた。由利は首を捻っている。今までの十倍ものガスを出す薬が、胃のレントゲンを撮るのに、果たして必要なのか？　必要なはずはない。それは、単にケツメド芸人たちに迎合して作られたものであろう。それを、厚生大臣が発売を許可した。由利は、その理由を知っている。大臣が猛烈な尻芸のファンで、自分も尻芸を隠し芸としているからであることを。秘密事項であるが、彼はルフタンを倍の量も飲み、危うく腸閉塞で腹を切られそうになったことを。それを、彼は近く明らかにするはずである。

鯖共製薬でのことを続ける。会社側でもおさおさ怠りなかった。デモ隊が押し寄せた時、会社側に雇われたある程度尻芸を心得ている連中（その中には某大学後庭芸術愛好クラブ員の姿もあったと言う。由利は、ああ嘆かわしいと慨嘆した）が、デモ隊にケツを向けていた。彼らのズボンやジーンズの（女はスカートを捲っていた）肛門に当たる部分は切り取られていた。そして、殺到するデモ隊に向かって、一斉に放った。その音は声をなしていた。

『帰れ！』

音と、次いで襲来して臭気のために、デモ隊は算を乱して逃げ散った。その記事を見た由利は、苦虫を噛み潰したような顔になり、成八は、ワッハッハと声高く笑った。ただし、尻で。

2

豪華な大邸宅。平野成八の家である。彼はこの大邸宅を尻の穴一つで建てた。

その大邸宅の治療室のベッドで、彼は下半身裸体になって専門の二人のお抱え肛門治療師の治療を受けていた。二人は、彼の芸術的に美しい肛門を清拭し、毛抜きで肛門周囲の毛を抜いていた。毛は、芸術の邪魔になる。

「先生、終わりました」

「ご苦労」成八は鷹揚に言った。

「では、試してみるか」

年かさの治療師が言った。

「お願いします、先生。先生の妙技を生で聞けるのは、ここしかありませんから」

「劇場に行ったことはないの？」

「はい。何せ、入場料が高いものでして。……」

「近藤。先生方に招待券をお渡ししておけ」

「かしこまりました。お帰りになります時、お渡しします」

「すみませんな、どうも」

「じゃあ、何をやろうか。そうだ、今日は特に調子がよさそう

だから、東天紅をやるか。正木。何分続くか、タイムを計ってくれ」
「かしこまりました」
弟子たちの眼が輝いた。長く鳴く、鶏の一種東天紅の鳴声を師が今から肛門でやるのである。劇場などでは滅多に見られない、成八の秘芸なのだ。
成八は、ごくごく喉を鳴らして空気を飲みこんだ。みるみる、彼の腹が膨らんだ。弟子たちは感嘆した。これは、師の特技である。あっという間に、数十リットルの空気を飲みこんで、腹をこう膨らませる。これは、ここにいる高弟の彼らにだってできることではない。高弟たちは、師の成八を、超能力者ではないか、と思っていた。
「柳井。東天紅は英語で何と言う?」
「さあ。……判りませんが。……」
「調べておけ。おれの他の種もだ。英語だけではない。フランス語とドイツ語でもだ。ヨーロッパ旅行が迫っている。その時、プログラムはあちらの言葉で書かなければならない。判ったな」
「はい」
「では、やるぞ」
成八は肛門をマイクに向けた。妙なる音が彼の肛門から響いて来た。二人の治療師は、東天紅と言う鶏がどんな声で鳴くのか知らなかったが、彼の肛門が出す音は、まさに鶏の声であった。しかも、鶏以上に鶏らしい。
一分。二分。五分。十分。鶏はまだ鳴いていた。空気を大量に飲んで、相撲取のようになっていた彼の腹が次第に凹んで行く。
「凄い!」
治療師たちが感嘆の声を漏らした。なおも、成八の肛門から、妙なる調べが鳴り続ける。腹はますます凹む。成八の顔は真赤になり、やがて東天紅は鳴き止んだ。成八が聞いた。
「何分だ?」
「十八分五十二秒です」
「テレビでは、時間の関係でこれはやれんからな」
深呼吸しながら、成八は言った。その顔の赤みは既に取れ、普通の色に戻っている。だが、額にはまだ玉の汗が残っていたし、胸は大きく起伏していた。
「お疲れになったようで。……」
「そう。これが一番精力を使う。蛙や猫の鳴声なんざ、これに比べれば朝飯前だ」
「では、これで失礼します。滅多にないものをお聞かせ頂き、ありがとうございました」
「帰るのか?」
「はい」
「誰かお送りしろ」
弟子の一人が立った。彼が出て行くと、入れ代わりに別の弟

子が入って来て言った。
「先生。大学の医学部の教授とやらが来て、ぜひ先生のご後庭をご拝見させて頂きたい、と。……」
「断れ。医学部の教授なんて連中は、前におれの後庭のことを、奇形だ、かたわだとぬかしやがった。それにおれは今、治療師に丁寧に治療して貰ったばかしだ。手荒に取り扱われたら、また手当のやり直しをしなければならん」
「ですが、学術のためとか申して。……」
「うるさい！　お前は誰の弟子だ！」
すごすご、彼は室外に出て行こうとした。その時、成八の心に悪魔的な考えが浮かんだ。
「待て」成八はにやりと笑って言った。「明日の朝、八時に来いと言え」
「判りました」言って、彼は室外に出て行った。
「わっははは」成八は豪快に笑った。「朝、八時前におれは日に一度の糞をする。その時拭かないで、大学の偉い先生に後庭を拝ませてやる」
さっきの弟子が戻って来て複命した。
「先生方はお帰りになりました。明日朝八時、必ず来ると言って喜んで帰って行きました」
「馬鹿めらが」
「ところで、週刊スーパースターの記者とカメラマンが来ておりますが」
「どんな用だ？」
「先生のおん後庭の写真を撮影させて頂き、それに二、三のコメントをお願いしたい、と申しております」
「通せ！」ふんぞり返って成八が言った。
「慨嘆に耐えん！」
由利が、自宅の応接間で、手にした週刊スーパースターを叩きつけて叫んだ。その週刊誌の巻頭のグラビアには、麗々しく平野成八の肛門の大写しが載っていた。そして、文面は美辞麗句でけばけばしく装飾されていて、成八をさんざん褒め、賛えていた。
「かかる愚劣な週刊誌も、あの屁ひり男と共に社会から葬るべきだ！」
由利の顔が、憤怒のため赤黒くなった。
「先生、あまり興奮なさらずに」
客の、総合文芸雑誌文芸大学の編集長の角村が由利を宥めた。由利は、彼の雑誌の看板的存在である。その彼が興奮しすぎて倒れでもしたら、彼の雑誌は大打撃を受けるであろう。今、彼が半連載の形で発表している、平野成八とその追随者を、糞味噌に罵倒する評論は、文大系のすべての出版物の、目玉となる評論であった。純文学になど見向きもしない連中までが、由利が口を極めて罵倒する一文を読みたくて、難しいと定評がある雑誌を買って行く。発行部数は、由利が彼が言う腐芸を罵倒す

る以前の三倍強に達していた。それは、ボーナスとして角村の懐にも跳ね返り、彼はほくほくであった。だから、血圧が高いと自称している由利が、興奮して倒れでもしたら、会社のみならず、角村にとっても大打撃である。

由利は、得意の造語を使って、日本人を三種に分けた。好屁派、嫌屁派、その上を行く抗屁派である。勿論、彼は抗屁派を自称している。常に叫ぶ。かかる国の恥をさらす低級愚劣な輩は、すべからく神聖な日本国より追放すべし！　そして、反屁運動のリーダーを自認する由利は、活字と弁論により打倒黄庭芸術を展開し続けている。だが、成果はほどほどである。その代わり、好屁派からは悪意ある投書や電話がひっきりなしに来て、彼を怒らせている。ただし、それが彼の戦意を挫くことにはならない。かえって敵愾心がかき立てられ、筆剣の鋭さが冴えることになる。

彼は、文芸大学社の社員の全てが、嫌屁派であると思っている。しかし、そうではない。勿論、彼の前では全ての社員は、露骨に後庭芸術を攻撃する由利に積極的に賛成する。だが、本物の嫌屁派は全社員の十分の一であろう。また、その一割の社員で、絶対に肛門の珍芸を見ない者、つまり完全な由利の信奉者は、更にその一割しかいないであろう。大多数の社員は、立体テレビで彼らの芸を見て、腹を抱えて笑う。その次の日に、仲間同志で話し合う。

「昨夜の四重奏のドラムは秀逸だったな」

角村さえその仲間になることもある。そして、勿論これを由利の耳に入れる者は社には誰もいない。

由利が話を中断した。敏感なオートプリンターが、彼の沈黙と共に印刷された紙を吐き出すのを中止した。由利はスイッチをオフにした。そして、喋り出した。

「憤慨せざるをえんな。この前など、何げなくテレビを点けたら、急に平野の醜悪な尻の穴が大写しになった。論文を物にする時は、それを飯の種と覚悟して見ているから、そう不覚を取りはしないのだが。その時は不意を衝かれてうろたえ、吐き気さえした。あんな汚い物を生まれて初めて見た。立体テレビも善し悪しだな。その醜悪極まるものに、奴は油を塗って光らせ、その上ケツペタに紅を塗っていた」

「先生がですか？　たかが平野の肛門ごときで？」

「物の弾みは恐ろしい。私は、いつもは、民間放送は絶対見ない。ケツ芸に対する反駁論文を書かなければならん時だけ、血圧の薬を肴に見るだけだ。商売とはいえ、あれは強烈なストレスになるから、血圧に悪い。その他の場合は絶対に見ないで心身の安定を計っているのだが。何せ、どの局も、日に一度や二度は、奴らの小汚ないケツの穴を見せつけるし、コマーシャルにはしょっちゅうケツの穴が登場するからな。ケツの穴とキツネウドンと何の関係があるんだ！　おれは、自分専用のテレビでは、公共放送のＮＨＫしか見ない。だから、チャンネルがＮＨＫに合っているものだと思ってうっかり点けた。しかし、妻

の馬鹿が。……」

角村は、心の中でくすりと笑った。由利が、妻に頭が上がらないことを知っていたからである。

「私専用のテレビを民間放送に合わせていたのだ。だから、私は慌てふためいてチャンネルを変えた。ところが、慌てていたから別の民間放送に切り替わった。そこでも、ケツメドを映していた。ああ、何たること！　民間全部があの時間帯。君、午後七時から八時台の時間帯を何と言った？」

「ゴールデン・アワーでしたか」

「そう！　その時間帯の民放全部が、これでなくては夜が明けぬとばかり、ケツメドを画面一杯映していた。やっと、ＮＨＫのチャンネルに戻った時、私は疲れきっていた。頭痛がし、動悸がし、めまいさえした。おそらく、血圧は二百を越していたに違いない」

「先生、お体をお大事になさって下さいよ」

「ああ。……私は思う。このままでは、日本は滅んでしまう。少なくとも、文化的には。世も末だな、角村君。なんたることだ。ああ、肛門亡国！　日本を滅ぼすのは、奴らのケツメドだ！　だが、破滅的だったのは、その後だった！」

「どうしたんですか？」

「私は、汗を拭きながら、ＮＨＫの番組を見た。八時をすぎた。そうしたら。何と、ＮＨＫが特集と称して、ケツメドを放映し始めたのだ！　ああ。……」

手で頭を抱え、眼をつぶった由利を見て、角村は心の中で笑った。彼もその番組を見ている。ＮＨＫが後庭芸術を特集番組で放映したのである。彼の方はそれを知っていたから時間になると、野球中継をＮＨＫに切り替えて見た。ライトの当て方で、いろいろなニュアンスが出る、美しい紫黒色の、上等の羊羹（ようかん）のような色の平野の肛門を。それは、芸術的な趣すらあった。カメラがスローモーションに変わると、肛門が開閉し、肛門が開くたびに、サーモンピンクの直腸の粘膜にライトが当たった。そのひだに点在する、黄色の物質すら、いいコントラストを作っていて、角村には汚いと言う気など起こらず、むしろ綺麗だという感じにすら思われた。角村は心の中でその感懐を反芻していたが、しかし、顔はいかにも沈痛と言った表情を浮かべて言った。

「あれには私も驚きました。すぐテレビを教育放送に変え、そして、天下のＮＨＫも遂にここまで堕落したのか、と考えて情なくなりました」

「ああ、そうだったな。まさか教育テレビではケツメドを映しはしないだろうからな。私は我慢して全部を見、終わるとすぐ、ＮＨＫに痛烈な抗議文を送った。ところが、何を勘違いしたのか、馬鹿めが。ご講評ありがとうございました。お陰様であの番組は大変好評でしたので、二週間後再放映することに決しました。お見逃しのございませんよう。しかも、文章は印刷されていた。差出入は、なんとＮＨＫの会長だ！　けしからん！

すべからく、ＮＨＫなどと言う無用の長物は解体すべきだ！」
　ははあ、怒っているな。由利の鼻の穴を見て角村は察した。怒ると、由利の鼻の穴が拡がる。しかし、彼の評論は怒った時の方がいい。ＮＨＫでは、中身を見もしないで礼状を出した。差出入の名も確かめなかったに違いない。だから、罵詈讒謗を極めた彼の文に対して、丁重な礼状を出すなどと言う、愚挙を犯してしまった。後で、どうなるか、楽しみであると角村は考えた。由利が、このことを発表して、ＮＨＫのとんまぶりをとことん嘲笑うであろうから。皮肉と当擦りと言う調味料をたっぷり振り掛けて。そうだ、この文を頂かなくては。だから、少し煽ってやれ、と考えついた。
「そうですね、憤慨に耐えない。私はＮＨＫを尊敬していました。どの局も臭芸を何らの反省なく放映しているのに、ＮＨＫだけはプライドを固持して、一度も肛門を電波に載せなかった。さすがはＮＨＫと思っていたのでしたが、裏切られました。いずれにせよ、良識があるはずの電波マスコミは、全てが平野の肛門に屈したことになったのですね。先生。私は悲しくて、泣きたくなりました」
「ああ、嘆かわしい！　だから、少なくとも私だけは孤軍奮闘して、最後の砦を守り、一社でも多く抗屁派にしようと思っているのだ。二、三の出版社で、私の意見に賛成してくれる所がある」
　その連中だって、天下に名だたる評論家、由利浩三の一文が欲しいためにきまっている。だが、由利の論文が各社に分散したら、それだけ文大社に来る分の味が薄くなる。
「先生。たやすく信じない方がいいですよ。奴らは先生の書いた物が欲しくて、嫌屁派を装っているのかもしれませんからね」
「それくらいは判っている。で、最近の敵の様子はどうだ？」
「そうですねえ。別に変わったことはないようですが。あ、そうそう。平野の尻を有名な医学部の教授が診察しました」
「医者たちは、前は奴のケツの穴をさんざんけなしていたはずだったな」
「ところが」角村の声が急に沈んだ。「彼ら、名だたる専門家たちが、平野の肛門と直腸は、一千万人に一人の逸物と診断したそうです。これこそ、人類の全ての者が理想としなければならない肛門であり、直腸である、と」
「な、なぬ！　そ、そんな馬鹿な！」
「先生、そう興奮なさると血圧が。……」
「そうだった。今死んだら、奴のケツメドに殺されたことになる」
　彼はデスクの瓶から、錠剤を二錠取り出し、叫んだ。「水」
「はあい」と可愛い返事があって、痩せた上品な眼鏡をかけた夫人が、間髪を入れず盆に水を入れたコップを載せて現われた。彼女は由利の夫人である。角村は目礼した。由利は錠剤を口に入れ、コップの水で飲んだ。

「あのう。……」
「お前はこの部屋を出ていなさい。私は角村君と話があるんだ」
「あのう。週刊スーパースターの記者が、あなたのコメントと写真を撮りたいと言って、来ておりますけど」
「写真？　そんなら一枚有り合わせのものを渡しておけ。コメントはそうだ、ケツメド芸能を撲滅せよ！　これでいい。これにそっちで適当な色付けをして出せ、と言ってやれ」
「ところが。……別の写真が欲しいんだそうです」
「別の？　レントゲン写真でも欲しいのか？」
「いいえ。あなたの。……肛門の写真が欲しいと言っているんです。来週の巻頭のグラビアに。……」
烈火のごとく、由利は怒った。
「追い返せ！　そして、塩を撒いてやれ！」
彼は、血圧の薬をさらに一錠、口に放り込んだ。

玄関から、彼の妻とスーパースターの記者とのやりとりの声が聞こえて来る。
「しつこい奴らだ」
「そうですねえ。ところで、先生。平野が海外旅行に行くのをご存じですか？」
「遊びでだな」
「いいえ、演奏旅行です」
「演奏？　ケツの穴でか？」
「そうです。ヨーロッパの某国のプロモーターが、彼の珍芸を気にいって、彼をヨーロッパに招いたと言う話です」
「国辱の輸出だな」
「ええ」
「ヨーロッパのような高貴な精神を有している人々の前で、下品なケツの穴で演奏などしてみろ。たちまちブーイングが起こる。ほうほうのていで、尻を捲って。……もっとも、尻はいつも出しているが。……逃げ帰って来るにきまっている。愉快じゃぁないか、角村君」
「ええ、そうですな」
「一行は何人だね？」
「三十人だそうです。明日、都内のデパートで、揃いのブレザーを誂えるそうです」
「ケツの所に穴を開けたやつか」

3

由利が、かくも平野成八に敵意を燃やすのは、彼が秘密にしている肉体的欠陥のためもある。二十一世紀の現在、あの水虫すら塗布剤を一週間も続けていれば完全に治るようになったのに、彼の宿痾、痔疾に関しては未だしの観があった。痔は、手術によらなければならず、手術してもしばしば再発した。だか

ら、患者たちは昔通りの陰湿な苦しみに悩み抜かなければならなかった。

もっとも、痔疾のあの痛みに関しては、ヘモパトールと言う画期的新薬の登場で、一服の内服で相当長期間痛まずにすごせるようになった。しかし、それは病気の根治を示すにはほど遠いと言わなければならない。痛みだけを取るのであって、病気は患部に残るのが常である。でも患者は、長い間の痛みから解放されて、治ったと錯覚することが多かった。

由利も、ヘモパトールの恩恵を受けた一人である。彼は、その神薬で長年の持病が治ったと思った。だが、数年後再び痛みを発した。彼はその時忙しかった。医師の門を潜る時間的余裕がなかった。だから、数年前に貰っていたヘモパトールを思い出して、それを探し出して飲んだ。

ところが、古くなった薬は、猛烈な副作用を起こした。服薬後三十五、六分たって、肛門の痛みが消え去ると同時に、彼はまず猛烈な吐き気、続いて嘔吐に襲われた。二時間後には、頻回の下痢に見舞われた。恥ずかしくも、大人のくせに、大評論家で天下に鳴る由利浩三が、何度もお漏らし、しかも大便のお漏らしをしたのである。

彼は何枚も重ねたバスタオルを股間に当て、脱水症状のため意識が薄れた虚ろな表情をして、救急車で運ばれた。

彼はすぐ入院させられた。一時は危篤状態だったのである。その原因は、勿論古くなったヘモパトールを、しかも普通一錠でいいのに、古いから効目がなくなっているであろうと勝手に判断して、三錠飲んだためであった。

この古くなったヘモパトールは、彼の腸に変化をもたらした。腸の上皮細胞がヘモパトールのために剥離し、その後再生しなくなって、薄い瘢痕組織に置き変わったのである。だから、下痢はやがて軽くなるだろうが、それでも日に五、六度は必ずあるだろう、と医師たちは診断した。

凄い下痢は一段落した。医師は彼に、永久にある程度の下痢は続くと宣言してから言った。

「由利さん。あなたの痔は物凄いですな」

「そんなに酷いんですか？　今は痛みも全然ないのですが」

ヘモパトールは古くなっても効果はあった。もっとも、量が多すぎたためかもしれない。

「ええ。外痔核が二つ。肛門の外にはみ出しています。大きさは桜桃大です。色は熟れたグミのよう。いや、それより干したナツメの実のような、と言った方がいい。酷いですな。よく、こんなになるまでほっておけましたな。その上、肛門の中には内痔核が二つある。こっちはそれほど大きくなく、まだ大豆大です」

「そんなに酷くなっていたなんて。……」

「今まで気がつかなかったのですか？」

医師は、にやり、複雑な笑みを浮かべた。ありありと由利の患部の解剖学的所見が眼に浮かんだからである。睾丸の下に、

もう一対の、睾丸をやや小振りにしたそれがある。外科医師が驚いたほどの痔核が。
「ええ。何せ、痛みは全然ありませんでしたからね」
「パンツなどに付くでしょうが」
「ろくに見もしないで女房に洗わせますから」
「酒や痔に悪い、辛いものが好きなんでしょうな」
「ええ。幸い痛みがなくなってからはしめたとばかり。……」
「今までは便秘でしたね。ですが、これからは下痢の傾向を示すでしょう。日に何度もトイレに行くことになる」
「そのたびに痛むのですか?」
「ヘモパトールの効果が残っていますから、痛みはない」
「それはよかった」
「ですが、出っぱなしの痔核が二つ。それは絶えず下痢便で汚染され続けましょうな。その結果、下着は勿論、ズボンまで汚物が浸透することになる」
「すると。……」
「外にいる時そんなことになったら、周囲に臭気を発散する。下痢便はズボンを通し、外まで達することがあるかもしれない。そうなったら、あなたはこの上ない恥ずかしい思いをしなければならない」
「それは困る。私は職業がら外で人に会うことが多い。そして、いろいろな人と対談もしなければならない。もしそうなったら、私にとっては身の破滅だ!」
「対策はあります」
その対策と言うのは手術で、由利は納得して手術を受けた。だが、結果はかえって悪くなった。由利は、麻酔薬によるショックで、危うく死ぬところだったのである。
だから、巨大な痔核はそのまま残された。医師たちは、彼のギネス的痔核に涎を流し、別の方法で麻酔をかけるから手術をしろ、と勧めたが、彼は承諾しなかった。更に、では麻酔なしでやるからと言ったが、勿論、由利はそれを拒絶した。
だから、今でも彼の後庭には不様な物が二つ、ぶら下がっている。しかも、手術を途中で中止したためか、彼の括約筋が完全な機能を果たさなくなったから困る。と言うことは、始終じわじわと半ば液状の便が、漏れ出る。
彼は悩んだ。そして、対策を講じた。
外出は絶対に避ける。
自宅の換気を、常によくしておく。家の中の至る所に、香気を発散する脱臭剤を置く。
肛門を厚いガーゼで蓋をする。それを、大人用のおむつで覆う。暑い気候の時は、接着テープで外れないように確実に止める。近頃の接着テープは、濡れたものにもよく着くようになったので、彼にとっては都合がよかった。でも苦痛であった。更に、自分専用のトイレを作り、ビデを入れた。そのトイレには他人を絶対に入れないよう施錠した。
本人が外出できなくなったので、必然的に訪問客が多くなっ

た。家の中に臭気が充満しているのを、客に嗅ぎ取られたら、あらぬ噂の種となる。彼は対策を考えた。その結果、家の中に絶えず香水を振り撒く、エアコンを設置した。莫大な支出を物ともせず。

彼は、少しでも便意を催したら、すぐトイレに走る。日に四度入浴する。患部を清潔に保って、少しの臭気も発散させないためにである。

また、下痢止めを絶やさず服用している。近頃彼が愛用しているのは漢方薬で、その効果があってか、この頃彼の排便回数が減って、日に三度となった。

腹と尻は、絶対に冷やさないようにしている。煙草は止め、食事にも充分気を使った。酒だけは完全に止められなかったが、量を減らした。少しでも多く飲むとてきめんに下痢の回数が多くなる。だから、飲みすぎないように努めている。酒の種類も変えた。ウイスキーとビールは口にしなくなった。熱燗の日本酒を常用することにした。真夏でも熱燗の酒を飲む。熱燗の酒は汗を多く出す。これは、水分が腸に回るのを幾分でも抑制するであろう、と彼は考えている。それに、腹が冷えるのを防いでくれる。

辛い節制であった。彼は自分の痔を呪った。同時に、健康な肛門の持主をも呪った。そのおどろしい呪いをもっとも多く受けるターゲットが、平野成八とその一党であった。

彼は決意した。後庭芸術を完全に葬ることを。それにはまず、基礎となる部分から崩して行かなければならない。そのまず埋めるべき外堀として選んだのが、発泡剤であった。そのため、彼は自分の懐から金を出し、あのデモを計画し、やらせた。自分はこの通りなのでデモに参加できなかったのが心残りであった。だが、事は見事に失敗した。もし、自分が参加して指揮を取っていたら、と彼は歯がみをした。しかし、敵の一番組しやすい部分……平野ら、プロはそうでもないかもしれないが。……一般のケツメドファンにとっての、アキレス鍵とも言える発泡剤メーカーを標的に選んだのは、適切であったと思った。デモは腰砕けになったが、それがマスコミに大きく取り上げられた。まあ、ある程度の効果はあったろう。そう考えて彼は自分を慰めた。

しかし、一部の人の非難をよそに、メーカーは発泡剤を製造どころか、大増産し続けた。そして、ぬけぬけと言う。

「もし、発泡剤の製造を中止したら、早期胃癌の最もよい診断法がなくなるわけでして。……」

それを知らない由利ではない。だが、鯖共製薬のルフタンは、十倍の発泡量を誇っており、そんなものが胃のレントゲン撮影に前の薬以上に寄与するとは思えない。そして、メーカーが生産する発泡剤の総量は、医師が必要とする量の三倍に達すると言う。更に。最近、蛸田製薬と塩蚤製薬では新薬を開発している。

「なんだ、蛸田と塩蚤のあの宣伝惹句は！」由利が怒号した。

相手は、例によって角村である。「我が社の新発泡剤、ファルチゲンは、あなたに三倍の屁をもたらします。これは、奴らが最初から、胃でなく屁を目的にしている証拠だ。これを黙認して販売を許可した厚生省も一つ穴のムジナだ！」
「塩蚤のは、あなたのミュージカルを奏でるお尻の永遠の友、ルフトール。……」
「これは、医療には全然関係のない薬効だとは思わんか」
「ええ、思いますとも」
　どちらの新製品も、今までの発泡剤が胃で発泡して、少なからぬ量がげっぷとなって無駄に消えてしまうのに、大腸に行ってから発泡するのだそうである。しかも、ルフトールには香料が含まれていて、その屁はいい香りがすると言う。
「大腸に行って発泡するのが、どうして胃のレントゲン用の薬剤として認可されたんだ！」
「それは、両社がこの薬を大腸のレントゲン診断用として認可を仰いだからでしょうね。奴らも、その点はぬかりがあるはずはないでしょう」
「そんならそれでいいとして、測れもしない屁の量が、どうして三倍などと断定できるのだ！　インチキ極まる。厚生省は今からでもよい。認可を取り消すべきだ！」
「そうですね。その上問題が起こっています」
「何だ？」
「あの薬、ファルチゲンとルフトールを飲んだ者の中で、大腸に通過障害のあった者に、腸閉塞を起こした者がいたそうです。そのことは、但書には書いてあるそうですが、そんな文章を誰もが読むとは限りませんからね。あれは、人殺しの薬ですな」
　彼は、由利に迎合するような口調で言った。この二社は、文大系の雑誌に広告を載せていない。だから、彼は平然として言った。そして、こうも考えていた。これに懲りて、両社が広告を出すようになればいい。……
　だが、案に相違して、由利はこう言った。
「そんな薬を飲んで余計屁をひろうとする奴などは、腸閉塞にでも、腸捻転にでもなって死ねばいい」
　言った途端、彼は顔をしかめた。
「どうなさいました？　先生」
「持病が起こった。ちょっと失礼する」
　あたふたと彼は走った。ははあ、便意を催したのだな、と角村は察した。彼がヘモパトールの副作用で、頻回の下痢をするようになったことを、勿論角村は知っている。だが、さすがの彼も、由利がギネス級の大痔主であることは知らない。
　ビビビビ。ビビ、ビビビ。凄い音が、応接室まで響いて来る。その音を角村は何度も耳にしている。そして、このために外出したがらなくなったのであろう、と推察していた。
　三十分、角村は待たされた。やっと戻って来た由利の頬はこけていた。三十分も出し続けていたら、これくらい消耗するだろうな、と角村は思った。だが、実際の排便には十分しかかか

らなかった。残りの二十分は、肛門の手当て、それに蓋をするための時間なのである。

「すまんな。待たせて」心なしか、元気がなくなっていた。

「医者には過敏性大腸と言われているんだ。神経が興奮すると、どうしてもこうなる」

「今の平野のことを知ったら、先生のようになる人が増えるかもしれませんな」

「今の平野？」

「ええ。ヨーロッパに行く予定の平野たちです。彼らは、パリではなんとオペラ座で演奏をします。次はロンドンに五日間。次いで、ベルリンとウィーンだと言う話です。ウィーンでは、ブルク劇場。それから、ミラノに回るとすれば、あそこではスカラ座。……」

畜生！　畜生！　おれは、ヨーロッパどころか、家の外にも出られなくなったのに。乗った飛行船が墜落して、くたばってしまえ！

現今、少し余裕のある人は、スピードの点では引けを取るが航空機より安全で快楽な飛行船を好む。二十一世紀の乗物と言う惹句通りに、今は飛行船は絶対安全な乗物である。浮遊ガスは水素を使わず、ヘリウムを使う。内部はゆったりしていて、ベッドやバス付きの個室もある。安定性はよく揺れも少ない。エンジンの音も響かない。豪華なレストランやサウナや、ダンスホールまである。その上、エコノミークラスだと航空機より割安である。平野は、ドイツが誇る、千トンクラスの飛行船グラーフ・ツェッペリンの特等室に乗るのですと、角村は由利に伝えて彼に歯がみさせた。

4

後庭芸術のプロを志す者は多い。そのため、週に何度もテレビ各局は、素人尻自慢演芸大会をする。由利に言わせると、勝抜き尻合戦である。

八週勝抜いた者は、芸能プロダクションと契約して、プロになることができる。それは、ある程度の収入を保障されることに通ずる。どんな新米の後庭芸人でも、そっちこっちからお呼びがかかるからである。時としてスターダムに登ったら。それこそ、栄耀栄華を思うままにできることになる。

彼らの芸はテレビの華である、と言う者もいる。勿論、由利ではない。そのテレビの放映が、後庭芸術の人気が沸騰する原因となったことは、由利すら認めていることである。昔なら、絶対にテレビになど映らなかった肛門が、その付近と共に全国に、時にクローズアップで映し出されるのである。

出場者の中には、うら若い女性すら何人も出る。彼女らの局部を見たくて、後庭芸術のファンになった男も数多い。

一次予選を通過した選手は、二次予選に進む。二次予選の前に医師によって、肛門・直腸の検査を受ける。形の悪い者、病

気持ちの者が落とされる。その結果、八名が選ばれる。
八人の中の最終勝者とチャンピオンの試合が終わった。
その勝抜き戦の審査委員長を勤める平野流後庭道の家元……由利はへー元と呼んでいる。……平野成八が、カメラに向かって講評した。
「挑戦者とチャンピオンの芸は、正に紙一重でした。ですから、審査員は四対四に分かれました。私の一票が決定権を持ったわけですが、私は技術面では五分五分ながら、チャンピオンの後庭の風格に重きをおいて、チャンピオンに一票を投じました」
司会者が叫んだ。
「これで、チャンピオンは八週勝抜きました！」
ファンファーレ。くす玉が割れる。女の子が二人、チャンピオンに駆け寄って来て、一人がチャンピオン、痩せて貧相な四十男の頚にレイを掛けた。もう一人が彼に銀色に輝くトロフィーを渡した。男の顔が締まりのないものになった。
「これであなたはチャンピオンの座を八週続けて獲得し、プロへの道を開いたことになったのですが、プロになりたいと思いますか？」司会者が言った。
「できればなりたいと思います。ですが、その前に平野先生のお弟子にして頂ければ、この上ない喜びなのですが」
「して上げましょう」成八が言った。「ですが、最初から名取と言うわけにはいきませんから、名取代で我慢して貰いましょう。でも、あなたくらいの腕ですから、すぐ名取になれるでしょう」
「ありがとうございます」
チャンピオンは成八に向かって深々と礼をした。満面の喜色。成八はチャンピオンと堅く握手した。満場の拍手。にこやかに笑う成八。今や成八は斯界の、いや屁界のカリスマであった。
「では、このチャンピオンを、自社のタレントとして欲しい社の代表は、挙手して下さい」
全員が手を挙げた。
「これはこれは。どうしたらいいでしょう？」
「そう言われても。……条件や待遇などをうかがってみませんと。……即答はできかねます」
「そうでしょうね。では、この件は別室と言うことにしまして。チャンピオンには祝賀の一曲を演奏して頂きましょう」
二本のマイクの一本にチャンピオンは尻を向けた。別のマイクに顔を向けた。尻でリズムやメロディーを演奏し、口でそれを伴奏として歌うのである。これは高等技術で、これをできる者はプロでも数少ない。彼がチャンピオンになったのも、当然であろう。
彼は、酸素不足になった金魚のように口をぱくぱくさせた。発泡剤の分の気体は、さっき使い切ってしまった。だから、空気で補充したのである。その空気が直腸に行くまで、普通の人なら長い時間を要する。成八なら五分で行くが、これは至難の業なのだそうである。誰にでもできることではない。でも、こ

のチャンピオンは胃や腸を収縮させることによって、その業をある程度会得していたようであった。彼は空気を飲みながら、胃や腸を服の上からマッサージした。空気を直腸に送り届けるためである。ものの五、六分で彼の腹はばんと張った。

「もういいですか？」

「いいです」

「曲目は？」

「古いところで、いとしのエリーを」

肛門の大写し。今日、肛門に金粉を振ってきた者もいたが、彼は全然化粧をせず、濃紫の菊の花のような肛門をマイクに向けていた。それが開閉する。イントロ。本節に入る。肛門の伴奏に合わせて、彼の口から歌が出る。

「世も末だ。飯がまずくなる。消せ！」

由利家では食事中であった。妻はうっとりチャンピオンの肛門に見入っていた。箸を持ったままで。それが、由利に言われるときっとなって……来客がある時の態度とは、百八十度の変化ぶりを見せて……叫んだ。実は、彼女は後庭芸術の熱烈なファンなのであった。殊に、成八の熱狂的なファンであった。だが、人前では夫の浩三に従順な姿勢を取り続けていた。しかし、二人きりになると本性が出る。特に、後庭芸術を放映している時、夫にいちゃもんをつけられると、荒れ狂う。

「なにさ！　私が大好きなことを知っているくせに。余計なことを言わないで、さっさと飯を食って、この部屋から姿を消しなさい！」

由利はうなだれた。彼は昔から妻に頭が上がらなかった。あの事があってからは尚更であった。なにせ、毎日下痢便が着いたガーゼやタオルを何十枚も洗わせているのだ。妻の機嫌を損ねたら、とんでもない事になる。その上、彼はあれ以来、つまりヘモパトール事件以来、インポになってしまったのである。ますます妻に頭が上がらないことになった。彼はテレビから眼を離し、味けない食事を続けた。チャンピオンの演奏が終わった。妻は手を叩き、次いで尻を上げて、一発放った。臭かった。夫が食事中であることなど、斟酌しはしない。世も、本当に末になってしまった、とつくづく由利は実感した。屁芸が流行するまでは、妻はこんな下品な事をする女ではなかった。少なくとも、屁はトイレでしかしなかった。多少気が強すぎる、自分を尻に敷きたがる傾向はあったが、可愛い女だったのに。これと言うのも、あの屁っ垂れどもに感化されてしまったからだ。あれを見続けていたから、こんな下品な女になってしまったのだ。憎むべきは平野成八とその眷属（けんぞく）だ。奴らに呪いあれ！

「先生、どうぞこちらへ」

テレビ局の役員自らが、成八をデラックスな重役用の応接室へ案内した。ここで、公式の記者会見が行われるのである。彼のヨーロッパ演奏旅行に関する、抱負を聞くための。勿論その様子は全国に放映される。

「あと三分です」
「うむ」悠揚迫らず、彼は自分の前におかれた、ジャスミン茶を喫した。その態度は、大人物に見え兼ねない。顔はむしろ猿に似た貧相な男なのに。ある、肛相を見る占師が、彼の肛相は何億人に一人の肛相で、吉運この上ないものである、と断定した。太閤秀吉以来、このような肛門は、未だかって日本人には出現したことがなかったそうである。由利は勿論これを嘲ったが、それ以来彼の所に来る脅迫電話の数が急に増えた。
成八の後には、彼の高弟の、平野流屁道の名取の位をえている者が三人、身動き一つせず立っていた。
「時間が来ました」ディレクターが言った。ライトが司会者に集中した。
「団員その他で三十名。飛行船グラーフ・ツェッペリン号でまずパリに行くのですね」
「そうです」
五百人乗りの大型飛行船。団員の他に、多数のマスコミ陣も同行する、賑やかなものになるであろう。
「一般客も一緒ですか？」
「仕方がありません。五百人も連れて行けませんからね。団員は全部ファーストクラスで行きます。私は家内と共に、スペシャル・ルームで行きます」
飛行船のスペシャル・ルームは、一流の大ホテルのスイート・ルームに比すべきデラックスな部屋である。一国の重要人物が希に利用するだけで、その室料の目玉が飛び出るような高さのため、エコノミー、ファーストクラスが満席であっても、空いていると言う。その部屋でパリへの十二時間。それは王侯貴族にでもなったような気分に浸れるであろう。そのスペシャル・ルームに乗れるような富を、成八は尻の穴一つで稼いだ。その上、飛行船会社では、ＶＩＰを警護するための、屈強のガードマンを二人も、部屋の前に配置しておくのである。これでは、飛行中、彼にインタビューすることはできなくなるであろう。面会を求めてもガードマンに阻止されることが眼に見えている。
「そうすると、面会は？」
「飛行中はできないでしょうね」司会者が代わって答えた。
「ですから、質問をなさりたいお方は、今のうちにどうぞ」
「チェッ！　王様にでもなったつもりでいやがる。屁っ垂れ男が」
画面を見ないで音を聞きながら由利がいった。彼は今、肛門にガーゼを当てて貰っていた。当てているのは、彼の妻であったが、彼女は由利の患部など見ず、点けているテレビを見ながら処置をしているのであった。
「黙ってらっしゃい！」
ぴた、と彼女は彼の太腿を叩いた。テレビを見たままで。もっとも、慣れてしまっているから、見ないでも今では彼の肛門とその周囲を処置できる。

「で、ご旅程は？」
「ご、の字などつけるな！」
「黙ってらっしゃい！」ぴしゃり。
「明後日午後二時にパリに着きます。少し旅の疲れを休め、翌日の午後六時から、オペラ座で第一回の公演をいたします」
「曲目は？」
「最後の、全員出演によるオーケストラは、アルルの女を演奏します」
「先生のソロナンバーは？」
「馬鹿馬鹿しい。ケツメド野郎に先生なんて言うな！」
「黙って！」ぴしゃり。
「シャンソンを後庭で歌います。アコーデオンの伴奏で」
「フランス人よ、怒れ！」
「うるさい」ぴしゃり。
「シャンソン？　日本語でですか、フランス語でですか？」
「フランス語で。後庭で歌うのは、ちょっと難しかったですが、まあ、何とかマスターしました」
「できるもんか。恥をかいて帰ってこい！」
「やかましい！」ぴしゃり。
「ほう。ぜひ、ここでお聞かせ願いたいものですね」
「出発前に疲れると悪いですからね」
「できないんだ。ざまあ見ろ！」
今度は黙ってぴしゃり。やや強く。由利はぎゃっと叫んで顔をしかめた。
「難しいんでしょうね」
「ええ。特に母音が。私の後庭は母音、子音のいずれでも、日本語でなら、全部鳴らすことができる。でも、鼻母音、例の鼻にかかるあれですな。あれは完全にマスターしたと言える域に達したとは申せません。それで、パリまでの空の上で、みっちり練習します。ですから、誰にも邪魔されないようにスペシャル・ルームを取ったのです。どうぞ、ご了承下さい」
「飛行船よ、落ちろ！」
「何下らないことを言ってるの。今の飛行船が落ちるわけはないでしょう。怒るわよ」
「それは判っている。だが、雷が落ちると言うこともある」
「雷雲は、敬遠して飛ぶわよ」
「次はイギリスですね」
「ええ。イギリスではロンドンとリバプールで三回やります。ロンドンではピカデリー劇場で。リバプールでは、ビートルズのナンバーを三曲、私が独演します」
「ビートルズファンが怒るだろうな」
ジョン・レノンが死んでから、かれこれ。……三十年くらいかな？　と由利は考えた。だが、なお彼らには神話的人気がある。毎年、レノンが殺された命日に、後を追って自殺する者がまだいる。その連中が、ビートルズナンバーを尻で汚されて怒らないはずはない。怒った信者が、平野を暗殺。……由利はそ

の光景を頭に浮かべ、思わずにやりとした。
「そんなことがあるものですか」妻が言った。由利の処置は終わっていた。だから、太腿を叩くことはできない。その代わり凄い眼で由利を睨んだ。「今、こんなにビートルズのナンバーを生で演奏してくれる者がいると思って、涙を流して喜ぶにきまっているわ」
「次はドイツですね」
「ええ。ベルリンで二日。ミュンヘンで一回。オーストリアに飛んで、ウィーンで一回。国立オペラ劇場（シュターツ・オパ）が予定されています。それから、ミラノで一回。スカラ座。最後がローマと言うことになります。ウィーンでは、シューベルトに敬意を表して、未完成をみんなでやります」
「冒涜だ！」
「素敵！」
「たいしたものですね。今や平野先生は、日本の平野ではなく、世界の平野になったのですね。頑張って下さい」
「ええ。できれば、ヨーロッパから青い眼の弟子を数人、連れて帰りたいですな」
由利は、ふらふらめまいがした。

5

大人数に見送られて、平野成八一行三十名と、随行する芸能記者団ら、およそ百名は、グラーフ・ツェッペリン号の船内の人となった。筑波飛行船港は、開港以来の賑わいであった。見送りの中には、平野二度と帰って来るなとか、国辱を外国にまで広めるなとか書いたプラカードを持った嫌屁党……実は由利がこっそり雇ったアルバイト……もいたが、見向きもされなかった。
エコノミークラスには、一般日本人乗客に混じって、大勢の外人も乗っていた。記者の大半はエコノミークラスにいた。一流のリポーターは、平野後庭芸術団の団員と共に、ファーストクラスにいた。
芸術団員たちは、インタビューに応じたり、尻を露出して練習に励んでいた。妙なる音がエコノミークラスまで届いた。日本人乗客はそれが何であるか判ったが、外人には理解できはしなかった。
「ホワット・イズ・ザット？」
「ヴァス・イスト・ダス？」
「ケス・ク・セ？」
質問がステュアーデスに集中した。ステュアーデスたちは苦笑いして、あれは特殊な芸能団員が演奏の練習をしているのだと答えた。
おせっかいな一人の日本人が、あれは、ファート、フルツ、ペであると説明してやったからたまらない。ひと騒ぎ起こり、パーサーは彼らに特別にワインやケーキを振舞って、宥めてや

らなければならなかった。
そして。妙なる音を出す連中がヒマラヤとパミールの境界を飛んでいる頃、日本では事件が発生していた。

「切っていいかい？」おずおずと由利が妻に言った。
「駄目。今ヒマラヤが映っているのよ。あ、画面が変わった。ね、あんた見て。この綺麗なお尻。すべすべして陶器みたい。この穴の皺の格好は、近藤さんの穴だわ」
「馬鹿馬鹿しい」画面から顔を背けて、由利は言った。
「あなたの、おそらく日本一汚いお尻を見せられてからこの綺麗な尻の穴を見ると、眼が洗われる思いがするわ」
画面から顔を背けながら、由利はむかむかしていた。心の中で、あの飛行船がエベレストかどっかに衝突して墜落すればいい、と願っていた。しかし、願いも空しく、グラーフ・ツェッペリン号はやすやすとヒマラヤを、パミールを越えた。
彼は、ちらと妻の陶酔した顔を横目で見やってから、眉をひそめてテレビに眼をやった。肛門が大写しになっていた。妻はこれを見て、近藤さんのケツの穴と言った。ケツの穴を見て、どうしてその持主が判るのだ？　おれのなら、誰が見ても判るだろうが。……
その肛門の持主が、次に画面に登場した。その男が誰か、由利も知っていた。当面の宿敵、平野成八の高弟、平野流後庭道の三羽烏の一人、近藤だったのである。

「あっ！　本当に近藤の畜生だ。お前、よく判ったな」
「当り前よ、これくらい。ファンなら誰でも」
ああ、そうだった。由利は思い出した。人気ケツメドスターの、顔とケツの穴が一緒になっているブロマイドが売り出されていて、愚かなファンたちが、発売と同時に争って買う時代なのである。妻が、それを買っていることは容易に想像された。この野郎、反対派の旗頭のおれの女房のくせに、敵のブロマイドを買うなんて！
その時、テロップが出た。臨時ニュースであった。端麗なアナウンサーが、かしこまった顔でアナウンスし始めた。
「ここで、臨時ニュースをお伝えします。誘拐事件が発生しました。……」
誘拐事件とは珍しい。電話が全部テレビ電話になってから、電話で脅迫することができなくなってしまっている。電話のスクリーンに犯人の顔が映るからである。覆面をしていても、警察は特殊な装置を開発していて、その覆面の下の大体の骨相を突き止めてしまう。全国民がコンピューターに登録されている今、犯人はすぐ割れる。手紙では時間がかかりすぎるから、実用的ではない。自分が直接被害者の家族に手紙を届けることは犯人の身にとっては、身の破滅になることがある。そうやって逮捕された例がいくらもある。だから、誘拐犯人は後を絶った。それなのに。……
「この犯人は、脅迫電話を尻でかけたのであります」

画面に、しかも大写しに、テレ電から取ったものであろう、肛門が出た。

「これが犯人の肛門であります。この肛門で脅迫したものであります」

肛門が静かに開く。声が出た。

「お前の息子を誘拐した。返して欲しかったら、東京駅の地下待合室のトイレの大便所の三番目のボックスに、明日の正午かっきりに、五千万円おけ。警察に知らせたら、お前の息子の命はない」

ゆっくりした、抑揚のない声である。もっともの話だが。

「この後、誘拐された鈴木隆彦君の家族が、犯人が指定した東京駅地下待合室のトイレに現金五千万円を置きましたら、その二時間半くらいの後に、隆彦君が赤羽駅の構内で泣いているところを、駅員に発見され、無事保護されました。……」

五、六歳くらいの男の子が映った。あまり可愛くない男の子である。

「なお、警察は隆彦君の身の安全を第一に考え、指定された東京駅の地下待合室のトイレには、警官を一人も配備していませんでした。その後、犯人の追及を始めましたが、まだ犯人は逮捕されておりません。もう一度犯人の肛門を映します。もし、この肛門に見覚えがありましたら、最寄りの警察署か交番にご一報下さい」

醜怪な代物が、長々とブラウン管に映り続けた。由利も、今回は臭芸と直接関係がないので、その肛門を直視した。しかし、妻はもっと熱心に肛門を見続けた。奴、犯人のケツの穴に魅せられたな、と由利は推察した。

「あなたのではないことは確かね」

「嫌味を言うな」

「ふん！」

「しかし、いつかはこんな事があると思っていた」由利は言った。しかし、本当は今急に思いついたのである。「ケツメドで犯罪を企てる者が出ることをな。要するに、平野とその一党は犯罪のお先棒を担いだわけだ。ケツメド芸さえ広まらなかったら、今度の犯罪は起こらなかった」

「誰でも、こう喋れるものではないわ。難しいのよ、尻で会話をするのは」

「それなら、犯人は平野か平野の高弟だ」

「でも、今は飛行船の中よ」

「なお、誘拐された隆彦君の話によりますと、犯人は一人で、終始覆面を放さず、口では一言も喋らず、尻でだけ喋ったそうです」

記者会見の場面が映った。

「ボク。犯人は一人だったの？」

「うん、一人。面白かった」

「どうして？　怖くなかったの？」

「ちっとも。だって、お尻で僕と話したんだもん。僕、何度も、

もっとお尻で話してってせびった」
「親切だった？」
「とっても。帰る時も、車に乗せてあの駅まで連れて来てくれたの。そして、ここで降りなさいって。ここから、右の方に行けば、パパとママが待っているからって」
「口で？」
「ううん、お尻で。そして、歩いているうちに転んでしまったの。それで泣いていたら、駅の人が来て、あっ、この子だって口で言って。それから、パパやママや警察の人が来たの」
「車の番号なんか、覚えていないの？」
「判んない」
「何分ぐらい乗っていたの？」
「ずっと」
「隆彦君は、午後二時三十六分に発見、保護されました。大体、二時半頃、犯人は隆彦君を解放したと思われます」
「あの肛門、どこかで見たことがある」
「ふーん」
「それもじき最近だ。そうだ、さっき見た近藤のケツの穴にそっくりだ」
「私にはそう見えないわ。大体、あなたは後庭芸術が嫌いで、あの時の近藤さんの後庭も、ろくに見ていなかったでしょうが」
「それだけ、印象が強くて記憶に残ったと言うことが考えられる。インスピレーションだな。お前、やつのケツの穴のブロマイドを持っているだろう」
「ええ。持ってるけど」
「持って来い」
妻は夫を見下したような笑いを浮かべた。
「持って来てもいいけど、あんた。根本的な間違いをしているわよ。近藤さんは、今は飛行船の中よ」
ぐっと詰まったが、それで引込むのは沽券にかかわる。
「奴一人同行しなかった、と言うこともある。それを、みなが庇って、と言うより共犯者だな。いかにも乗っているように見せる」
「今、飛行船に乗っているのよ、彼。さっき、見たでしょうが」
「犯行を犯してから、航空機で先回りし、途中から乗り込むと言うことがある」
「何にも判らないくせに。筑波からパリまで、ノンストップなのよ」
「ビデオと言う手があるな。テレビで放映されたのはビデオだ。本物は東京にいる」
彼女は冷笑を浮かべ、立ち上がって隣室に消えた。由利は機械を操作して、プリントされた犯人の肛門をテレビから吐き出さした。妻が戻って来て、ぽんと写真を投げ出して言った。
「はい、これよ。本人のサインもあるわ」

「なんだ！　おれの妻ともあろう者が、こんな奴のサインまで貰って。やや！　似ている。いや、そっくりだ。奴は犯人に違いない」
「違うわよ。素人でも判るのに。犯人のはほら、この四時の所の皺が短いでしょう。近藤さんのはこの通り長いし、八時の所の、犯人の皺は浅いけど、近藤さんのはこの通り深いわ」
四時だの八時だのと言われても、由利には判らない。
「四時だの八時だのというのは、何の事だ？」
「肛門を時計に見立てるのよ」
軽蔑したような口調である。由利は、拡大鏡まで出してつぶさに比較した。しかし、彼の眼には同一の肛門としか見えない。
「おれには、絶対に同じケツの穴としか思われない」
「頑固な人！」
「とにかく、警察に電話をしてみる」
「やめなさいよ、あなた。名誉毀損で訴えられるわよ」
由利は妻の忠告など諾きはせず、警察に電話した。しかし、電話に出た警官は、期待に反した答えをして、彼を落胆させた。
「ああ、犯人ですか。あれはたった今逮捕しました」
「近藤、と言う男ですな」
「いや。遠藤と言う男です」
「それご覧なさい」
妻の薄ら笑い。由利はその眼を見てぞっとした。彼女の眼は笑ってはいなかった。冷たく彼を見据えていた。その瞳に殺意さえ感じとったからである。こいつ。……その憎しみを彼は平野たちに転嫁した。よし、今度の誘拐犯と、奴ら、ケツメド族の腐芸を結びつけて、文学大学に発表して、世間に警鐘を鳴らしてやろう。……
電話が鳴った。
「あなた」電話で相手に見られている時は、従順な妻になる。
「今度の誘拐事件に関して、赤日新聞があなたにコメントを頂きたいそうですけど、どうします？」
「出る、出る。あ、由利です。今度の事件は来たるべきものが来たにすぎない、と私は思っています。尻で歌ったり喋ったりする、俗悪な、腐臭に塗れた汚芸が一般大衆に浸透した結果、それを用いて安易に金を稼ごうとする連中が続出し、更にそれによって悪事を働こうとする者が出現するのは、歴史的に必然の帰結でして。……」以下、延々と続けた。最後に発泡剤を一撃することも忘れない。「ですからこの際、かかる犯罪の続発することを防ぐため、政府は断固たる決意を持って、発泡剤の自由販売を禁止することが必須の条件ではないか、と思います」
胸のつかえが降りたような気がした。勿論、機嫌は治っていた。

6

だが、由利の壮快な気分も長く続かなかった。各紙の、各テレビ局の報ずるところによれば、平野成八一行は由利の期待に反し、ヨーロッパ人からブーイングどころか、大喝采を博したのである。テレビは連日華々しく成八一行の成功を報じ、由利の機嫌は悪くなる一方であった。

テレビで成八は口で言った。

「お陰様で大成功でした。こちらで仕入れた種もありますし、帰国後、それらの新手法を組み入れた凱旋演奏会を開きたいと思っています。国立劇場でも借りられれば。……」

国立劇場を政府があんな屁っ垂れどもに貸すはずはない、と由利が思っていたら、案に相違した。文化庁長官は言った。

「政府としましては、要請がありますれば、国立劇場をお貸しすることに吝かではありません」

オペラ座、ピカデリー劇場、シュターツ・オパー、スカラ座などで絶賛を博した重みが、長官にこう言わせたのであろう。

由利が猛り狂ったのは当然であった。更に彼を激怒させたのは、フランス、イギリス、ドイツ、オーストリア、イタリアの五か国の、数十人の若者が、平野に弟子入りしたことであった。その中には、美貌の妙齢女性すらいた。

「これと言うのも、後庭芸術の素晴らしさが、国境を越え、人種を超越して人々を感動させたからです」

得意満面のブラウン管の平野成八。

「ヨーロッパ人のセンスも、日本人と変わりがない！　見損なった！　愚劣だ！　軽薄極まる！　唾棄すべき態度だ！」

怒り狂う由利浩三。

やがて、一行が帰国する日が来た。ローマの飛行船港から、イタリアの豪華客船、レオナルド・ダ・ヴィンチ号に、新たに弟子入りしたヨーロッパ各国の青年男女を併せた、合計六十名が、百名近い記者団と共に乗り込み、日本を目指した。

航路の半ばまでは、飛行船は何事もなく飛んだ。そして、チベットの上空にさしかかった。そこで、由利を喜ばした事件が発生した。ダ・ヴィンチ号がハイジャックされたのである。ダ・ヴィンチ号はチベットの上空で停止し、ホバリングさせられた。犯人はビートルズの熱狂的なファンが結成した、全世界ビートルズ愛好会のメンバーの、最尖鋭の若者で、由利が考えたように、やはりビートルズナンバーを尻で演奏したことに怒りを覚えたためであった。中に医師も一人いて、彼は平野一行の後庭演奏家の肛門の括約筋を切断して、二度と肛門でビートルズナンバーの演奏をできなくしてやると称した。その旨を飛行船内から、同乗していたマスコミの口を借りて全世界に放映した。マスコミ以外の客たちは全員後ろ手に縛られていた。それを由利は勿論見ていた。

「わっはっはっはっは」

由利の笑い声である。あの近藤初め屁芸団の連中が縛られている。彼らを残して、一般乗客は、飛行船に積まれてあるシャトル用のヘリで次々と下に、平均標高四千メートルのチベット

高原の無人の荒地に下ろされていた。そこには中国政府からの救助隊員が待っていて、すぐ救助された。
「テレビの連中は最後まで残るつもりらしいな」
由利が言った。
「そうらしいですな。あの連中だって、マスコミには危害を与えはしないでしょうから」
「可哀相な先生。……」
かぼそい声で、由利の妻が言った。それをじろりと、勝ち誇った眼で由利が見た。
「括約筋を切られたら、どうなるんでしょう?」
「大便を垂れ流しにするのだろうな。見たまえ、角村君。あの連中は、覆面もしていない。決死の覚悟で事に臨んだに違いない。だから顔を隠すこともしないのだ。ああ、天晴な青年たちだ。彼らは英雄だ! 神風だ!」
ちょっと違うな、と角村は考えた。彼らは全員イギリス人である。おそらく、熱狂的なビートルズファンに違いない。それで、ビートルズが肛門で侮辱されたので、頭に来てこの挙に及んだ。策を練り、涙を飲んで後庭芸術団に加入した。平野一行は、その巡業が大成功をおさめたので、飛行船港では彼らをVIP扱いにした。だから、彼らの手荷物はフリーパスで税関を通り、彼らは武器、拳銃と手榴弾を船内に持ちこむことができた。そして、チベット上空で蜂起した。彼らの数は五人であった。
「ああ、愉快だ。わっはっはっは。これで、我国の人々の眉をひそめさし、最大の公害をもたらした奴の肛門も、二度と毒ガスを吐き出さなくなる。ああ、愉快だ」
「あなたったら」涙声で彼の妻は言った。「人の不幸をそんなに嬉しがるなんて、なんて人でしょう」
「そうではあるまいか、女房殿よ」有頂天になった由利が、芝居がかって言った。「あの男のお陰で、どれだけ日本人の品性が下がったと思う? たかが屁をひる大道芸人以下の分際のくせに、大それたことに、奴はヨーロッパまで尻を晒して演奏しに行った。これは、天が奴の不遜を怒り、奴に鉄槌を下したもうたに違いない。天網恢々粗にして漏らさず。天は二物を与えず、奴はケツメドを永久に失うことになる。その、追随する愚者どもと一緒にな。ああ、愉快だ! 奴のケツ芸を二度と聞くことがないと思うとこの上なく気分が爽快だ。奴はこれから、肛門括約筋を失って、死ぬまで垂れ流しの人生を送るのだ!
うふふ、うふふ。そうだ、祝杯を上げ、ハイジャッカーたちの武運を讃えよう。おい、酒に燗をつけて持って来い」
「いやです!」

船の中のマスコミ陣によって、ハイジャック事件は連続して報道された。報道は自由であった。既に、成八一行とマスコミ陣以外の一般乗客は、全員釈放された。そして、まず成八の弟子の、比較的下の位の新参の日本人から、順々にハイジャッカ

ーたちの中の医師によって、肛門括約筋を切断されて、地上に下ろされた。だが、十人もすると、医師がその作業に飽きてしまったようであった。
「もう、沢山だ。平野一人にして、残った者は帰してやろうよ」
「じゃあ、高弟たちだけにして、その他の者は許そう」
近藤ら、三羽烏が悲壮な顔で肛門括約筋を切断された。それを、妻が酒の燗をつけてくれないから、角村と一緒にビールを飲みながら由利は見ていた。妻は沈痛な顔をして、手を併せて見ていた。
「ああ。……近藤さん。……」
近藤が、尻を血塗れにして絶叫した。
「ああ。……正木さん。……ああ。……柳井さん。……」
「次は」ハイジャックの主犯が言った。バイリンガルで日本語でも喋っているのは、テレビ局の操作によるものである。
「平野だ。平野は自分の部屋にいる。奴への処刑は、奴の部屋で行う。他の者は全員後ろ手に縛ってここにおき、マスコミは代表だけが私どもと一緒に奴の部屋に来て貰おう。その他のマスコミは残念だが、ここに残って貰おう。縛られてね。マクラグレン。君は見張りをしていてくれ」
マスコミ連中に、少しいざこざが生じた。
「ロバート」女が言った。「どう？　肛門括約筋を斬る前に奴に日本と、奴を招待した諸国の国歌を尻で演奏させたら？　斬らないからしろと言ったら、するかもよ。そうしたら、日本と奴を招待した国々を侮辱することになるんじゃぁない？」
「いいアイデアだ」
平野は妻と共に、スペシャル・ルームに入ったままであった。その部屋に入ると首領は平野に言った。
「肛門でイギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、そして日本の国歌を演奏しろ。そうしたら、お前の肛門を助けてやる」
部屋の外で二人のガードマンが血を流して倒れていた。それを眼に見たからであろうか、彼の妻は顔面を蒼白にし、ぶるぶる震えていた。
「わっはっはっはっ」
彼の妻と同じように、真っ青になってがたがた震えている自分の妻を見て、由利はいかにも愉快そうに高笑いした。
「ああ愉快だ。おい、ビールを持って来てくれ」
妻が酒に燗をつけてくれないので、由利はビールを飲んでいたのであった。ビールは腸に悪いと、今まで敬遠していたのであったが、今日は全然腸に影響がなかった。むしろ、腸の調子は最高に思われた。だから、もう二人で半ダース空にしていた。
「嫌です」涙声で妻は言った。
「何をむくれているんだね、こんなめでたいことがあった日に。いいさ。角村君。冷蔵庫にビールがあったはずだ。持って来てくれ」

「判りました」気軽にキッチンに立って行った角村が、冷蔵庫のドアを開けて言った。「もう一本もありませんよ」
「じゃあ、ウイスキーにしよう。君、氷を頼む」
「ウイスキーは、腸に悪いのではないですか？」
「今日はいい。あれは、精神的なものだったのだな。今日のようにいいことがある日には、腸も何ともない」
「判りました」
二人は水割を作って飲み始めた。由利は久し振りのウイスキーを喉に運びながら、ちらちら妻の顔を愉快そうに見ていた。妻は、眼にいっぱい涙を溜めていた。画面は考えこんでいる平野の姿を映し続けていた。そこでコマーシャル。
「ＮＨＫに移せ！」
由利が叫んだ。妻は手を出さず、角村がチャンネルを代えた。ＮＨＫでも同じシーンを映してした。

7

「遂に魔の手は平野さんに及ばんとしております。後庭によって、日本に盛名を築き、更にヨーロッパ各国においても大成功をもたらしました、日本の国宝、平野成八氏の肛門も、哀れこの世から消え去るのでしょうか？　ハイジャッカーは時間を三十分に制限しました。三十分以内に六か国の国歌を後庭で演奏しなければ、彼の肛門を切除すると言っております。既に、残り時間は十分を切りました。ハイジャッカー一味の医師らしい人物は、鋭く光るメスを取り出しております」
興奮したアナウンサーが叫ぶような口調で言った。彼、ＮＨＫのアナウンサーと、民放のカメラマンだけがどういう基準からか、ハイジャッカーの眼鏡に適って、縛られないで、放映を担当していた。
画面が切り替わり、医師がぎらぎら光るメスを出しているのが映った。
「ああ、神様。何卒平野様の後庭をお守り下さい」
手を併せて言ったのは、由利の妻であった。
「ああ、神様。何卒平野のケツメドをお殺し下さい」
そう言ってげらげら笑ったのは、由利であった。
「果たして、平野さんの答えはイエスでしょうか、ノーでしょうか？」
アナウンサーが言った時、成八が言った。
「やる！」
「成八よ」少しならず酔って言ったのは由利である。「お前がその不潔な場所で、日本はともかく他の五か国の国歌を演奏したらどうなると思う。諸外国において、日本の立場がどんなに悪化するか、どんな国際問題が発生するか、想像がつかないお前でもあるまい。なぜ、ノーと言って肛門と訣別しなかった！この、国賊めが」
「ああ、よくぞ。どんな国の国歌でもいいから、演奏して、あ

なたの、いや、私の後庭を守って下さい！」
「奴らが、国歌を演奏しても、元凶の平野を許すとおもうかね、お前」
いかにも優しそうな声で、しかも勝ち誇った態度をありありと匂わせて、由利が言った。
だが、平野の方は覚悟したと見えた。すぐ、ズボンを脱ぎ始めた。脱ぎながら彼は、ぱくぱく口を開いて空気を飲みこんだ。みるみる、彼の腹は妊婦のように膨らみ始めた。
更に平野は空気を飲み続けた。彼の腹はぱんと張り、由利は彼の腹がイソップの蛙のように破裂するのではないかとさえ思った。そして、それならそれでいい、とも思った。屁っぴり虫が一匹死ぬだけだ。……
腹の回りは、一番腹囲が大きいと言われた、昔巨体で名を売った巨漢力士小錦の倍も膨らんでいた。あの腹は三メートルはあるだろう、敵ながら天晴、と由利は感心した。
「今から始めます」平野がいかにも苦しそうに言った。
アナウンサーがマイクを彼の肛門に近づけカメラマンがカメラを彼の肛門に向けた。
「お前、ちょっと脇にいてくれ」平野が妻に言った。平野には勿体ない美人の妻は、彼の右脇に移って、彼の手を握った。
途端、大音響。すぐマイクも映像も中断し、画面は黒くなってしまった。
五分たった。暗い画面が明るくなり、ＮＨＫ、ＪＯＡＫＴＶのアナウンサーが画面に現われて言った。
「只今、飛行船ダ・ヴィンチ号に変化があった模様です。あ、今映像が復元しました」
あのアナウンサーが、マイクを握り、片方の手の指で耳をほじくりながら言った。
「視聴者のみなさん、後庭芸術のファンのみなさん！　ハイジャックは解決しました。飛行船は無事です！　平野さんは助かったのです！　ただし、今の轟音で私の耳は一時的な難聴になってしまいました」
「ああ！　神様！」
妻が叫んだ。由利と角村は顔を見合わせていた。画面は、抱き合って感激にむせんでいる平野夫婦をまず映した。平野の下半身が裸体であることがおかしかった。しかし、彼の腹は、もう過度に膨脹してはいなかった。
それから、カメラはふっ飛んだドアを映した。四人のハイジャッカーが倒れていた。鼻血を出している者もいる。全員失神していた。倒れたドアの下から、ハイジャッカーの足が見えた。
「平野さんは、ガスの力によって四人のハイジャッカーを爆風で倒したのです。その結果、全員がかくのごとく意識を失って倒れております。手榴弾は暴発しませんでした」
だらんと手足を垂らしたハイジャッカーたち。爆風のために肺をやられて死んだ者もあるかもしれない、と由利は思った。
「平野さんは、暴発させる時、私たちに爆風が当たらないよう

にガスを放ちました。ありがたいことです。そのため、四人のハイジャッカーはかくのごとくなりましたが、私たちは耳の他は無事でした。だがまだ一人、マクラグレンと言うハイジャッカーが客席に残っております。彼は武装しております。平野さんは、どうして彼を倒すのでしょうか？」

平野は、下半身裸体のまま、階段を降りた。アナウンサーとカメラマンが続いた。彼は、階段の上り口のドアを半開きにして、尻を向けて叫んだ。

「マクラグレン。平野の肛門をこれから斬る。君も来い」

その声は首領の声であり、しかも澱みのない英語であった。マクラグレンは、拳銃を持ったまま、持場を離れ、ドアから外に出た。その頭部をドアの陰に隠れていた平野が、持っていたイギリス政府から貰ったトロフィーで強打した。マクラグレンは、すぐ昏倒した。

「これで、ハイジャック事件は無事解決しました」

背後で、解放された警備員の手で今度は自分たちが逮捕されているハイジャッカーたちが見えた。

「では、平野さんがみなさんに挨拶なさるそうなので、平野さんにマイクを渡します」

「みなさん、平野です。どうもご心配をお掛けしました。ですが、この通り私は無事です。みなさんに深く感謝しております」

「畜生！」

「神様、ありがとうございます」

「角村君。飲もう。自棄酒だ！」

「後でどうなっても知りませんからね」

今度は、由利の妻が勝ち誇っていた。画面で成八が言った。

「もう、二度とビートルズナンバーは演奏いたしません」

ほうー、と言う音。由利の落胆による嘆息である。

ほーっ、と言う音。由利夫人の安心による溜息である。

8

イタリアが誇る豪華飛行客船、レオナルド・ダ・ヴィンチ号は八日遅れて筑波に着いた。筑波飛行船港は、出迎えの人でいっぱいであった。その中には首相の姿さえあった。関係五か国では駐日大使が全員出迎えていた。

一般乗客たちが先に降りて来た。次いで、平野流後庭芸術のメンバーが降りて来た。その中には、青い眼の新弟子もいた。ただし、近藤、正木、柳井の三羽烏と、ハイジャッカーのため肛門に傷を負った十人の新米の弟子は、傷の手当てのため、中国の病院にいたが、病院側の発表によれば、彼らの傷は回復可能で、一年もたてば再び後庭で演奏ができるようになると言うことで、ファンたちを安心させた。最後に、二十一世紀の最高の英雄とマスコミが喧伝した、今や世紀的芸術家となった平野成八とその妻が、大歓呼の中、手を振って現われた。

「畜生！」
やけビールをがぶ飲みして由利が画面に向かって叫んだ。
「素敵！　平野さんはやはり違うわ。二十一世紀のパガニーニだわ」
「伝説的な名バイオリニストと、一介の屁っぴりを一緒にするな！　おい、ビールがなくなったぞ！」
「はいはい、今日は特別に持って来て上げますわ。平野さんがめでたく凱旋した日なんですもの。でもあなた。四本目よ。痔は大丈夫なの？」
「構わん！　こんな下らない男がちやほやされる時代になど、未練はない」
インタビュー。万歳。万歳と叫ぶ彼のファンたち。彼の頬に強引にキスする女もいる。それに悠揚迫らず、笑顔で応答する屁聖平野成八。そのテレビを憤怒の形相物凄く、顔を真赤にして睨んでいる、由利。
見ているうちに彼は気分が悪くなった。めまいと動悸がした。立ち上がろうとした途端、下半身が生温く濡れているのに気がついた。と同時に、彼は意識を失って仰向けに倒れた。
「あらあなた。どうしたの？　お顔の色が急に青くなって。きゃっ！　血、血が！」
彼の股間から、血が溢れるように流れ出し、立派な絨毯を赤く染めつつあった。妻は早速救急車を呼び、彼は意識不明のまま救急車で運ばれた。診察の結果、彼の巨大な外痔核と内痔核が四つ同時に破裂して大出血を来たしたことが判った。原因は勿論、あのハイジャック事件以来、彼の酒量が増したためであった。
彼は、緊急手術を受けなければならなかった。ところが、妻が由利がかって麻酔薬のため、ショックを起こして危うく死ぬところであった、と申し出たため、医師たちも怖じ気をふるい、応急手当てで一応の止血をするに止めた。
「一応、応急手当てによって危機は脱しましたが、この後どうします、奥さん」
昏々と、沈静剤の作用と、急性の貧血のため、半ば昏睡に近い眠りについている由利をちらと見て、外科医師は言った。
「あの、どうすると言いますと。……」
「今回のは、単なる応急手当てに過ぎないのでしてね。このままですと、また大出血が起こる。痔の出血で死ぬことはないとされていますが、ご主人くらいの大物の痔でしたら、話は別です。大出血でそのまま死んでしまうこともありえないことではない。手術した方が、いやしなければならない。しかし、するとしたら麻酔をかけることは避けねばならない」
「とおっしゃいますと、麻酔なしで。……」
「そうです。当人には辛いですが、命には換えられない」
彼女の頭を過ぎったものがあるとしても、それを察する人があるとすれば、今昏睡状態になっている由利浩三だけであったろう。由利なら、彼女がハイジャックの時の彼の態度を未だに

根に持っていて、それで亭主を痛い眼に会わせてやろうと考えていたことを見抜いたかもしれない。
「手術、お願いします」
「そうですか」医師はにことした。こんなに巨大な痔核を、彼はまだ見たことがなかった。それを手術して切り取り、日本肛門病学会で発表してやろうか、と考えたからである。
「今は何を言っても判りませんが、眼が覚めたら、言って聞かして下さい。痛いのを我慢しなさいとね」
「判っておりますわ」彼女は晴れがましい笑顔を浮かべた。
「主人の命には換えられません。万が一死んだりしたら、私は必ず後悔するでしょう。主人の苦痛は私の苦痛です。私は、それを我慢して手術して貰う気でおります。ですから、主人も苦痛を乗り越えて手術するつもりに違いありません」
「奥さん」多少、意味が取れない所があるな、と思いながら、医師は彼女の気が変わらないうちに、確約を取っておこうと考えた。「あなたは実に偉い人だ。では、早速手術の準備をしましょう。この書類にサインして下さい」
手術同意書である。彼女は笑いながらサインした。
「麻酔をかけないと言っても、局部を冷却して痛みを軽くする、冷却麻酔はできると思いますから、思ったより痛くはないでしょう。もっとも、それが全然痛くないと言うことには通じませんが。でも、何もしないよりずっといいです」
ざまを見ろ、と思っていた。心の中で祝杯を上げていた。彼女が崇拝している、平野成八をあれほど罵り続け、自分の心を土足で踏み躙った夫に、今こそ最大級の復讐ができるのだ！
医師ほ感心したように言った。
「ご主人がお書きになった物を読んで大体の想像をしていましたが、奥さんは偉いお方ですな。ご主人の手術にも眉一つ動かさないで、笑顔で無麻酔の手術にご同意なさるなんて。感心しました。まさに、良妻の鑑ですな」
「そんなこと言われると恥ずかしいですわ、先生」
書いた物は嘘っぱち。よく読めば、至る所に妻への当て擦りが散りばめられていることが判る。つまり、彼女がどんな悪妻であるか、暗に表示しているのである。しかし、そこまで理解する人は少なく、大多数の人は、彼女を、夫に従順な良妻である、と思っている。
手術室で、由利浩三は泣き、わめき、大声で悲鳴を上げた。それを、医師に頼みこんで手術室に入っていた妻が激励した。
「あなた。もうすぐですから、頑張るのよ。もう、後二つ取れば外出できるようになるのよ。後、三十分の辛抱」
それを聞いて彼は、手術台の上で失神し、手術がやりやすくなった。
有痛手術は成功した。五日後、彼は面会を許された。角村が一番早く面会に来た。
「よかったですね、先生。一時は危なかったんですって？」
「そうだそうだ」

由利は顔をしかめた。腹が張って一発ひりたくなっていた。一発すれば腹はずっと楽になる。我慢をし続けていると、肛門の傷にもさわる。だが、客の前であった。遠慮しなければならない。

「よかった。文大の看板が消えたら、どうしようかと思っていたんです」

そうだ、少しづつ漏らしてやれ。臭いだろうが音はしない。臭さも、布団をばさばさしなければ外へ漏れて角村の鼻に届きはしまい。……由利はそう考えた。そして、静かに漏らした。手術前であったら、下痢便が一緒に漏れたであろう。しかし、手術のためか便は漏れなかった。その代わり、妙なる音がした。横笛のような妙音であった。

「あれ？」角村が言葉を漏らして由利の顔を見た。由利は恥ずかしくなって、放屁を肛門を絞って中止させた。だが、その瞬間、手術間もない患部に劇痛が走った。由利は顔をしかめて肛門の緊張を解いた。途端、ティンパニーを連打したような、高音を彼の肛門は発した。

「あっ！」と角村が叫んだ。「ご免」と言って由利はがばと跳ね起き、トイレに走った。

すぐ、トイレから、トレモロが効いたピッコロのような妙音が連続的に鳴り響いて来た。あっけに取られている角村の耳に、夫人の言葉が届いた。

「まあ！　あなた、とっても素敵よ！」

註「彼の腹はばんと張った」「ステュアーデス」は原文のママ
ボレアス 第十五号（一九九一年十二月十二日）より

カーテン・フォール

嬉野　泉

序　幕　講義室における『前駆症（プロドローム）』

「これが問題の老人（セネックス）です」

講義室に出ている学生たちに、小児科の教授は、その臨床教材の姿を披露した。教授の手が、ストレッチャーにかかっていた白布をめくると、今まで学生たちの目から隠されていた老人――学令前の小児と同じ体格を持った――の全身が顕わになった。小児科の講義なのに、なぜ教授が「老人（セネックス）」とわざわざラテン語で強調などしたのだろうと不思議に感じていた学生たちは、そこに現れた患者を見たとき、一様に、あっと驚きの声をあげた。

その声で、前夜の徹夜マージャンの疲れで講義が始まるやいなやうたた寝をきめこんでいた藤堂は、夢路から呼び戻された。

なんだ。脳梗塞か、心筋梗塞か、いずれにせよ退屈な、内科の老人病の講義だな、と彼は睡眠不足の霞んだ脳で考えた。そんな病人なら医師にさえなれば、たとえ専門の内科医でなくても、眼科や耳鼻科になったとしても、ざらに診せられる。万が一、俺が親父に屈して、小児科を専攻したとしたら別……。そして再び眠りに入ろうとして、はっと気がついた。

変だぞ。今はたしか、小児科の時間だ。それなのになぜ、老人の患者がいるのだろう？

彼の脳が急に冴え、背骨がぴんとまっすぐになった。手の甲で口の脇をぬぐう。そして教授の顔に注目する。

「……のように、老化現象は、人類のみならず、あらゆる生物にとって、防ぐことのできぬものであります」

患者は裸のまま、ストレッチャーの上で横になっていた。しきりにむずかっている。彼につきそってきた看護婦が、笑顔を造って、老人の顔を持ち、子供の体をした彼を、巧みにあやしていた。

いい女だな、と藤堂は思った。醜怪な、子供の老人と対比したから、よけいそう見えたのかもしれない。

「動脈硬化（スクレローゼ）などは、既に二十歳位、いやもっと前から始まる、という人さえあります。でもそれは急速に、僅か数年で進行する事はない。長い年月をかけ、ただし、非可逆的に進行する。そして、それが完成するのは、個人差はありますが、概ね六十歳を超えてからのことと言っていいでしょう」

何だろう、あれ。藤堂は考えをめぐらしてみたが、判らない。黒板にも病名は書いてない。今日の講義の対象となる疾患名は、前もって告げられていなかったのだ。

「ところが、原因不明で、老化現象が生理的老化の数十倍の早

さでくる事がある。これを、プロゲリア、といいます。ギリシャ語で、前にくる老年、という風な意味で、日本語では早老症と訳しますか。極めて早期に老人となります。この患者のように。諸君、この患者は、まだ十一歳です。しかし、その年相当の身長はない。成長ホルモンの欠乏と、背椎骨の老人性萎縮と、椎間板軟骨の萎縮のため、それで学令期前の身長しかないのです」

　再び、学生たちがどよめいた。その中で藤堂だけがなんだ、という表情になった。こんな奇病、たとえ医学部の教授となったとしても、生きているうちに実例に一例でも遭遇できるかできないか判らない症例である。その奇病の講義を真面目にきいてノートをとっても、将来の開業生活には何の役にも立つまいし、それに珍しすぎて、どうせ試験には、卒業試験は勿論、国家試験にも出まい。それより眠った方が得だ。彼はそう判断し、すぐ眠りに落ちる事に決めた。その彼の頭の上を、教授の声が素通りして行く。

「これが極めて稀な疾患である事は、いう迄もありません。が、診断は容易です。初期のものでしたら、どうか判りませんが、ある程度進行した老衰の所見を示すものであれば、見ただけで診断がつく。この患児のように」

　学生たちの視線が、ストレッチャーの上に集まった。その視線の対象が、しゃがれた声でつきそいの看護婦に訊く声が、しんとした講堂に、不思議によく通った。

「ねえ、看護婦さん。お医者さん、何といってるの？　ぼくのこと」

「あとで先生に訊いてあげますから、おとなしくしてね。看護婦さんにも判らないむずかしいお話なのよ、ボク」

「完全な老人の所見を持っている症例なら、いかに初見の疾患であっても、よく診断はつけえます。ですが極めて稀な疾患である事は、いう迄もありません。我々の教室が開講して、もう百年以上になりますが、プロゲリアの患者はこの子が始めてなのです。貴重な研究材料です。大切にしなければならない。老人と同じ生理を持っている患者で、という事は、免疫力が極めて弱いという事を意味する。ですから、風邪などをうつされたりしたら、我が教室にとっては大なる損失になります。で、この患者を諸君に供覧するにあたり、一つの事を注意しておきます。君らのうち、健康な人だけが、順序よく列を造って、診て下さい。手を触れないように。そのあと、講義実習生の諸君は残ってて宜しい。患者には話しかけないで下さい。ごく疲れ易いですから」

　順序よく、学生たちは貴重な症例を見た。観光バスで名勝や旧跡を見るように、彼らはこの、若き老人を見て、そして驚愕した。患者の名札は、ストレッチャーの横に下げられていた。しかしその名の所は、白い紙で隠されていた。年令の所は隠されておらず、彼らは患児の年令を知る事が出来た。十歳十一ヶ月、男子。……

一人だけ、列に並ばない学生がいた。上手に居眠りをきめこんでいた藤堂である。教授は、藤堂が風邪をひいているのだ、と思った。

学生たちは、驚き、というより、むしろ恐怖の眼で、その老人を見た。顔面は渋紙色をしていて、無数の皺が刻みこまれていた。皮下脂肪は殆んどない。その皺にまけず、顔面の皮膚の表面積のかなりの部分を、汚ならしい、黒褐色の老人斑が占めていた。もしかすると、本物の高齢者より、多いかもしれなかった。

彼の眉毛も、いや睫毛(まつげ)すら、白いものが多きを占めていた。皮膚の下には、老人性の萎縮をほぼ完成させ、完全に近い位萎縮したため落ちている筋肉に代って、骨が表面に迫っていた。

頭髪の大部分は脱落していた。僅かに残っている部分も、全て白変していた。その無毛の頭部の皮膚にも、老人斑と、白斑が多数現れていた。

だが、それにもまして、彼を人間ばなれした高齢者に見せているものは、鼻と口であった。口にはもう、歯牙は一本も残存していない。その歯根は、老人によくある萎縮を、高度に完成させていた。

でも、それだけなら、よくある老人性の変化にすぎない。彼を現実以上の超老人にみせているものが、別にあった。彼の鼻が、全体からみて、アンバランスに高すぎるのである。その鼻梁は細く、しかし切りたっていた。加えて、上顎骨が著しく前方に突出し、下顎が反対に後退しているのだ。鳥の顔(バード・フェイス)。学生の多くが、彼の顔を見て鳥を連想した。

「患者さんを下げて宜しい」

看護婦は教授に一礼し、患者の体に布をかけ、ストレッチャーを押して講堂の外へ出て行った。

「感想はどうかね、プラクチカント諸君」

雛段の下に残った、五人の学生に、教授が訊いた。一人が答えた。

「はあ。顔も体も、九十歳位の老人に見えます」

「そうだな。九十、いや百まで生きすぎた老人を思わせる外観だ」

教授はそう言って一息ついた。

「筋肉(ムスケル)や皮膚(ハウト)の萎縮(アトロフィー)の他に、骨格(クノッヘン)をX線で見ると、骨粗鬆症(オステオポローゼ)や、変形性背椎症(スポンジローズ・デフォルマンス)が高度にある事が判る。それらの変化から彼の肉体年令を推定すると、彼の暦年令が十歳十一ヶ月なのに、肉体年令は九十六歳相当の退行変性(デゲネラチオン)を示している事になる」

級友が講義を筆記するさらさらという音は、藤堂の眠りを更に深くした。

「内臓(オルガン)の機能にも衰えがあり、高血圧(ヒペルトニー)こそないが、動脈硬化(ヘルツ)が多数の器官に強いダメージを与えている殊にそれが、心(ヒルツ)、腎臓(ニーレ)、脳などに著しい。尿(ハルン)に蛋白(アイヴァイス)が出ているし、心電図(ユーカーゲー)で心臓の萎縮を知る事ができる。脳はその発育が六歳で停止した状

態にあり、それが逆の方向に向いつつある。早晩、老人性痴呆（デメンチア・セリニス）といった状態になるものと思われる」

一人を除いて、学生たちは熱心に筆記を続けていた。

「前立腺（プロスタータ）は肥大し、徐々に自然排尿が困難になりつつある。性器は、それが完成する前、既に萎縮が完了した。彼には性ホルモンは、一ミリガンマもない。いや、性ホルモンだけではない。成長を司どる成長ホルモンも、性腺刺戟ホルモンと共に分泌（ゼクレチオン）を停止している。もう彼は成長する事がなく、大人にはなれない。老人にはなっていますが。反対に、体が縮む事はある。背椎骨（ヴェルテブラ）の老人性萎縮や何かによってね。それだけではない。新陳代謝を司る甲状腺（シルドドリューゼ）も、サイロキシンを正常の十分の一しか分泌していない。インシュリンは、まあまあの量を分泌していますが。ただ一種だけ、分泌がかえって増加しているホルモンがある。プラカンの諸君、判りますかね？」

誰も答えられない。

「色素細胞を刺戟する、メラノホーレンホルモンです。だから、彼の皮膚には、黒褐色の色素斑が多数見られる。電気を消して下さい。スライドをお見せする」

講堂が暗くなった。藤堂の眠りは、仮眠から熟眠へと変った。

「彼の眼底を撮影したフィルムです。このように、強い動脈硬化の所見を有する」

アイドルボーイの藤堂が、もし起きていたとしても、この眼底の所見を読みとる事は出来なかったろう。

「電灯を」

明るくなった。藤堂の瞼が、二、三度痙攣した。

「外見上の特徴は、君らが見た如く、筋肉や皮膚の高度の萎縮が、全身にくる事です。とりわけ、顔面には附属品が多いので、より印象的になります。鼻が尖り、下顎骨が後退し、上顎骨が突出する、一見して鳥を思わせる容貌、バード・フェイスを呈している」

その鳥の顔を、一人だけ近くで見なかった藤堂は、まだ深々とした眠りの中にあった。

「イギリスでは、六歳で発病し、九歳で死んだ症例がある。一般には、もう少し遅く発病するようです。我々のこの例は、七歳九ヶ月の時、始めて所見が出ています。その後の三年二ヶ月のうちに、彼は八十何歳分を一挙に老化した事になります。現在はやや進行が鈍化しているように私には思えます。色々と治療したなかで、若い人から提供された生血（せいけつ）の輸血が、効果があったのかもしれません」

一日でも長く生かしておきたいものだと、祈りを胸にこめて、教授は講義を続けていた。貴重な症例なのだ。紹介されて来た患者を外来で一目見て、教授は狂喜した。患者の父は、地方の小さな商店主であった。そう裕福ではなさそうであり、教授が入院しなければならない、というと、彼はもじもじした。

そんな、患家の経済状態などという、教授にとってはとるに足らない理由で、この貴重な、学界にショックを与える事が出

来る一例報告（ケース・レポート）の種をのがしてしまったら、教授にとっては大損害である。それで彼は父親に、学用患者（コスト・フライ）にしてやる、と重々しく約束した。父親は喜んだ。だが、学用患者（コスト・フライ）には条件がありましてねえ、と教授はつづけた。入院費は只だが、死ねば解剖されるという条件である。ただし、詳しい事、つまり、このような極めて稀な疾患の時には、その体の大部分は標本として大学に残され、遺族へ渡されるのは、手や足の骨位しかない、などという事は、もちろん説明してやらない。

そんな詳しい事を知っていたか知っていなかったか。患児の父は唯々諾々として息子を入院させた。大学病院でなら、地方の複数の専門医たちが頭をひねった息子の病気を、治して貰えるだろう、と思ったからである。その父親に、教授は恩きせがましく、言った。

「こんな病気の人が、お宅の家系の中にはもっといるかもしれませんな。早期に発見すれば、ひどくならずにすむものでしてね。あなた方と血の繋がっている人たちの子供を、全部診察にこさせてはいかがです？　いや、費用はこちらで負担しますから、ご心配なく」

もしかすると、これが、プロゲリアの原因をつきとめる好機かもしれないのだ。もし、彼らの家系に、一人でも別のプロゲリアの患者が存在していたら、プロゲリアの発生の原因を遺伝に求める重要な手がかりになる。

だが、教授の思惑は外れた、彼の家系には、一人のプロゲリア患者、いや、それと疑いを持つ事が出来る症状を持った子供も、発見出来なかったのである。

「考えられるあらゆる検査をしてみました。何か、他の疾患と同じ所見が見つかるかもしれませんからね。だが、何にも所属させる事が出来ませんでした。発育不全を示す、原始性矮人症（プロモージャル・ドウオーフィズム）という疾患がある。人により、プロゲリアをこの疾患に含めようとする人がいますが、プロゲリアには、この疾患にみられる、ある種の酵素の欠乏による、特異な尿中への代謝最終産物の排泄はない。また、たとえばターナー症候群（シンドローム）のような、一見して判る染色体異常も今の所発見されておりません」

そう説明をしてはいるが、教授はまだ原始性矮人症（プロモージャル・ドウオーフィズム）の実例を見た事はなかった。

「プロゲリアは、原因不明の疾患です。ですが、ヒントが一つだけある。エプスタイン、ウィリアムス、リットルの三人が、一九七三年に発表したものですが、プロゲリア患者の細胞を、X線で照射し障碍を与えると、その細胞のDNAの修復機能が、正常人の細胞のそれよりずっと悪くなった、という事実です。その細胞内ではいつまでも、DNAが正常に戻れなかった。という事は、損傷された細胞が、分裂能力の低下、もしくは停止を来たしている事を意味します。さて、放射線がDNAを阻害する事は明らかですが、原因はその他にもあります。化学的なものとしては、アクリジン系統、プロモウラシル、アミノプリン、亜硝酸、アルキル化剤。物理的要因としては、紫外線など。

――どんな生物も、紫外線をまぬがれる事はむずかしい。実験的に確実な証拠を掴む事は困難ですが、この頃増えたとか増えないとか言われている宇宙線にも、その力がある、と考えられます」

今後は、ＤＮＡを主題として、追求していく事になるな、と教授は考えていた。同じ状態を、動物で造ってみるのだ。放射線か何かで、そのＤＮＡを破壊して、老化を早めてやるのだ。

――

「ＤＮＡ、即ちデオキシリボ核酸。それを損傷させる。すると、遺伝暗号解読の結果としてできる蛋白質のアミノ酸組成に大きい誤りが出てくる。その詰果、分裂してできた新細胞が前のと違った――ひどい変化はないにしても、違った細胞になってしまう事になる。人間の一生の長い時間のうち、ＤＮＡが種々の障碍に数多くさらされるのは、必然の事です。たとえば、高年期出産児に奇形が多い、などはこれでしょう。高年者の白髪や禿、これも毛根細胞のＤＮＡが損傷をうけ、そうなったと考えられますな」

数人がくすりと笑った。教授の前額部が、ずっと後退していたからである。

「こうしてみると、ＤＮＡの損傷回復機能の減退が老化である、と考えていいかもしれない。損傷により不完全になったＤＮＡが、結果としてその複製を造らなくなったり、不完全なレプリカを造る。かくして分裂によって生じた新細胞が、欠陥を有した細胞として残る。また、分裂機能を喪失したため、老朽した細胞がそのまま残る。かかる細胞が充分に機能する事は、まず考えられない。老化というのは、このような機転で起こる、と現在、考えられております」

そこで教授は一息ついた。机にうつぶして眠っている藤堂の姿が目に入った。話術に自信のある教授は、藤堂の風邪が相当ひどいのだな、と誤診した。

「さて、プロゲリアですが、これもやはり、その病根はＤＮＡにある、と思います。彼らのＤＮＡが、先天性（コンゲニタール）に脆弱すぎるためではないか、それでたやすく、紫外線その他のＤＮＡ損傷回復阻害因子の作用を受け、体内の細胞すべてが次々と老朽又は欠陥細胞と化し、老衰への道を辿る……」

第二幕　医学部学生食堂における『初発症状（イニチアル・ジンプトオーム）』

「この前の小児科の臨床講義に出た患者な」

あの講義の二週間位あとである。昼食時の学生食堂で、藤堂の級友の駒田が言った。

「あれか、プロゲリアの」

同じ級友の堀口が言った。藤堂、堀口、駒田の三人が一つテーブルを占めている。性格的には全然違っている三人だが、なぜかうまが合い、親しくつきあっていた。

その三人の一人、藤堂は今日も眠かった。だが今日は眠って

すますわけにはいかない。午後の外科の臨床講義のプラクチカントにあたっていたからである。外科の教授は厳格な人であった。眠さのあまり緊張を欠いたら、どんな事になるか判らない。それで彼一人は、昼食をぬいて、コーヒーを四杯もお代りして、眠気をさまそうとしているのである。

「そう、あの患者、昨夜死んだそうだ。そこで、教授以下、留守番の若手を除いた小児科の医局員のほぼ全員が、病理解剖を見に、病理解剖室へ行っているそうだ」

「僕も見たいな」

堀口が、部厚い原書から顔をあげて言った。藤堂は、よくあんなものを読むな、と感心していた。彼は横文字の本など、読む気をおこした事は一度もない。堀口が読んでいるのは、勿論、医学書である。彼は厚さが十センチ位ある原書の、ほぼ半分位の所を、昼休みを利用して読んでいる所だった。

堀口は医学以外に全然関心を示さない、典型的な学究の徒であった。彼の下宿の部屋には、テレビもラジオもない。新聞すらとっていない。だが、医学雑誌は十数種も講読している。そのうちには、英語やドイツ語の雑誌も幾つかある。彼は優秀な学生であった。教授連の覚えもいい。卒業して、どこかの科へ入局したら、エリートコースを歩むだろうな、と藤堂は考えている。藤堂自身はおよそその反対で、平たく言えば、勉強が好きな方ではない。遊びの方は好きである。彼が勉強するのは、試験が迫ったときだけで、それも、この位勉強すれば六十点くらいはとれるな、と思う時点でやめる事がしばしばである。不思議と、今までそれで通ってきた。当人は、この分なら国家試験も六十点ベースで、と思っている。

その藤堂と、真面目な堀口が親友なのだから、判らないものである。だが、よく気が合うのだ。この二人に駒田を加えた三人は、講堂でも、休憩時間でも、いつも一緒だった。藤堂にとって、堀口と交際するのは、得な事であった。完璧な彼のノートをうつさして貰えるからである。横文字が多すぎるのが、難ではあるが。

「学生は駄目だろう。解剖室は小児科の医局員でいっぱいで、入りこむ隙間もあるまい」

駒田が言った。その時、藤堂が大あくびをした。

「眠いのか、藤堂。またジャンか？」

「いや、ディスコで。三時まで」

「よく続くな」

駒田が言った。藤堂は思った。俺はどうせ、栃木の山の中で、開業医をしている親父のあとを継ぐだけだ。卒業して、どこかの医局へ入って研修して、学位をとったら、あの狭い、医者が何かすると翌日すぐ全市民に知れわたるような、ちっぽけな街へ帰らなければならないんだ。そうなったら、もう何も出来やしない。牢へ入れられたようなものだ。だから今のうち、遊べるだけ遊んで、遊びだめをしておかなければならないんだ。大学の試験には慣れた。いつでも六十点とれるコツを覚えた。国

家試験……徹夜を二、三晩すれば、何とかなるだろう。徹夜は、マージャンで慣れている。……

「よく続くな」

そう、駒田は言った。本当に感心したような声である。変わった奴だ、と藤堂は思っている。親が医者であるという点で、藤堂と駒田の境遇は似ている。でも駒田の父は開業医ではなく、勤務医である。都内の、大きな公立病院の院長をしている。その病院の院長になる前は、本学、即ちこの三人が学んでいる大学の、医学部の教授であった。内科学の泰斗である。あの小児科の教授なども、学生時代は教えられた口だという。その父に彼は、なりたくもない医師にされた。その点は藤堂と共通している。藤堂も、父に無理強いされて医学の道へ進んだ。それが、彼ら二人を近づけた理由かもしれない。

駒田の頭脳も優秀であった。閃きの早さでは、秀才の名が高い堀口より上かもしれない。基礎医学だけ学んでいた低学年の頃は、彼の成績はクラス一だった。それが臨床医学に入ると、彼はとたんに藤堂クラスの劣等生になった。全然勉強しなくなったのだ。それが、試験の前日であっても。彼に言わせると、臨床医学には全然興味がないからしないのだそうである。本当は天文学者になりたかったのさ、と彼が言うのを、藤堂はきいた事がある。その時藤堂は、駒田のような変わり者には、天文学の方が向いているだろうと思った。でも彼は父によって、医学部へ入れられてしまった。だが彼は、親父のような臨床医家には絶対ならない、とうそぶいている。卒業後は、微生物学者にでもなるか、といっているのだ。

彼は今でも、天文学のそれも相当な専門書を、しかも講義中に読んでいたりする。いや、天文学だけでなく、もともと趣味の広い男で、しかもその趣味たるや、どれも藤堂のように俗なものではない。例えば、地史学に関しての造詣は専門家はだしだし、歴史の知識も広いし、文学にも明るい。驚くべきスピードで、色々な本を乱読している。先日彼は、ＳＦってのは面白いね、と藤堂に語った。ＳＦなら、藤堂も昔からよく読んでいる。それで彼を相手に、ＳＦの話を始めたら、なんと駒田の方が遥かに広く知っていて、藤堂は自分の知識の生半可さを思い知らされた。その時以来、彼とＳＦの話をした事は一度もない。

「今のうちさ。遊べるのは。俺の街へ来てみろ。なぜ俺が勉強をしないで遊んでるか、君らも判る。だが、眠いのは困るな」

「お前午前中はずっと眠っていたんだろう」

「うん。それでも眠い。新聞に、宇宙線が増えているという記事が出ていたが、そのためかな。あれだけ眠ってもまだ眠い」

「宇宙線が増えたっていっても、僅かな量さ。紫外線の方がずっと多く増えているんだ。だが……」

しまった、と藤堂は思った。駒田に、彼の知識に関して長広舌をふるうチャンスを与えてしまった。

「日本人の体に対して影響力がある程じゃぁないな、宇宙線の増加も、紫外線の増加も。アメリカでは紫外線の増加が皮膚癌

の増加につながるという理由で、高層のオゾンを保護するため、ずっと以前からコンコルドの乗り入れを禁止したり、フロンガスを規制したりした。だが、最大の原因、熱帯ジャングルでの森林の乱伐だけは、アメリカの力でもどうしようもない」

「皮膚癌と紫外線が関係あるのか？」

「知らんのか藤堂。でも日本人の皮膚細胞のＤＮＡは、白人のより抵抗力がある。だから日本人は、あちらほど敏感になっていないんだ。また、宇宙線の増加の方は微々たるもので、誤差範囲さ。それを一部マスコミが、大げさにとりあげたにすぎない」

「だが小児科の教授は、プロゲリアと宇宙線が何か関係しているかも知れないと言ってたぜ」

　堀口が言った。眠っていた藤堂には、初耳であった。

「でも、宇宙線に関しては、あまり重きをおいてる様子ではなかったな。要するに、あの患者はそれらの、宇宙線や紫外線や放射能や、化学物質や、そういったもの全てに対して弱いから、プロゲリア、つまり老衰になったのさ。俺が考えるに、プロゲリアというのは、表面には出ない奇形じゃないかな。分子生物学的に言えば、ＤＮＡ、それの奇形じゃないのかな」

「奇形か、なるほど」

　堀口が頷いた。藤堂には判らない。分子生物学というのは何だったろう？　たぶん寝不足で度忘れしたのだ、と彼は思いこもうとし、そして、昨夜のディスコの事を思い出して、舌打ちしたくなった。若い女の子が、彼を頭から年寄り扱いした。いまいましい。俺は、昨夜死んだ十一歳の子供より、肉体的にはずっと若いんだ！

「癌もそう考えられる。ＤＮＡが変化したため、別の細胞に変ってしまったのが癌細胞。皮膚癌の場合には、ＤＮＡが紫外線によって痛めつけられた事になる。プリン塩基としてアデニン、グアニン。ピリミジン塩基としてチミン、シトシンの四つを持つＤＮＡ。それがやられれば、細胞は老朽化したり、ひどい場合には別の性格を持った、例えば癌細胞に変わることなどは充分考えられる。その損傷は、四つの機転（ダブル・ヘリックス）があるといわれる。置換、逆転、欠落、挿入。それが二重螺旋の中で行われる。堀口。英語じゃぁ何という？」

「サブスティチューション、トランスヴァージョン、デイリーション、インサーション」

　困る。困る……。ただでさえ眠い藤堂には、より眠気をもよおす話になった。これ以上、こんな議論を二人の間でかわされたら、退屈のあまり、眠気がよけいひどくなり、あとをひく。その結果、外科のプラカンで失敗し、あの厳格な外科の教授に赤点など頂いたら、たまったものではない。話を変えよう。そうだ、駒田の好きな話に変えてしまえ。これ以上プロゲリアやらＤＮＡに祟られてはたまらない。俺と違ってこの二人は、そんなものにうんと興味を持っているから、途中で阻止しないと、いつまでも話を続けられてしまう。駒田一人だけこっちの話に

ひきずりこめば、堀口は黙ってあの糞面白くない横文字の本に熱中し続けるだろう。この前、床屋で読んだ週刊誌に、駒田の好きそうな話がのっていた。

「そう言えば、中生代の恐竜が死滅したのも、宇宙線量が急に増加したからだ、という説があるそうじゃないか、駒田。その同じ宇宙線が、哺乳類の先祖にはプラスの方向に働き、爬虫類時代が終り、哺乳類時代が始まった、というんだ」

駒田の表情が変わった。おや、という表情である。藤堂がそんな事を知っているのが、意外だったのだろう。そして彼は、舌で唇の周囲をなめ回した。彼のくせである。これから雄弁をふるう前に、よく見せるくせだ。

それを見て、藤堂はもう一杯、コーヒーを飲む事にきめた。

彼ら三人が、昼休みの後、午後から始まる外科の講義へ出るため連れ立って歩いている途中、病理学教室の玄関から、教授始め小児科教室の医師たちが、ぞろぞろ、喋りながら出てきた。

あのプロゲリアの患者の病理解剖が終ったらしい。

第三幕　小児科教室における『病盛期（アクメ）』

数ヶ月後、藤堂を含めた三人は、無事に卒業した。そして、国家試験も通った。そのあと一年間、研修医として各科を回ったあと、夫々医局に入局した。駒田は微生物学教室へ入った。藤堂は、堀口と共に小児科教室へ入った。内科医院を開業している藤堂の父が、彼に小児科を専攻する事を厳しく命じたからである。

「馬鹿な親父さ」

藤堂は堀口にこぼした。

「子供の数が、どんどん減っているというのになア」

「親父さん、内科だったな」

「ああ。割合はやっているんだ。まだ六十には間があってね」

「お前に小児科を勉強させ、内科は自分でしこむつもりなんだろう」

堀口はそう言った。当たっているかもしれない、と藤堂は思った。彼の故郷の市には、小児科の専門医は市立病院にしかいない。そこでは、長い時間待たされ、診療が一日がかりになってしまう。それで、市の内科の開業医の所へ、乳幼児が殺到し、父も痛い目にあう事がたまにあるのを、彼は知っていた。子供は容態が急変しやすい。そして、子供は大人の雛型ではない。同じ病名でも、症状も所見も、治療法さえ違う。だからもし、藤堂が小児科専門医として帰って行けば、いかに出生数が減ってきているとはいえ、門前市をなす盛況を呈する事は、容易に想像される。

彼らが小児科教室に入局したのは、三月であった。同級生たちも、殆んどがどこかの医局や、地方から来ていた者は、地方の大学の医局などに入局していた。

彼らが入局してすぐの四月始め、恒例の医学会が開かれる。入局したての藤堂と堀口も、その準備にかり出された。勿論、重要な事は扱わせて貰えない。スライドの図表の下書きや、その他色々な雑用をさせられるのである。

「学会は、今年は京都でしたね」

藤堂はスライドの下書きをしながら、先輩の医局員に訊いてみた。

「そうだ、医学会と言えばきこえがいいが、まあ、大学に残っている医師たちの修学旅行みたいなもんだね。でも、演題を出している医師にとってはそうでもないんだぞ、自分の発表が終るまで、ビクビクしてなきゃならないからな。だけど、自分の出番が終ると、とたんに羽目をはずす。でも君らは今回は、入ったばかりだから留守番だ。来年を期待してしっかり留守してくれ」

「判ってます。所で、このスライド、プロゲリアに関する研究のようですね」

「そうだ」先輩はなぜか、眉をひそめた。

「しかも二例ですね。こんな珍らしい症例を二例なんて、他の大学の人が見たら、羨ましがるでしょうね」

「それがそうじゃあないんだ。送られてきた抄録を見ると、プロゲリアに関する演題が、十の教室から出されている」

「十の？　でも先輩、プロゲリアは、極めて稀な……」

「その筈だった。それが十の教室から、十六も症例が出ているのさ」

「十六例もですって？　そんな……」

堀口が仰天してきき返した。

「いや、本当なんだ。間違いなく、本物のプロゲリアとしか思えない症例（ファール）が、十六例、抄録に紹介されていた。教授（おやじ）も落胆しているよ。珍しい症例（ファール）を、しかも二例も集めて、はりきっていたのにな。あまり報告例が多いので、半分は小児科学雑誌への、誌上報告だけに格下げされた。うちは二例だから、会場で発表する事が出来るけどな」

藤堂はなぜか不安を感じた。漠然たる不安であった。別に、理由らしい理由はない。

「それで、プロゲリアの原因は、判ったんですか？　やはり、この頃増量を伝えられる宇宙線なんでしょうか？　だからプロゲリアが増えた、とか……」

「最初は教授（おやじ）も、宇宙線か、と思ったらしい。でも、増量といっても、ほんの数パーセントだろ。宇宙線と断定したら、学会で、どうして宇宙線と断定した、と、質問の集中攻撃をあびて、立往生だ。それに、抄録を見るかぎり、宇宙線にふれている所はどこにもないよ。断定はしていないが、教授（おやじ）は今では患者の中に問題があるのだろう、と思い始めているらしいんだ。患者のＤＮＡが、ごく障碍されやすくできているためじゃぁないか、とね。それで、ラッテの実験も中止になったのさ。何千頭のラッテを使って、Ｘ線を浴びせてみたが、一頭の早老ラッテも発

生しなかったんでね。放射能障碍で死んだのはごろごろいたが。そうそう、暫く実験のあてはないが、ラッテの世話だけはしっかり頼むぞ。我々の留守中、餌をやるのを忘れないようにな。も一つ、増えるのにも気を配れ。ほうっておくと、どんどん鼠算で増えるからな。帰ってみたら、ラッテの数が倍になっていた、なんて事になったら、教室の予算が全部鼠に食われてしまう」

「増やさないようにするには……」

堀口が訊くと、先輩は笑った。

四月。教授以下の主要なメンバーは、学会へ出かけて行った。留守は、藤堂と堀口の二人の新人を含め、一人の講師を主任（ハウプト）とした、全部で六人のメンバーである。それだけの人数で、小児科の全入院患者と、外来を担当しなければならない。藤堂にとっては、生まれて始めての忙しさで、目が回りそうな日々を経験した。その上、彼には堀口と一緒の、ラッテの世話という有難くない仕事もあった。

十日後、教授一行は意気銷沈して帰ってきた。もうプロゲリアは、さほど稀な疾患ではなくなっていたのである。他の大学の実状を知って、学会での報告を見あわせた所もあるということであった。

「最初の一例を、すぐ発表してしまえばよかったな」

教授は、残念そうに言った。医局の会議室での、学会報告会の席上であった。

「そうでしたね。あの時、第一例の患者のデータを、発表するつもりで整理していた。そこへ第二例が入ってきたので、二例一緒にと、つい欲を出してしまったのが、まずかったんですね」

助教授が言った。時間的には、この教室の症例が一番早かったのである。昨年度の学会で発表されていたら、大きな成果となった事であろう。

少し間をおいて、留守部隊の主任をつとめた講師が発言した。

「プロゲリアと言えば、先生の留守中にまた一人来ました。入院を希望しましたから、一応いれておきました」

教授と助教授が、顔を見合わせた。

「ところで、プロゲリアの原因を解明した教室は、ありましたか？」

その講師が訊いた。

「宇宙線、紫外線、放射能。そのいずれもが、予想通り確実な原因としては、肯定されなかったよ。ＤＮＡの障碍という点では一致していたがね。何がＤＮＡを障碍するか、その何をつきとめた教室は、なかった。ただ、九州の大学の報告は、ちょっと示唆するものがあったな。そこでは二例報告していたが、その二例とも、過去重症の消化不良症（ディスペプシー）に罹（かか）り、化学療法剤のメタシプロン酸を、比較的大量投与された事があった、というんだ。大坪君、あの患者たちはどうだった？　メタシプロン酸、商品名はなんと言ったかな、そうだ、メシプラミンが使われた事は

あったっけかな」
「なかった筈です」
助教授が答えた。
「もっとよく調べておいてくれ」
「判りました」
藤堂と堀口は、古参助手の一人の補助役として、外来患者の診察にあたっていたので、この報告会には出られなかった。診療が全部すんでも、二人にはまだ仕事が残っていた。ラッテへの給餌である。
「すぐ来いよ。教授の土産の酒の肴、なくなってしまうからな」
手を洗いながら、外来係の古参助手が二人に言った。
「はい。なるべく早く、餌づけをすませてからふっとんで行きます。先輩、悪いですが、私たちの分、少しとっておいて下さい」
「それは構わんが、餌をやるだけなら、そう時間はかからんだろう」
「それが、昨日、仔を生んだのがいるもんですから」
先輩は笑いながら言った。
「まあ、一頭か二頭が仔を増やしても、どうという事もあるまいが、しかし、あんなに放射能を浴びて、よく仔を生む事が出来るな、ラッテって動物は。君たち、雄と雌を分けておいたのか？」
「おいたつもりですが……」
藤堂は頭を掻き、先輩はそれを見てまた笑い、急ぎ足で会議室へ向った。二人は、動物飼育室へ行った。
そこで、二人は見た。昨日生れた八頭のラッテの仔のうち、二頭に、異常が発生していたのだ。六頭は、争って母獣の乳を飲んでいた。しかし、残りの二頭は、這いまわりもせず、胸と腹を大きく起伏させていた。この二頭は、他の六頭より痩せ、毛の色に艶がなく、所々に脱毛さえあった。
「おい。これ、ラッテのプロゲリアと違うか？」
藤堂が堀口に言った。
「まさか。病気だろうよ、何か細菌性の」
堀口はそう言って、他の六頭の仔を手で払いのけ、二匹の弱々しいラッテを、母の乳首のすぐそばにおいた。
でも、もう彼らには、母乳を吸引する力も残っていなかった。
「死んでしまうぜ、隔離して、何かやってみるか？」
「乳児用の哺育器にでも、入れてか？」
藤堂がそう答えた。人間用の哺育器に、ラッテをいれる事は、出来ない相談である。
「この状態では、死ぬのは眼に見えているな」
「いずれは死ぬ実験動物さ。誰かが新しい実験を始めたら」
もっとむごたらしい死に方をするだろう。
「教授に、報告しなくて、いいだろうか？」
「俺がしておくよ。折りを見て。ただし、今日は駄目だ。プロ

ゲリアの報告が反響を呼ばなかった事で、ショックを受けてるからな。あす、総回診が終ったら、そっと話してみる」

「それまで、この二頭を離しておくか？」

いつになく、センチメンタルに、藤堂は答えた。

「せめて死ぬまでは、母親と一緒にしといてやろうや、な」

会議室へ行き、教授の話をきき、酒を飲んで、藤堂も少し淘然となった。失意の教授は、藤堂たちが入って来た三十分位あと、帰宅してしまった。宴会は九時半頃散会し、ほろ酔いの藤堂は、動物飼育室へ行ってみた。あの仔鼠がもし死んでいたら、離しておこうと思いついたのである。だが、二頭の仔ラッテの姿はなかった。堀口がどこかへ蔵っておいたのかな、と考えて探したが、ない。それで、母ラッテの巣箱を探してみた。六頭の、健全な仔ラッテと、母獣がキイキイないた。そして、彼らの間から尻尾の尖端が二本、出てきた。

しまった！

と思った。堀口のいう通りにしておけばよかった、と。

二頭の仔ラッテは、死んで、親に喰われてしまったに違いなかった。

次の日、教授の総回診があった。久しぶりの事なので、医局員たちは緊張した。二人の新入局員の藤堂と堀口にも、その緊張がうつって、二人ともこちこちになっていた。せい一ぱい、検査をして、それにあわせた治療をしているつもりでも、高い次元から見る教授の眼によれば、重大な見落しをしているのがよく発見されるからである。実際、そのような例を二人ともよく見ている。だから、教授の診察が終るまで、はらはらしていたが、彼らが受け持っている患者は、ごくありふれた軽症の患者だったので、何事もなく通過した。

問題となったのは、教授が留守中に入院した、あのプロゲリアの女児であった。

「……四歳六ヶ月、女児。満期安産。家族歴、既往症とも、特記すべき事はありません。初発症状は……」

主治医は緊張して報告した。続いて彼は、彼女の症状、所見、検査成績を述べた。

「四歳六ヶ月ねえ……」

今までで、一番若い症例である。それなのに、顔中皺だらけだ。その皺の間に、茶渋色の斑点が点在していた。口腔には歯が一本もない。そして白髪と鳥の顔。

しなびた老婆の全裸は、人間とはとうてい思えない物の姿をしていた。自分の受け持ち患者の総回診を終え、教授のあとについて病室を見て廻っていた藤堂は、彼女に、乾からび、縮んだミイラを連想させられた。が、そのミイラが動いたため、藤堂の連想が変わった。——

昔読んだ小説のヒロインを連想したのである。ライダー・ハガードの洞窟の女王（SHE）、アッシャが、「生命の火」をあびて、見るも無残な、生きているミイラと化していくシーンだ。彼女の

手も脚も、胸部も腹部も、水気をすっかり脱きとったような皺がよって、縮んでいる。その下腹部には、おむつのあとがあった。

教授は、聴診器を患児の胸にあてようともせず、主治医の説明に耳を傾け、患者の全身を望診し続けた。醜悪な、造物主の悪意ある、作りそこねの自信作を。

「知能も低下しています、ＩＱは、五十そこそこを示しております。視力の障碍が、それに大きく関与しているのではないか、と思われますが」

彼女の視線は、あらぬ方に行っていた。だが固定視ではなく、その視線は動く事があった。

「老眼でかね？」

「いいえ。眼科に往診して貰いました。白内障（カタラクタ）が進行しておりまして、手術は出来ない、と言われました」

「白内障か。なるほど、ありうる」

教授は、患児の胸に左手をおき、打診を始めた。そうしながら、主治医に訊ねる。

「例の、メタシプロン酸を、この子は使用した事があるのかね」

「いいえ。そういうものは全然使用した事はない、と両親は申しております。これまで、病気らしい病気をした事はないそうです」

「充分に治療してやるように」

「どのような……」

問いかけた主治医の声は、教授が聴診器を耳にはめてしまったので、聞こえなかったかもしれない。

実際には、この病気には適当な治療法はないのだ。蛋白同化（アナボリック）ステロイド、成長ホルモン、甲状腺ホルモン、ビタミン、ミネラル、栄養剤の点滴、ある種の漢方薬、強壮剤……。どんな薬品であれ、多少の延命効果はあっても、この子の老化現象を、元に戻す事は出来ない。老衰は、治らない。その老衰が主病変として表へ出ている病気も、当然治る事はない筈だ。あらゆる生命は、どんなに健康であっても、寿命の火を燃やしつくせば、老衰して、その一生を終える。寿命の永遠性を拒否する、死神の最後の切札が老衰なのだ。そのオールマイティの切札にかなうものは、何もない。たとえ、一時的にはひきとめられても、人間が生命体である限り、老衰の徴候を示したものは、年令に関係なく死ぬ。老衰は、もうやがて死にますよ、というサインなのである。

教授は診察を終え、カルテに目をやった。

「治療法はこれでいいだろう」が、点滴は糖分（ツッカー）だけでなく、アミノ酸と脂肪（フェット）もやってみたらどうかね」

「やってみました。しかし、老衰しきった体力が、アミノ酸、脂肪の点滴には耐えられませんでした。うんとゆっくりやったのですが、顫（ふる）えがきました。で、中止しております」

「そうか……」

教授は少しの間、黙った。彼の沈黙は、この早老症（プロゲリア）の女児に対して、もう何もやってやれない、という事実を意味していた。

「で、輸血などはいかがなものでしょうか」

「いいだろう。そうだ、なるべく若い、強壮な人の血がいいな。勿論、生血（せいけつ）で」

「判りました」

教授の診察は、次のベッドに移った。あまり珍しくない病気の患者で、診察はすぐ終った。その患者は、もう恢復期であった。

「この患者は　退院を希望しておりますが」

「いいだろう」

心ここにない様子で、教授は許可を与えた。

総回診後の会食のとき、藤堂は教授にラッテの仔が老衰のような症状を呈して、死んだ事を言おうとした。だが、邪魔が入って、いいそびれてしまった。

内科から、助教授が直接、カルテを持ってやって来て、小児科の教授に往診を依頼したのである。

「二十三歳の男性ですが、どうやらプロゲリアらしいんです。ですが、きめ手がありません。成人のプロゲリアの文献が見当らないんです。それで断定しかねまして。先生は最近、二例も経験なされているそうですから、一度、診て頂きたい、と存じまして」

「いいですよ。総回診も終りましたし、昼食もすみました。何でしたら、今すぐにでも」

第四幕　藤堂内科小児科医院における『瀕死（アゴーニア）』

藤堂内科小児科医院の待合室。待っている患者は一組だけ。両親と一緒にきた、年令の推定出来ない子供である。

真夏の昼下りの暑さで、両親の方は汗ぐっしょりだが、子供は少しも汗をかいていないようだ。

父親が窓口に行って保険証を出した。

「病人は子供です」

受付に言う。額の汗をふく。その頭髪は、半分以上白くなっている。

ソファに寝かせられた子供のそばにいる母親にも、白髪が目立った。

「これをどうぞ」

窓口から、体温計がさし出された。父親は、それを受けとり、ぐったりしてソファの上で寝ている、子供のそばの母親に渡し、そしてまた、窓口の前に立った。

「今まで、岩井先生にかかってらっしゃったのですね」

「はい。岩井先生が、おなくなりになったので……」

「少々、お待ち下さい」

患者の父は、妻と子の所にもどった。その子は生まれた時からずっと岩井内科へかかっていたのである。だが、岩井医師は死んでしまった。老衰で。今、息子がかかっている病気と同じ病気で。だから彼は、藤堂医院へ子供を連れて来たのだ。初めてなので、妻も一緒に。

彼は、妻のそばにかがみこんだ。息子は眠っていた。この頃は、すぐ眠るようになった。起きている時でも、いつもうつら、うつらしているように見える。

「眠っているのか、また」

妻に訊いた。

「ええ」

答えて、眼頭を、彼女はおさえた。涙の一滴が、患者の頬に落ちた。でも、患者の眼はさめない。

「元気を出せ。ここの先生は、うちの子のような病人を、沢山診てる、という話だから」

「でも……治った人が一人でもいるの？」

父親は黙った。じっと窓の外を見る。青い、木々。そして空。姦(かまびす)しい蝉時雨。のどかな地方都市の夏の昼下がり。平和だ。

だが、夫妻の胸のうちは、平和どころではない。

子供は、まだ眠っている。でも、その寝顔は、あどけない寝顔とは言えない。両親以外の他人が見たら、まず気味悪さの方が先に立つだろう。

表面まで、輪廓を表した、顔面の骨格群。しみだらけ、皺だらけの、数百年もたった羊皮紙のような顔面の皮膚。半開きにされた、歯が一本もない口。そして、何よりも薄気味悪く感じられるのは……

鳥のような顔。

その患児の名を、受け付けの事務員が呼んだ。「……さん、どうぞ」

藤堂が父のあとをついで、もう六年経った。父は昨年、六十五歳で枯れるように老衰で死んだ。それ以来藤堂は一人で、藤堂内科小児科医院の院長として、ずっと診療行為を続けている。

患者は、年々少なくなっている。だが、死亡診断書を書く枚数は多くなった。でもそれは、藤堂の腕が悪いためではない。単に、死ぬ人が多すぎるからである。

その死亡診断書を書く時、一番多い病名は老衰である。五歳の幼児、二十歳の青年、四十歳の壮年、いずれも全身の老化現象の進行による老衰で、苦しむ事なく、枯れるように死んでいくのだ。

だから、診断に頭を使う必要はない。それで六年前、彼が父のもとに帰ってくる条件の一つとして無理に購入させた、高価な自動診断機(オートダイアグナイザー)を使う事も、めったにない。ひと目見れば、聴診器すら使わず、いや、既往症や自覚症状を聴く事すらなしに診断がつく老衰の患者が、大部分を占めているからだ。それで自動診断機には、うっすらと埃がたまっていた。

早老。その原因が、ＤＮＡの損傷回復不全にあるのを、今では誰でも知っている。この結果、細胞の分裂能力が停止する。停止しなくとも、欠陥ＤＮＡによって造られた新しい細胞は、機能が低下した細胞となっている。それが全身の細胞に起これば、あらゆる器官は、組織は、老いた細胞か、機能の悪い細胞によって次第に置き換えられてしまう。それが完成したのが、老衰。――だが今の老衰は、もはや高齢者の専有物ではなくなっていた。

地球上のあらゆる国で、国民の平均寿命は急速に短くなっていた。この六年間で、日本人の寿命は十二年も短縮した。もう、六十歳を割るのも、そう遠い将来ではあるまいな、と藤堂は思った。もしかすると、もう割っているのかもしれない。

今年になって、老化現象はその範囲と速度を増したように、藤堂には思える。年に似あわず老けこんだ人々が、去年よりずっと多く見られるような気がしてならないのだ。気のせいかもしれないが。それらの人々が、一旦老衰へ一歩踏み出すと、その老化傾向は加速度がついて進むのである。

その先を、藤堂は考えたくなかった。何となく判るような気がするのだ。そして、駒田を思い出す。多趣味だった駒田。ＳＦ好きだったあいつ。その駒田は、二年前に微生物学教室の教授に昇進した。あいつは、プロゲリアの恩恵をこうむった数少ない人間の一人だな、と藤堂は思う。教授も助教授も講師も、微生物学教室では上の方の連中が、全部プロゲリアに罹った。他の大学から招聘した移入教授までが、たった半年ののち、プロゲリアになって死んだ。それで駒田が、若冠三十四歳で、微生物学教室の教授に昇進した。運のいい奴だ、と藤堂は思う。秀才の堀口が、まだ講師にもなっていないというのに。――

なぜ、駒田を思い出したのか。それはあの、母校での第一例のプロゲリア患者が死んだ日に、彼が駒田と話した事を思い出したからだ。中生代の恐竜絶滅の原因が宇宙線の量の急増だという、理髪店で仕入れた知識をひけらかして、藤堂はそんな事には彼の十倍以上も詳しい駒田を、煙にまこうとした。

今やそれと同じ事が、人類、いや全哺乳類と鳥類の温血動物の上に訪れようとしている。なるほど、宇宙線は増加などしていないし、紫外線量も、放射能量も、そんな影響を及ぼすほど増加してはいない。でも、ＤＮＡは確実に崩れつつあるのだ。そして一歩一歩、温血動物たちは、破滅に向かって進んでいる。

それを防ぎとめようとは藤堂は考えてはいない。勿論、出来るとも思えない。そんな事は、彼より優秀な、学生時代から勉強に没頭した学究たちにまかせて、自分は一人一人の、彼を頼ってくる患者に、治療を施してやる。それでいいのだ。……

でも時には、さすがの藤堂も、たまらなく淋しくなる事がある。やがて……いや、もうすぐ、人間も恐竜のように、化石上でだけ見られる動物になってしまうのではないか、と考える時である。いや、もしかすると、人間が滅亡したら、もう地球上には知能のある生物が発生せず、化石も研究されず、人類はそ

の、かっての栄華を認められる事すらないかもしれないのだ。
　ある著名な学者が、どういう根拠からか、人間は絶対に絶滅しない、と強調しているのを、藤堂は知っていた。彼の説によれば、人間の、ほぼ〇・一パーセントは、ＤＮＡに障碍をうける事なく、生き続け、数百年にして再び繁栄を取り戻すのだという。しかし藤堂には、その言葉が気休めとしか思えない。もし本当に〇・一パーセントが生き残ったとしよう。地球人口が六十五億人――いや、それは五年以上前の統計だ。今はもっとずっと少ない筈だ――かりに四十億人いるとして、その〇・一パーセント、約四百万人が、全世界に、むらなく散らばることになる。だがこれは、人口がそれだけしかなかった昔の状態に戻るという事ではない。この場合、あと数十年の余命を持つ子供の数はごく少なく、譬え適齢者がいても適当な配偶者が見つからず、子孫繁栄の機会はほとんどないだろう。また、食糧が得られるかどうかも問題だ。
　そう、プロゲリアに侵されているのは、人間だけではなかった。犬も猫も鳥も、いや、鼠のような、しぶとい繁殖力の極めて強い獣ですら、その例に洩れないのだ。鼠などの小動物には、むしろ人間より頻繁に発生している。彼はかつて、小児科の医局で、ラッテの飼育係をしていた時の事を思い出した。あれは、あのラッテの仔は、やはりプロゲリアで死んだに違いない。あの時は何となく言いそびれて、教授に伝えないでしまったが。
――
　比較的大型の鳥獣には、かえってあまり顕著にプロゲリアが発生していないらしい。でも早晩、綱としての哺乳類は、同じ温血の鳥類と共に、種の数も個体の数も、著明な減少を余儀なくされるであろう。
　学者たちは、必死になってＤＮＡの損傷修復機能恢復の研究をしている。希望的な報告が時々発表される。だが、医師の藤堂はそれを信じはしない。人心に、少しでも希望をもたせるための、当局の意図ある報告にきまっている、と彼は考えている。もし、ＤＮＡの損傷を人力で修復できるなら、それは、人間が不老不死となる事を意味しているからだ。
　哺乳類と鳥類の減少は、動物相に大変化をもたらし始めている。一方昆虫などの節足動物には、人間に半寄生して生活しているもの以外、大増殖の兆しが見られた。爬虫類も、小型のものは増えている。色々な天敵が滅びつつあるからであろう。
　継ぐのはあいつらだろうか？　あんなつまらぬ奴らが、地球を支配するのだろうか。それとも、ある一定の時を経たあと、まったく異種の何ものかが、登場してくるのであろうか？
　駒田なら、この難しい問題に答を出してくれるかもしれない、と藤堂はまた駒田の事を思い出した。彼の言う事なら、想像がつくような気がする。
「もちろん、継ぐのは微生物さ」
　唇を舌でなめて、彼はそう言うだろう。微生物では、昆虫以上にしまらない話だ。

ふと彼は視線を、診療机の上の小動物に移した。一匹のやもりが、きょろきょろ眼を動かし、近くに蝿のくるのを待っている。彼はそれを払いのけようともしない。増えすぎた蝿をやもりが退治してくれるということもあるが、実の所、おっくうなのである。このおっくうさは、一種の老化現象のあらわれなのであろう。

老化――。この場合、個人だけでなく、種全体、いや哺乳網全体にそれが現れているのではないか、と藤堂は考えている。人間を含めたあらゆる温血動物が、無気力となっているのだ。まだ、老化を顕在させていないものまで。もしかすると、人間の細胞にＤＮＡがあって、その損傷が老化を発現させるように、人間という種、いや、哺乳綱、鳥綱という綱全体にも、ＤＮＡに相当する何ものかがあって、それが損傷を修復出来なくなったので、こうなったのではあるまいか？

最後の人間は誰だろうな、と彼は思ってみる。昔、駒田が話してくれたＳＦを、彼は覚えていた。最後の男性が、部屋の中で遺書を書いている。そこへ、ノックの音が……その男性は駒田かもしれない。運のいい男だから。藤堂自身は、自分がそれに該当する事はある筈がないと思っている。既に、体に老化の兆しが出現し始めているのだ。

机の上の診察用の凹面鏡で、藤堂は自分の顔を見た。中年、というより、初老に近い男の顔が、映っている。頭髪の三分の一が、白くなっている。皺も増えた。気にしていた老人斑も二つ三つ、見られる。下瞼の下がたるみ、膨らんでいる。歯の脱落も一本にとどまらない。どう見ても、四十前の男とは見えない。

でも、看護婦の中で一番若い、まだ二十四歳で未婚の彼女よりは若く見える。彼女は、一番若いのに、七人の女性従業員の中で、一番老化が目立つ。六十歳すぎに見えるのだ。若い男女にプロゲリアの症状が発現したときよくあるように、彼女は症状が明らかになった直後、自殺を企った。しかし、藤堂の治療で、彼女は死なずにすんだ。それ以来、彼女は諦観したのであろう、全然それを気にしなくなった。そして老化が、順序よく彼女の肉体を朽ちさせていった。前は染める事で隠していたが、今はそれをやめたので、彼女の頭髪は純白である。眉さえ白い。その上、皺と、しみ。声もしわがれて、老婆のような声になっている。動作も、鈍い。

あの娘の寿命も、もうすぐだろうな、と藤堂は考えている。でも、口に出したりはしない。彼女に対して、彼は何度も治療するようにすすめた。いくらかの延命効果を期待して。でも、彼女は首を縦にふらなかった。

やがて、彼女は立ち上がれなくなる。そうなったら、ほぼ一週間位で、彼女は枯れる。

「先生、次の患者さん、入ってもよろしいでしょうか」

うるおいのない、しわがれ声で、その彼女がいった。

「ああ、いいよ」

左手で聴診器を掴み、ぐっと頭を後にそらし、カルテとの間に充分な明視距離をとって、藤堂が言った。

十歳六ヶ月。男子。――

入ってきた。頭髪は殆んどない。顔は、典型的な鳥の顔をしている。よぼよぼの、老人が。

十歳のよぼよぼの老人は、両親に支えられて、診察室に入ってきた。足もとがおぼつかない。

「足に来てるんですか？」

「いいえ、白内障で、両眼共視力が全然ないんです」

母親が言った。もとは美人だったかもしれない。でも、どんな美人でも、肉体の年令が六十歳をこすと、老け役しかできなくなる。

簡単に問診し、打診をし、聴診をした。見ただけで診断がつくが、見ただけでは、患者の家族は納得してくれない。だから、腹部の触診も、藤堂はする事にしている。そして、胃のあたりに一つの塊を探りあてた。

硬い塊。胃癌に間違いはない。でも、手術を奨めはしない。高齢者の癌は進行しにくい。放っておいても、長く保つ。それに、手術などしたら、この子供には負担となり、かえって命を縮めるだろう。今のままでプログリアが進行していけば、癌はこの子供の命とりの原因にならない筈だ。必ず、老衰が先にくる。

気やすめの薬を貰い、数日の寿命ののびを保証されて、親子は帰っていった。診療を終えた藤堂は、両手の掌で眼球をマッサージした。老眼になっているのだ。そろそろ、老眼鏡が必要だ。

リリーン。急に若々しい響を、電話がたてた。看護婦の一人が、受話器をとる。

「先生、大学の堀口先生から、お電話です」

堀口か。藤堂は、ほっと溜息をついた。安心したのである。堀口が、まだ電話に出られる位の活力を持っている事を、知ったからだ。

「やあ、久しぶりだな、元気か？」

「聞こえん。もう少し、大きく喋ってくれ」

藤堂の眉が曇った。堀口の耳が、おそらく老人性の難聴を示している事を知ったからだ。

「それで、何か用事か？」

「ああ。まずお前に知らせなければと思ってな。駒田の女房が死んだんだ」

「駒田の女房が？　本当か？」

「本当だ。今日の午前十一時に、うちの大学の内科で死んだ。まだ、三十歳なのにな」

「何で？　やっぱり、プログリアか？」

「ああ。駒田には全然、老化の兆しがないのにな。彼はショックをうけているよ」

そうだろうな、と藤堂は思った。彼の結婚式には、藤堂も堀

口と共に出席した。美しい女性で、その時は若さにあふれ、みずみずしかった。熱烈な恋愛結婚ときいている。その彼女が、老いさらばえ乾物のようになって、死んだ。

駒田は、どんなに悲しんでいるだろう、と藤堂は思う。

「通夜は明日、葬式はあさってだ。くるね」

「うん、行く」

奇妙な、深い穴の底にひきずられていくような、沈んだ感じがした。

「じゃあ、その時な。歓待するぞ」

堀口の電話がきれた。藤堂は、自分の椅子に、腰を落下させるように、おとした。耳がジーンと鳴った。

俺も、もしかすると、女房や子供に先立たれてしまうのではないだろうか？　たとえようもない、嫌な想いであった。

耳鳴りは、なかなかおさまらなかった。いや、耳鳴りではなかった。庭で、蝉どもがうるさく鳴いていたのだ。蝉も、他の昆虫と同じく、増えている。天敵である人間の子供と、鳥類が減ったからであろう。

やがて……もう間もなく、人間は、多くの獣や鳥と共に、生命の舞台からひっこむのだろう。そう、藤堂は考えていた。

幕(ザ・カーテン・フォールズ)が下りてくる――

目に見えぬその幕は、もう額のすぐ前までおりてきているのかもしれない。そう藤堂は思った。

註「姦(かまびす)しい」は原文のママ

宇宙塵 第一八二号（一九八二年二月二十八日）より

嬉野泉（菅原豊次）著作目録（二〇一一・〇六・二十）

作成　秋山英時、協力：椎原悠介氏、立花生氏

【単行本】

1「エフ・エス Flight simulator」監修・主著矢野徹、
主婦の友社、一九九七年十一月
※　同著、電撃文庫―ＦＳファイル（０２１２）
メディアワークス、一九九七年十一月

【単行本・短篇集】

「吸血観音」ひたかみ出版社（宮城県石巻市）、（一九八五年）
※　収録作
「神曲鯨篇」初出誌　Ｓ・ＬＩＮＫＥＲ
昭和５４年６月１日。一九六〇年四月十一日改稿
「ノストラダムス２」星群ノヴェルズ№７所載
一九八二年七月一日、四月十八日加筆書足し。
「カーテン・フォール」宇宙塵一八二号所載
一九八二・二・二十八
「氷河鉄道」ボレアス二号所載　一九八三年五月
「アンモニウム・アンモニイ」書き下ろし
「吸血観音」書き下ろし
「鎖国」書き下ろし
「テレヴィジョン・エイジ」書き下ろし

【電子書籍】

1「ＦＳ〈神坂動乱篇〉」矢野徹と共作（前半矢野、後半嬉野）、
電子書店パピレス「オンライン出版」、一九九七
2「ＦＳ〈犬人襲来篇〉」矢野徹と共作（前半矢野、後半嬉野）、
電子書店パピレス「オンライン出版」、一九九七

【短篇】

1「天震」柴野拓美編『無限のささやき＜新「宇宙塵」
ＳＦ傑作選２＞』、河出文庫、一九八七年
2「三月来たる」『宇宙塵傑作選１＜日本ＳＦの軌跡＞』
出版芸術社、一九九七年

【雑誌】

＜ＳＦワールド＞
1　第一号「医学概論」、ファンジン・デビュー・コーナー、
一九八三年
※　同誌および＜小説推理＞誌に数篇発表。双葉文庫のアン
ソロジー『ショート・ショート劇場』一巻から四巻
（一九八五～六年）に再録。
『ＦＳ＜神坂動乱篇＞』『ＦＳ＜犬人襲来篇＞』矢野徹と共著
（前半矢野、後半嬉野）電子書店パピレス「オンライン出版」
（共に一九九七年）
＜ＳＦマガジン＞
1「インフィルトラブル」リーダーズ・ストーリー（投稿小説
コーナー）一九八〇年三月号（八〇頁～八三頁）、
作者　菅原豊次、選・評　豊田有恒
2「医療事故」「老衰」リーダーズ・ストーリー
（投稿小説コーナー）一九八〇年五月号
（一五〇～一五七頁）、作者　菅原豊次、選・評　豊田有恒

【同人誌】

＜宇宙塵＞

1「泥の惑星」一八〇号、一九八一年三月三十一日発行

2「カーテン・フォール」一八二号、一九八二年二月二十八日発行

3「ミトコンドリアン・カタストロフィー」一八五号、一九八四年五月十五日発行

4「天震」一八七号、一九八六年十二月三十一日発行

5「ラ・クカラチャ」一八九号、一九八九年十一月十五日発行

6「安楽死裁判」一九一号、一九九二年七月三十一日発行

7「三月来たる」一九四号、一九九七年五月十五日発行

8「三月尽」一九七号、二〇〇二年三月一日発行

9「氷河鉄道」（「ボレアス」誌特集、ボレアス第二号から採録）一九九号、二〇〇五年六月三〇日発行

＜星群＞

1「ノストラダムス2」星群ノベルズ7（オリジナルアンソロジー「光のメデューサ」、一九八二年七月一日発行

2「想像死亡」星群ノベルズ11（オリジナルアンソロジー「幻視脳」）、一九八六年七月一日発行

3「レバーのバラード」星群ノベルズ13（オリジナルアンソロジー「金剛流砂」）、一九八八年七月一日発行

4「牛の首」星群四一号、一九八一年四月一日発行

5「戦場」星群四三号、一九八一年八月一日発行

6「大脳のなくなるとき」星群四九号、一九八二年十一月一日発行

7「樹海」五十号、一九八三年五月一日発行

8「死体産業」星群五四号、一九八四年五月一日発行

9「胎児産業」星群五七号、一九八四年十一月一日発行

10「日本史抄訳」星群六一号、一九八七年十月一日発行

11「ファット・エイジ」星群六七号、一九八七年十二月一日発行

12「毒死の秋」星群五九号、一九八九年四月一日発行

＜ボレアス＞

1「闇の足音（短篇）」

2「第五紀（短篇）」

3「医学概論（ショート・ショート（以下、S&S））」

4「気塊の惑星（S&S）」第一号、一九八二年

5「時間よ速やかに（短篇）

6「氷河鉄道（短篇）」

7「コナン東へ（短篇）」

8「深夜のニュースをお聴き下さい（S&S）」第二号、一九八三年

9「消滅世界（短篇）」

10「惑星タフォス（短篇）」

11「意想奔逸（S&S）」

12「火炎山のコナン（短篇）」第三号、一九八三年

13「水鬼まんだら（短篇）」

14「シップ・ビルディング（短篇）

15「氷河の落とし子（中編）」第四号、一九八四年

16「切り裂きジャックの死（短篇）」

17「タフォスの戦い（中編）、第五号、一九八五年

18「死んだ夏（中篇）」

19「早過ぎるエロス（中篇）」第六号、一九八六年

20 「女難マンダラ（短篇）」
21 「雨の惑星（短篇）」第七号、一九八六年十二月二十六日
22 「蟻の穴（中編）」
23 「松阪（短篇）」第八号、一九八七年八月二十八日
24 「たそがれの時（中編）」
25 「サンギの遺産（短篇）」第九号、一九八八年四月八日
26 「ウォーリアー・オブ・エッグス（中編）」第十号、
一九八八年十二月二十七日
27 「異変幻想譜（短篇）」
28 「タフォスのプリムローズ（中編）」第十一号、
一九八九年九月二十三日
29 「キタイのコナン（1）（中編）」
30 「テラのプリムローズ（中編）」第十二号、
一九九〇年四月二十六日
31 「氷と灼熱（中編）」
32 「キタイのコナン（2）（中編）」第十三号、
一九九〇年十一月十四日
33 「キタイのコナン（3）（中編）」
34 「宇宙糞便学教授の憂鬱（長編）」第十四号、
一九九一年七月六日
35 「黄庭狂詩曲（中編）」
36 「アノマリック・ワールド（中編）」第十五号、
一九九一年十二月十二日
37 「東京大学体育学部（短篇）」
38 「廃虚（短篇）」第十六号、一九九二年十月二十七日
39 「アイネ・クライネ・ナハト・ムズィーク（中編）」
40 「悲しき宇宙人（短篇）」第十七号、
一九九三年四月三十日
41 「駆け足する癌（中編）」
42 「犬の森のコナン（中編）第十八号、一九九三年十二月三日
43 「ジャパン・クロニクル（前編・長編）」第十九号、
一九九四年七月二十日
44 「ジャパン・クロニクル（後編・長編）」
45 「全て我が敵（中編）」第二十号、一九九五年三月二十日
46 「クルエル・トウェルヴ（中編）」第二十一号、
一九九五年九月三十日
47 「新世代へ捧げるエレジー 第一部 ラットゥス・サピエンス
第二部 ハーメルン同盟（長編）」第二十二号、
一九九六年一月二十日
47 （続き）「新世代へ捧げるエレジー 第三部 人鼠戦争
第四部 改新世」第二十三号、一九九六年九月十一日
47 （続き）「新世代へ捧げるエレジー 第五部 エピソード
第六部 終新世」第二十四号、一九九七年五月二十日
※ 第12回ＳＦファンジン大賞（一九九七）受賞
48 「四国志 第一巻 第一回（長編）」第二十五号、
一九九七年十月二十五日
48 （続き）「四国志 第二巻」
49 「モンスター・ルンバ」連作・前編 阿部伸義、後編 嬉野泉、
第二十六号、一九九八年六月十九日
48 （続き）「四国志 第三巻」
50 「豚の時代」連作・出題編 嬉野泉（第二十八号にて完結）
51 「宿借り」連作・問題篇 阿部伸義、回答篇 嬉野泉
52 「遠大な計画」連作・問題篇 秋山英時、回答篇 嬉野泉、
第二十七号、一九九九年二月二十五日

50「豚の時代」連作・問題篇　嬉野泉、回答編　秋山英時
48（続き）「四国志　第四巻」
53「アフターミリオン」連作・問題篇　嬉野泉（第二十九号にて完結）、第二十八号、一九九九年十月十五日
48（続き）「四国志　第五巻　完結編」
54「黒い夏」連作・前編　阿部伸義、後編　嬉野泉
53「アフター・ミリオン」連作・回答編　嬉野泉（結局嬉野氏一人の作となる）、第二十九号、二〇〇〇年六月二十五日
55「二十世紀の遺産　第一回（連載長編）」
56「夜は太陽昼は月（短編）」第三十号、二〇〇一年二月二十一日
55（続き）「二十世紀の遺産　第二回」
57「大海のコナン（中編）第三十一号、二〇〇二年一月八日
55（続き）「二十世紀の遺産　第三回」
58「リターン・オブ……（中編）」第三十二号、二〇〇二年十二月十六日
55（続き）「二十世紀の遺産　第四回」
59「倭の国のコナン（短篇・不定期連載）」第三十三号、二〇〇三年十月二十九日
60「サハラのローマ（短篇）」第三十四号、二〇〇四年十月二十七日
※　この号から秋山が編集人となる。浜田玲「棋神（短篇）」が後に「宇宙塵」に転載される。
61「二十一世紀の幕開け（短篇）」第三十五号、二〇〇五年七月三十一日
62「残滓（短篇）」第三十六号、二〇〇六年五月三十一日
63「睡眠魔術（中篇）」第三十七号、二〇〇七年三月三十一日
64「エスパー・ハンター（短篇）」第三十八号、二〇〇七年十二月三十一日
65「豊臣時代史考（短篇）」第三十九号、二〇〇八年十月三十一日
66「時間礁（中編）」
67「蟻地獄（中篇）第四十号、二〇〇九年八月三十一日
68「ウィズアウト・ドグマ（中篇）」
69「女人天国（中篇）」第四十一号、二〇一〇年六月三十日
70「凍花（中篇）」
71「臭いのウィルス」第四十二号（終刊）、二〇一一年二月二十八日
※　全号に亘るご批評を「星群の会」の椎原悠介氏がご担当された。

<句集「海雲」>

一「地球一公転」合同句集「海雲」Ⅳ、平成三年八月一日発行　石巻海雲俳句会・宮城蟹太郎

<その他>

ミニコミ・タウン誌の「月間ＺＥＲＯ・ひたかみ」（昭和四十九年十月創刊、編集発行人・平塚洋）二〇一一年三月号（第三十七巻六号・通巻四百三十八号）の「海雲正月例会」に菅原九馬として「何となく今年も新年迎えけり」の一句、嬉野泉として「連載・宇宙のホラ男爵・第二十三話「瞬間転送事件（中編）」」が確認されている。おそらくこれらか、またはボレアス第四十二号掲載作画が絶筆であろう。

以上

編集後記

秋山 英時

ＳＦ同人誌「ボレアス」の本当の最終号をお届けします。

編集子がはじめてボレアスに投稿したのが第六号で一九八五年、編集を引き受けたのが第三十四号で二〇〇四年、追悼号までで通巻四十三巻、そのうち編集子によるものが十巻です。

ボレアスの編集に関して嬉野さんは煩いことを言わず、基本的には送られてきた原稿をそのまま掲載していました。なので、その方針は編集子も引き継ぎました。もっとも編集子が医学的な話を書いて抗鬱剤に関して間違った記述をした際には、「そんなつまらぬミスでお話を台無しにしてはもったいない」と優しく指摘してくれたこともあります。それ以外は、どの作者からの作品も良い箇所を見つけては、いつも褒められていたと記憶しております。

嬉野さんが多くの人たちから愛されていたのは、作品が素晴らしいのはもちろんですが、さらに人間的に大きな方だったからでしょう。

改めて、ご冥福をお祈りいたします。

なお、今号の編集に関しましては、なかなか時間の取れない編集子に変わって、椎原さん、立花さん、中沢さんに大変お世話になりました。記して感謝いたします。

ＳＦ同人誌「ボレアス」巻外号 「嬉野泉追悼号」 通巻第四十三号

二〇一一年〇七月三十一日発行
発行会　ＳＦ同人誌「ボレアス」
主　宰　菅原 豊次
編集者　秋山 英時
印刷所　コミックモール
連絡先　〒151-0073 東京都渋谷区笹塚 1-48-19-1212
郵便振替　10170-72993471（ぱるる）
home: http://www.asahi-net.or.jp/~NX5H-AKYM/bope/bope.htm
e-mail: nx5h-akym@asahi-net.or.jp